

八尾市文化財調査報告55
平成18年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書

2007年3月

八尾市教育委員会



はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内湖、河内潟に面し、旧大和川の支流となる多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数の遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書は、当教育委員会が平成18年度に(財)八尾市文化財調査研究会に委託して実施した市内の周知の埋蔵文化財包蔵地における個人住宅等の建設に伴う発掘調査や民間の各種事業の開発工事等に伴う遺構確認調査の成果を収めております。古墳時代の鍛冶に関連する遺構を確認した太田川遺跡や、これまで知られていなかった古墳を確認した花岡山遺跡など、事前の遺構確認調査においても弥生時代から中世を中心として遺跡・遺構の広がりを確認できる貴重な成果が得られました。

今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめとして、多くの人々に親しまれるとともに、保存・活用されていくことが文化財行政の重要な課題となっていくでしょう。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

八尾市教育委員会
教育長 森 卓

例 言

1. 本書は、平成18年度の国庫補助事業（市内遺跡発掘調査）として、大阪府八尾市内で実施した発掘調査の報告書である。
2. これらの調査は、八尾市教育委員会が平成18年度に(財)八尾市文化財調査研究会へ委託して実施したものである。
3. 本書には、平成18年度に実施した発掘調査及び遺構確認調査のうち、同年4月から12月までに実施した調査の結果を掲載した（掲載順序は遺跡名の五十音順となっている）。特に成果のあった調査については、その概要を掲載している。
また、平成17年度の1月から3月までに実施した調査についても掲載している。
4. 調査した場所及び位置については、巻頭に一括して位置図を掲載している。
5. 本書の作成にあたっては、(財)八尾市文化財調査研究会の調査担当者（原田昌則・西村公助・坪田真一・成海佳子・樋口 薫・菊井佳弥・島田裕弘）が執筆を行い、執筆分担は目次末に記した。
6. 本書に掲載している出土品及び図面は、埋蔵文化財の活用に資するため八尾市立埋蔵文化財調査センター（八尾市幸町4丁目58-2）において保管している。
7. 本書の編集は、八尾市教育委員会 生涯学習部文化財課が行った。

序 章

1. これまでの埋蔵文化財発掘届出及び通知の状況

平成8年度から平成17年度にかけての過去10年間の埋蔵文化財発掘届出及び通知の件数(表1参照)を概観してみると、八尾市における届出件数のピーク時であった平成8年度以降、民間による開発事業を中心として急激に落ち込み、平成17年度と比べると、200件以上減少している。ここ3～4年は、500件前後の件数でほぼ横ばい状態で、やや改善傾向にある。

平成17年度の埋蔵文化財関係統計資料(文化庁文化財部記念物課編2007年「埋蔵文化財関係統計資料」)によると、大阪府下の府及び市町村全体の埋蔵文化財届出及び通知総数の7,951件のうち、八尾市の届出件数は498件で、大阪府下の約6%を占めている。

平成8年度	749
平成9年度	717
平成10年度	623
平成11年度	652
平成12年度	604
平成13年度	528
平成14年度	510
平成15年度	491
平成16年度	473
平成17年度	498

表1 埋蔵文化財発掘届出及び通知件数(平成8年度～平成17年度)

2. 平成18年の埋蔵文化財発掘届出の状況

平成18年(平成18年1月～12月)の文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘届出及び発掘通知の件数は、総数513件で、その内訳は、第93条の届出412件、第94条の通知101件である(次頁表2埋蔵文化財届出一覧表参照)。前年度に比べて、埋蔵文化財発掘届出及び通知全体で、増加の傾向にあった。

そのうち、事前の発掘調査が必要との判断を行ったのが105件、工事着工時の立会調査が必要との判断を行ったのが140件、慎重工事との判断を行ったのが252件ある。

第93条の届出による国庫補助事業対象となる発掘調査には、「個人住宅建設に伴う発掘調査」と記録保存のための発掘調査の要否を判断するために必要な「遺構確認調査」がある。平成18年の発掘調査件数84件のうち、個人住宅建設に伴う発掘調査が21件(全体の25%)、開発事業に伴う遺構確認調査が63件(全体の75%)あった。

八尾市の国庫補助事業による発掘調査のうち、遺構確認調査の調査原因を見ると、共同住宅開発よりも、分譲住宅地の開発が増加してきている。また、鋼管杭打設等による個人住宅での地盤改良工事に伴う発掘調査が増加しているのも、近年の傾向である。

本報告書に調査成果を掲載している遺構確認調査の結果、記録保存のための発掘調査を必要と判断し、発掘調査を実施もしくは発掘調査の協議を行ったのは、久宝寺遺跡の2件や西郡廃寺の2件の合計4件ある。

	平成17年度			平成18年度									総数
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
発掘届出 (93条)	29	29	36	33	33	34	43	30	40	40	25	40	412
発掘通知 (94条)	10	7	5	9	5	10	6	4	13	7	12	13	101
発掘調査	3	2	9	8	11	10	16	6	9	14	9	8	105
立会調査	11	9	9	10	9	11	16	9	12	10	13	21	140
慎重工事	23	23	23	24	17	21	15	19	27	22	15	23	252
その他 (通達等)	2	2	0	0	1	2	2	0	5	1	0	1	16
国庫補助事業対象 実施調査件数	2	4	5	8	8	8	9	8	6	8	11	7	84
個人住宅発掘調査	1	0	0	4	0	1	4	3	1	2	2	3	21
共同住宅遺構確認 調査	0	1	1	1	2	1	2	3	1	2	1	0	15
分譲住宅遺構確認 調査	1	1	1	1	4	2	1	0	3	3	2	2	21
その他開発遺構確 認調査	0	2	3	2	2	4	2	2	1	1	6	2	27
調査遺跡内訳	・久宝寺 寺内町 小観小	・太田 堀川 取母池 久宝寺	・片岡 上田川 東郷池 東郷	・藤原① 中田① 東郷① 久宝寺 東郷 高岡山	・藤原② 宮部崎寺 東郷 久宝寺 東郷 東郷	・東郷 豊行 久宝寺 高安古墳 東郷 大田川 大田川 東郷 東郷	・東郷 久宝寺 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	・中田 太田 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	・藤川 久宝寺 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	・小の幸 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	・大正橋 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	・東郷 八尾寺六 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷 東郷	

表2 埋蔵文化財届出一覧表

3. 本年の発掘調査の概要

本年の主な調査成果の概要としては、八尾南遺跡の東側に隣接し、庄内式期の遺構を確認した「1-1. 太田遺跡(2005-366)の調査」、市内では郡川遺跡に類似する古墳時代中期の鍛冶遺構を新たに確認した「1-2. 太田川遺跡(2005-473)の調査」、古墳時代前期から中世の遺構を検出した「1-3. 東郷遺跡(2005-364)の調査」、主に奈良時代から平安時代の遺物が出土した「2-5. 久宝寺遺跡(2006-174)の調査」、弥生時代後期末の遺構より多数の完形を含む土器が出土した「2-6. 久宝寺遺跡(2006-298)の調査」、寺域の未確定な西郡廃寺に関係する時期の遺構を検出した「2-18. 西郡廃寺(2006-314)の調査」、装飾付須恵器を確認した大石古墳の西側に隣接した場所で、削平されていた新たな古墳(楽音寺9号墳)の一部を確認し、副葬されていたと考えられる須恵器等が出土した「2-20. 花岡山遺跡(2006-6)の調査」など、貴重な調査成果が得られている。

その他、「2-26. 弓削遺跡(2005-504)の調査」では、集落域と見られる埋蔵文化財包蔵地の広がりを知ることができる成果も得られている。

本文目次

はじめに

例言

序章

調査地位位置図 第1～10図	1～10
1. 平成17年度1～3月の調査	11
表1 平成17年度1～3月の調査一覧	11
1-1 太田遺跡(2005-366)の調査	(原田) 11
1-2 太田川遺跡(2005-473)の調査	(原田) 15
1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査	(坪田) 18
2. 平成18年度4～12月の調査	21
表2 平成18年度4～12月の調査一覧 1	21
表3 平成18年度4～12月の調査一覧 2	22
2-1 跡部遺跡(2006-8)の調査	(西村) 23
2-2 太田遺跡(2006-160)の調査	(島田) 24
2-3 太田川遺跡(2005-484)の調査	(樋口) 24
2-4 久宝寺遺跡(2006-13)の調査	(坪田) 25
2-5 久宝寺遺跡(2006-174)の調査	(島田) 27
2-6 久宝寺遺跡(2006-298)の調査	(坪田) 29
2-7 教興寺跡(2006-98)の調査	(島田) 32
2-8 郡川遺跡(2006-166)の調査	(菊井) 33
2-9 成法寺遺跡(2006-195)の調査	(樋口) 34
2-10 成法寺遺跡(2006-302)の調査	(菊井) 35
2-11 神宮寺遺跡(2006-196)の調査	(島田) 35
2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査	(島田) 36
2-13 大正橋遺跡(2006-242)の調査	(菊井) 38
2-14 東郷遺跡(2006-23)の調査	(成海) 39
2-15 中田遺跡(2005-506)の調査	(菊井) 40
2-16 中田遺跡(2006-285)の調査	(菊井) 40
2-17 西郡庵寺(2006-216)の調査	(島田) 41
2-18 西郡庵寺(2006-314)の調査	(島田) 43
2-19 西郡庵寺遺跡(2006-15)の調査	(菊井) 46
2-20 花岡山遺跡(2006-6)の調査	(樋口) 46
2-21 東弓削遺跡(2006-17)の調査	(成海) 57
2-22 水越遺跡(2006-164)の調査	(西村) 57
2-23 美岡遺跡(2005-503)の調査	(坪田) 58
2-24 八尾寺内町遺跡(2006-71)の調査	(樋口) 59
2-25 矢作遺跡(2006-104)の調査	(坪田) 60
2-26 弓削遺跡(2005-504)の調査	(菊井) 61

目 次

図版 1	1-1	太田遺跡(2005-366)の調査 (土器出土状況：東から)	1-1	太田遺跡(2005-366)の調査 (調査状況：東から)
	1-2	太田川遺跡(2005-473)の調査 (全景：北から)	1-2	太田川遺跡(2005-473)の調査 (西壁：東から)
	1-3	東郷遺跡(2005-364)の調査 (全景：西から)	1-3	東郷遺跡(2005-364)の調査 (北壁：南から)
	1-3	東郷遺跡(2005-364)の調査 出土遺物(1)	1-3	東郷遺跡(2005-364)の調査 出土遺物(5)
図版 2	1-1	太田遺跡(2005-366)の調査		出土遺物 I
図版 3	1-1	太田遺跡(2005-366)の調査		出土遺物 II
図版 4	1-2	太田川遺跡(2005-473)の調査		出土遺物
図版 5	2-1	跡部遺跡(2006-8)の調査 (周辺状況：東から)	2-1	跡部遺跡(2006-8)の調査 (1区西壁：東から)
	2-2	太田遺跡(2006-160)の調査 (7層下面：南から)	2-2	太田遺跡(2006-160)の調査 (北壁：南から)
	2-3	太田川遺跡(2005-484)の調査 (周辺状況：北東から)	2-3	太田川遺跡(2005-484)の調査 (1区東壁：西から)
	2-4	久宝寺遺跡(2006-13)の調査 (2区全景：南から)	2-4	久宝寺遺跡(2006-13)の調査 (3区全景：北から)
図版 6	2-5	久宝寺遺跡(2006-174)の調査 (1区北壁：南から)	2-5	久宝寺遺跡(2006-174)の調査 (6区西壁：東から)
	2-6	久宝寺遺跡(2006-298)の調査 (S X 501出土遺物：東から)	2-6	久宝寺遺跡(2006-298)の調査 (5区全景：西から)
	2-7	教興寺跡(2006-98)の調査 (2区第1面：北から)	2-7	教興寺跡(2006-98)の調査 (3区東壁：西から)
	2-8	郡川遺跡(2006-166)の調査 (周辺状況：北西から)	2-8	郡川遺跡(2006-166)の調査 (北壁・東壁：南西から)
図版 7	2-9	成法寺遺跡(2006-195)の調査 (周辺状況：南西から)	2-9	成法寺遺跡(2006-195)の調査 (1区東壁：西から)
	2-10	成法寺遺跡(2006-302)の調査 (1区全景：北東から)	2-10	成法寺遺跡(2006-302)の調査 (1区西壁：東から)
	2-11	神宮寺遺跡(2006-196)の調査 (1区北壁：南から)	2-11	神宮寺遺跡(2006-196)の調査 (2区東壁：西から)
	2-12	太子堂遺跡(2006-170)の調査 (2区北壁：南から)	2-12	太子堂遺跡(2006-170)の調査 (4区北壁：南から)

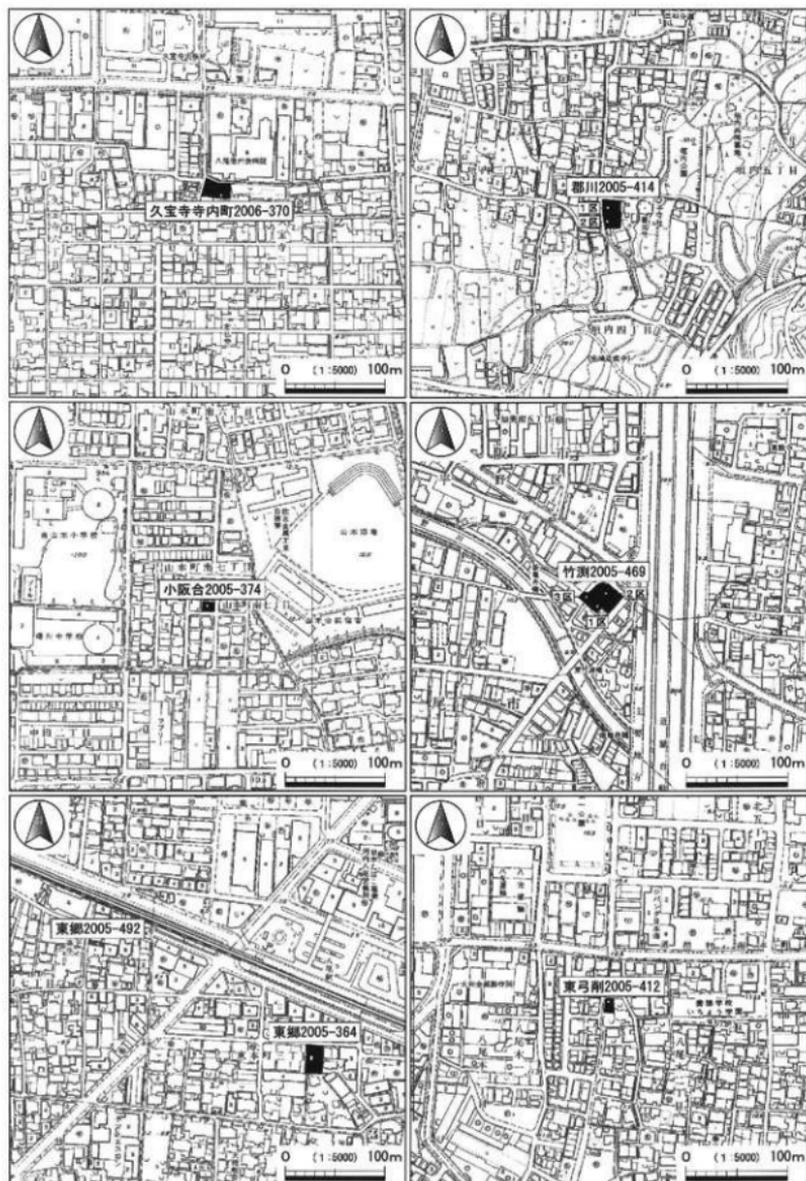
図版8	2-13	大正橋遺跡(2006-242)の調査 (周辺状況:北西から)	2-13	大正橋遺跡(2006-242)の調査 (1区東壁:西から)
	2-14	東郷遺跡(2006-23)の調査 (1区東壁:西から)	2-14	東郷遺跡(2006-23)の調査 (2)区第1面:西から)
	2-15	中田遺跡(2005-506)の調査 (周辺状況:東から)	2-15	中田遺跡(2005-506)の調査 (西壁と全景:東から)
	2-16	中田遺跡(2006-285)の調査 (周辺状況:南から)	2-16	中田遺跡(2006-285)の調査 (全景:南東から)
図版9	2-17	西郡廃寺(2006-216)の調査 (1区第1面:東から)	2-17	西郡廃寺(2006-216)の調査 (1区第2面:南から)
	2-18	西郡廃寺(2006-314)の調査 (1区第1面検出状況:西から)	2-18	西郡廃寺(2006-314)の調査 (1区第1面掘削状況:西から)
	2-18	西郡廃寺(2006-314)の調査 (SD101断面:南から)	2-18	西郡廃寺(2006-314)の調査 (5区第1面:西から)
	2-19	西郡廃寺遺跡(2006-15)の調査 (2区東壁:西から)	2-21	東弓削遺跡(2006-17)の調査 (北壁:南から) (SD1全景:南東から)
図版10	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		(SD1全景:北東から)
	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		(SD1西壁:東から)
	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		(SD1出土遺物:北から)
図版11	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		(SD1出土遺物:北東から)
	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		(SD1完掘:南東から)
図版12	2-22	水越遺跡(2006-164)の調査 (周辺状況:北から)	2-22	水越遺跡(2006-164)の調査 (西壁:東から)
	2-23	美園遺跡(2005-503)の調査 (2区遺物出土状況:西から)	2-23	美園遺跡(2005-503)の調査 (2区全景:南から)
	2-24	八尾寺内町遺跡(2006-71)の調査 (2区東壁:西から)	2-26	弓削遺跡(2005-504)の調査 (1区全景:南西から)
	2-25	矢作遺跡(2006-104)の調査 (全景:南から)	2-25	矢作遺跡(2006-104)の調査 (北壁:南から)
図版13	2-6	久宝寺遺跡(2006-298)の調査		出土遺物
図版14	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物I
図版15	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物II
図版16	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物III
図版17	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物IV
図版18	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物V
図版19	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物VI
図版20	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物VII
図版21	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物VIII
図版22	2-20	花岡山遺跡(2006-6)の調査		出土遺物IX
	2-12	太子堂遺跡(2006-170)の調査 出土遺物(11)	2-12	太子堂遺跡(2006-170)の調査 出土遺物(5)
	2-25	矢作遺跡(2006-104)の調査 出土遺物(2)	2-23	美園遺跡(2005-503)の調査 出土遺物(1)

調査地位置図

(平成17年度 1～3月の調査：第1・2図)



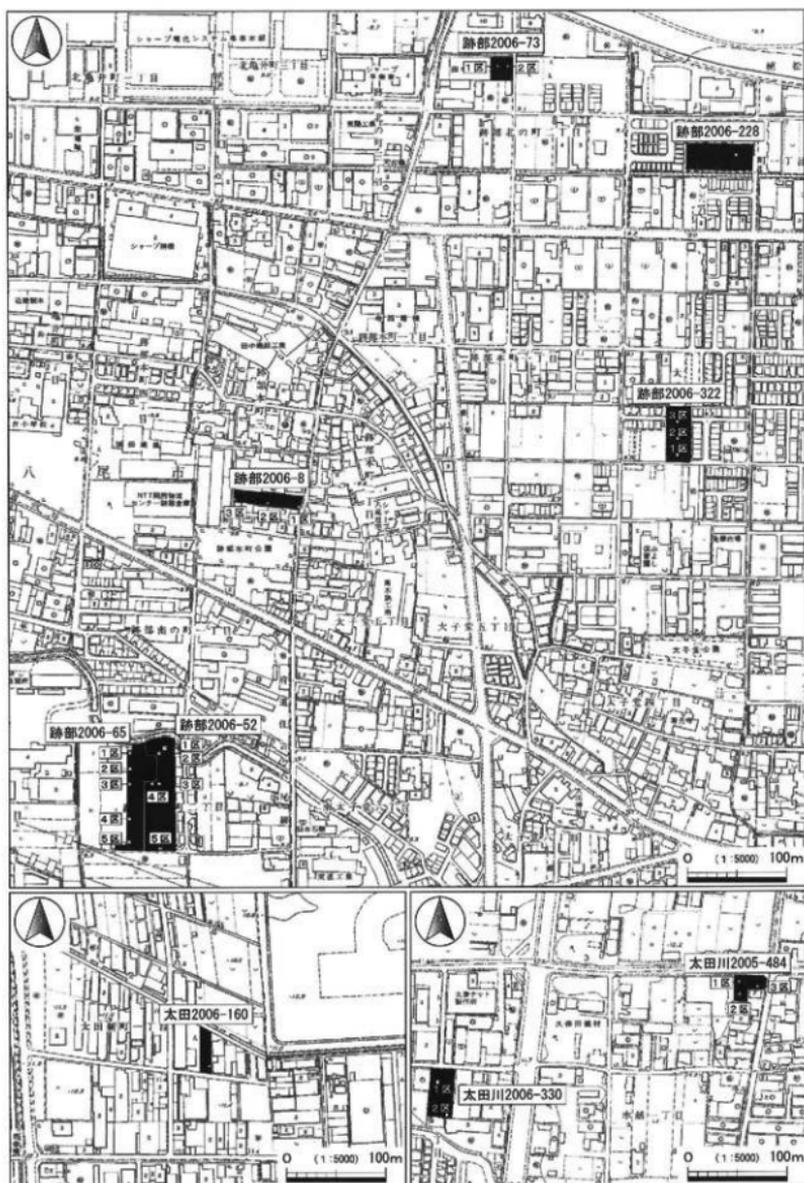
第1図 平成17年度1～3月の調査地位位置図 I



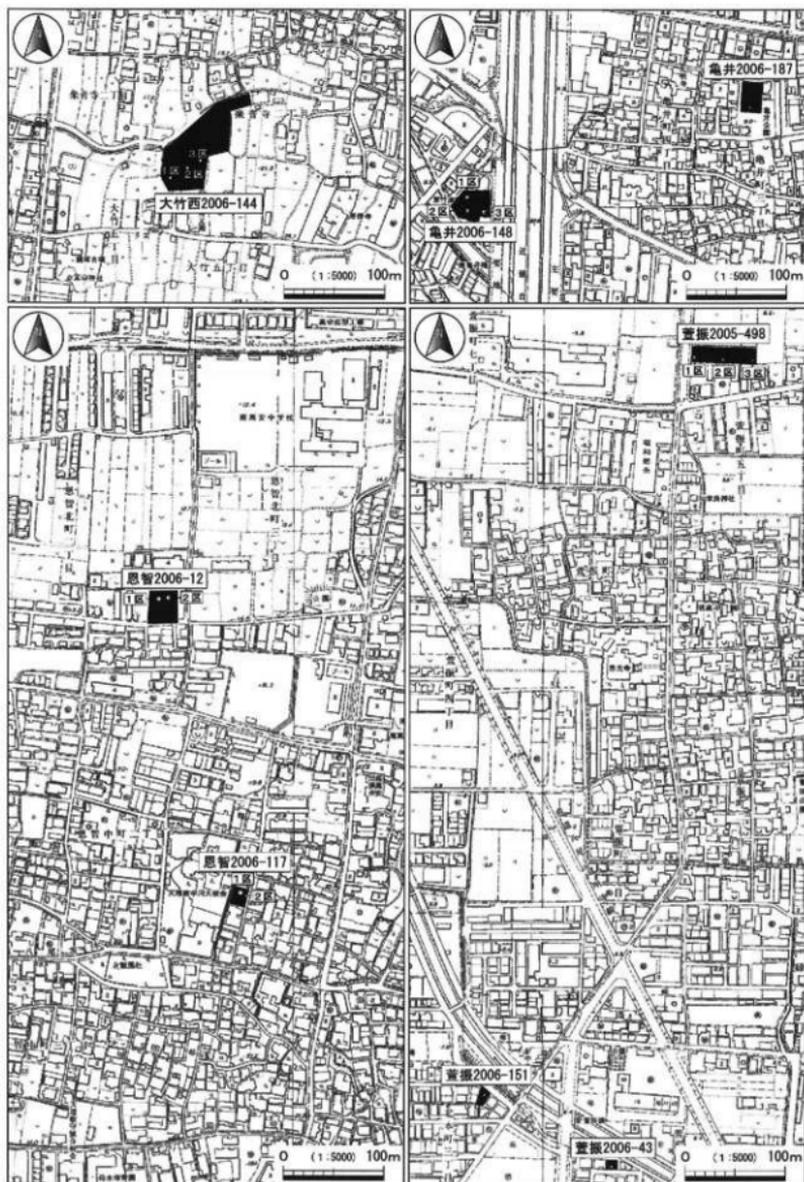
第2図 平成17年度1～3月の調査地位位置Ⅱ

調査地位置図

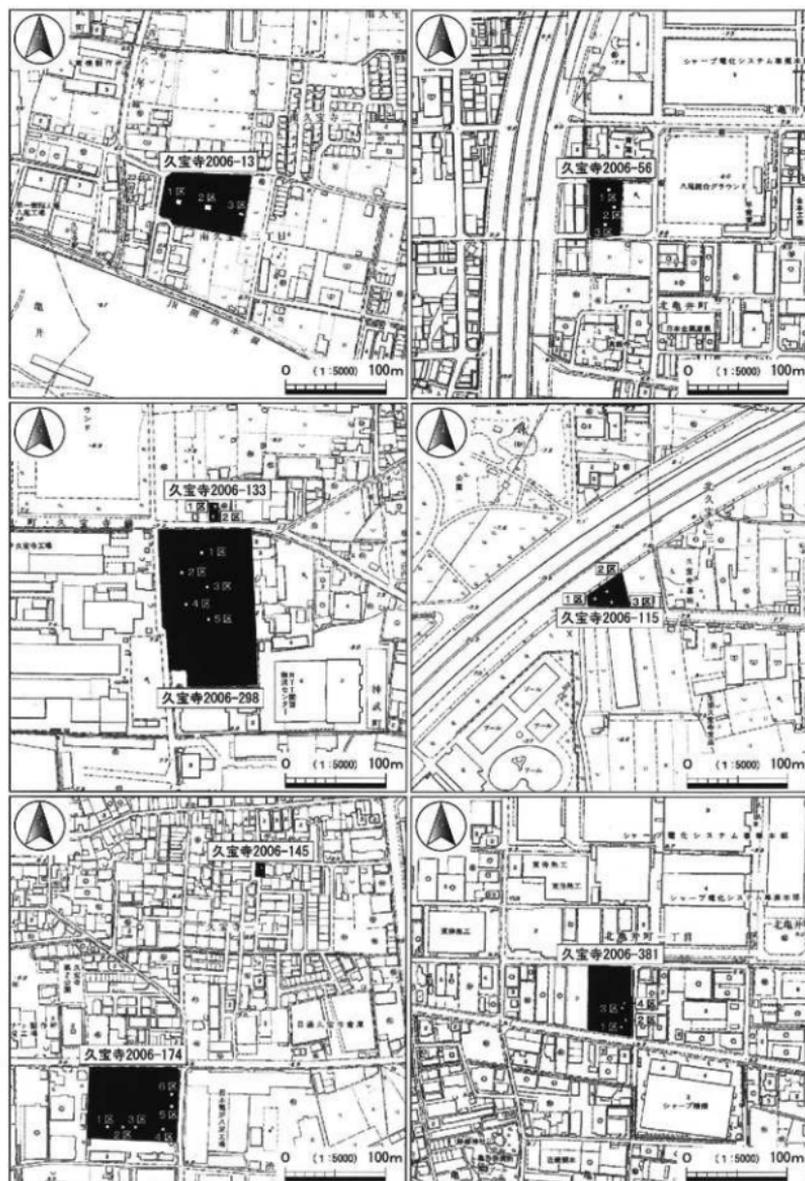
(平成18年度4～12月の調査：第3～10図)



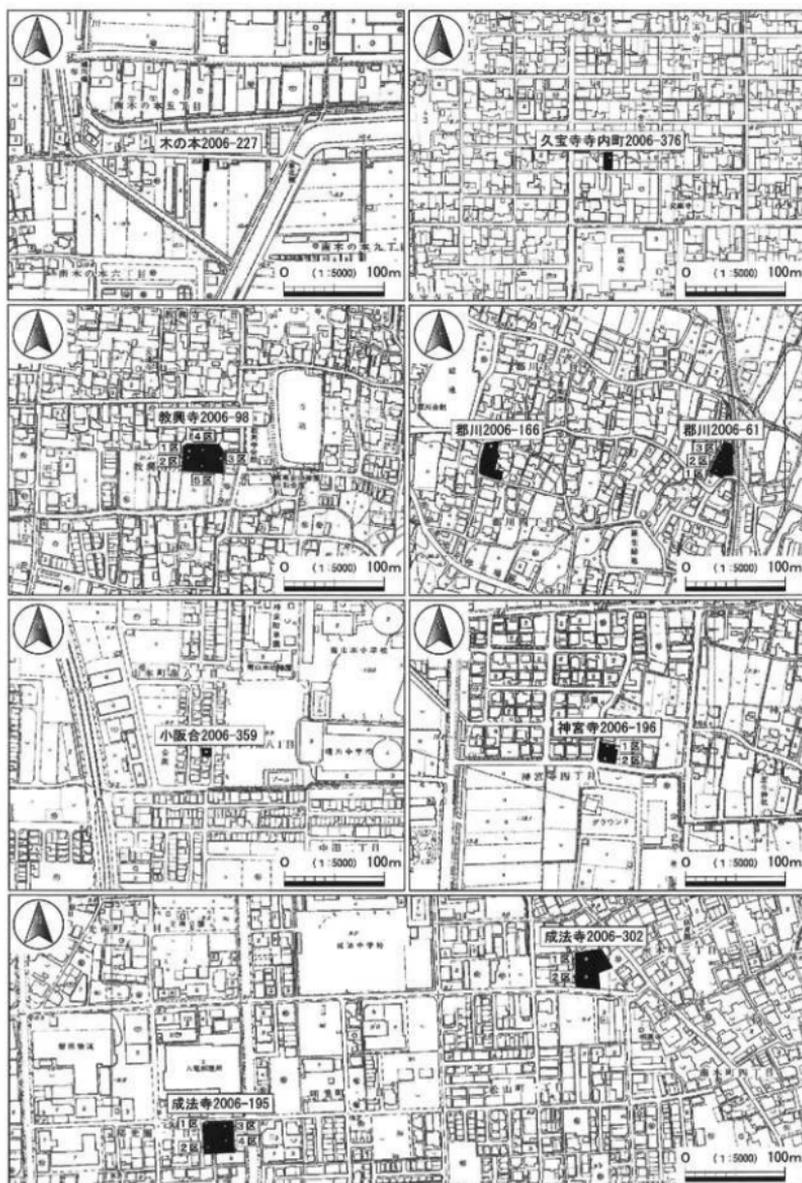
第3図 平成18年度4～12月の調査地位置図 I



第4図 平成18年度4～12月の調査地位位置図Ⅱ



第5図 平成18年度4～12月の調査地位位置図Ⅲ



第6図 平成18年度4～12月の調査地位置図Ⅳ



第7図 平成18年度4～12月の調査地位置図V



第8図 平成18年度4～12月の調査地位置図VI



第9図 平成18年度4～12月の調査地位位置図Ⅶ



第10図 平成18年度4～12月の調査地位位置図Ⅶ

1. 平成17年度1～3月の調査

1. 平成17年度1～3月の調査

表1 平成17年度1～3月の調査一覧

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	調査 目的	調査 対象	面積 (㎡)	備考	調査 担当者
藤倉遺跡 (2005-437)	大字町丁目90番の一 号	2006/03/27	分譲住宅(遺構確認 調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所 (高さ2.3m)	4.0	遺構・遺物はなし。	原田
太田遺跡 (2005-366)	太田新町1丁目217-2 3-4-5, 218	2006/02/02-07- 08	分譲住宅(遺構確認 調査)	人孔塔: 約3.0m×2.5m×9ヶ所 (高さ2.5m)	36.25	本書に掲載	原田
太田川遺跡 (2005-473)	大竹1丁目63-1, 63- 2(一部), 64, 65(一部)	2006/03/23-24	コンビニエンスストア (遺構確認調査)	防火水槽: 約3.0m×7.0m×1ヶ 所(高さ3.5m)	35.0	本書に掲載	原田
久宝寺遺跡 (2005-422)	南久宝寺3丁目30-1, 30-2各一併	2006/02/27	駐車場(遺構確認調 査)	基礎: 約3.0m×2.0m×1ヶ所 (高さ1.9m)	4.0	2階より95世紀前後の遺物が出 す。	樋口
久宝寺内町 (2005-370)	久宝寺3丁目15-1	2006/01/12	分譲住宅(遺構確認 調査)	人孔: 約2.0m×2.0m×1ヶ所 (高さ2.0m)	4.0	久宝寺守町町形成時の整地層を 確認。	西村
藤川遺跡 (2005-414)	坂内1丁目45番地1	2006/02/03	分譲住宅(遺構確認 調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所 (高さ2.3～3.0m)	12.5	時期不詳の上石堆積層を確認。	村田
小坂合遺跡 (2005-374)	山本町南7丁目105-7の 一部	2006/01/24	個人住宅発掘調査	建物基礎: 約2.0m×2.0m×1ヶ 所(高さ3.3m)	4.0	平安時代後期～鎌倉時代初期の 水田耕作土を確認。	西村
竹島遺跡 (2005-469)	竹島1丁目23, 19-3	2006/03/15	上地(遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×3ヶ所 (高さ1.8m)	12.0	遺構・遺物はなし。	原田
夏瀬遺跡 (2005-492)	本町7丁目7-2	2006/03/24	店舗ビル(遺構確認 調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ 所(高さ2.2m)	6.3	山形県の作土層を確認。	村田
夏瀬遺跡 (2005-364)	本町4丁目H59-5	2006/03/29	兵舎住宅(遺構確認 調査)	建物基礎: 約4.2m×3.0～2.2m ×ヶ所(高さ3.1m)	11.0	本書に掲載	原田
夏瀬川遺跡 (2005-412)	八尾木2丁目155番1の 一部	2006/02/13	個人住宅発掘調査	建物基礎: 約2.0m×2.0m×1ヶ 所(高さ2.5m)	4.0	遺構・遺物はなし。	荒川

1-1 太田遺跡(2005-366)の調査

(1) 調査概要: 分譲住宅に伴う遺構確認調査。約2.5×2.5m規模の調査区を9箇所設定した。調査区名は1～9区とした。調査で使用した標高は八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(太田新町1丁目: 11.2m)である。

【地層・検出遺構】

1区-7層(0～6層)を確認した。1層は作土。2層は7.5GY8/1明緑灰色中粒砂混シルト。3層が10YR4/2灰黄褐色砂質シルトで庄内式新相の遺物を含む。4層が酸化鉄・マンガン炭が顕著な5Y8/1灰白色粘土質シルト。庄内式新相の遺構構築面である。5層が5Y8/1灰白色粘土質シルト。6層が遺構埋土である。

2区-8層(0～7層)を確認した。1～3層までは1区と同様で、3層は庄内式新相の遺物を含む。4・5層は粘土質シルトが優勢で無遺物層である。6層は1区の4層に対応する。7層はブロックを含むもので近世段階の攪乱層である。

3区-9層(0～8層)を確認した。1・2層は1区対応。3層は10GY7/1明緑灰色砂質シルトである。4層が庄内式新相の遺物を含む。5層は1区の4層と同じ。6層が一部グライ化が進行した7.5Y8/2灰白色砂質シルトである。7・8層は河川内埋土で、7層ではラミナが確認できた。

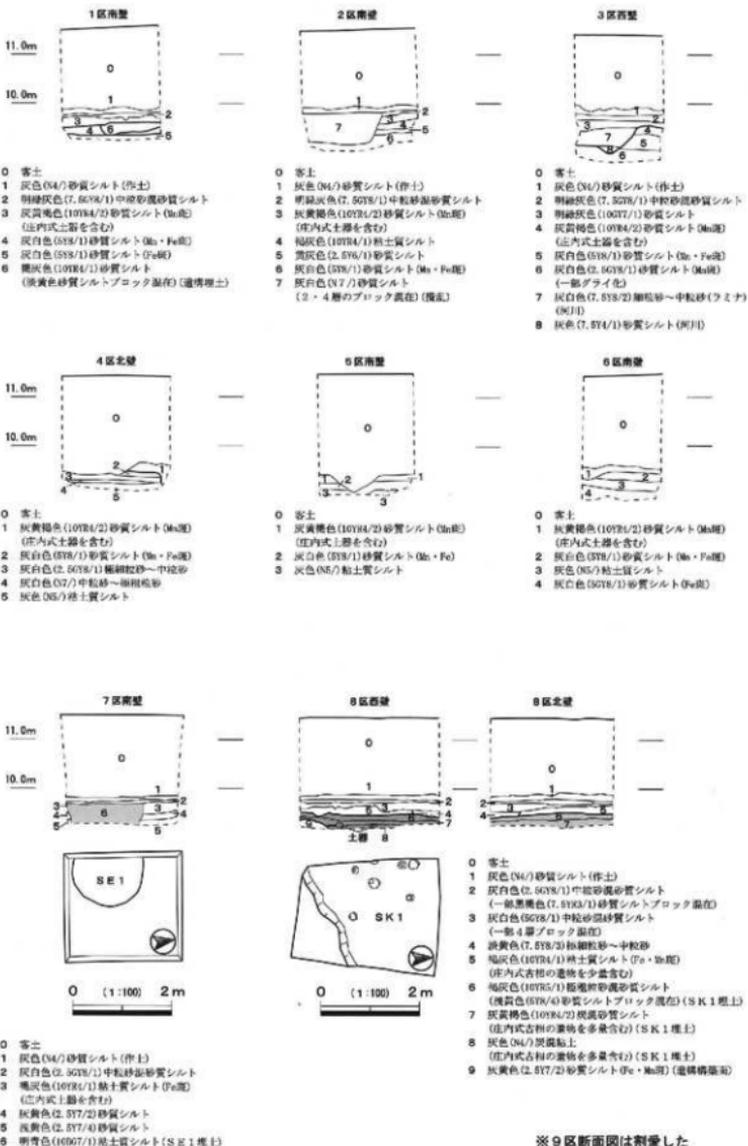
4区-6層(0～5層)を確認した。上部が削平を受けているため、1層が庄内式新相の遺物を含む包含層になる。2層は1区4層に対応。3・4層は極細粒～極粗粒砂を含む河成堆積層。5層はN5/0灰白色粘土質シルトである。

5区-4層(0～3層)を確認した。4区と同様上部が削平されており、1層が庄内式新相の遺物を含む包含層になる。2層が1区4層に対応。3層4区の5層に対応している。

6区-5層(0～4層)を確認した。4・5区と同様上部が削平されており、1層が庄内式新相の遺物を含む包含層になる。2層が1区4層に対応。3層が4区5層に対応。4層が5GY8/1灰白色砂質シルトである。

7区-現地表下約2.3mまでの調査を実施した。近世の井戸1基(SE E1)ならびに古墳時代初頭(庄内式期)の遺物包含層(3層)を確認した。

層位-0層は客土。層厚1.7m。1層は作土層。2層は2.5GY8/1灰白色中粒砂混砂質シルトでグライ化している。3層は10YR4/1褐灰色粘土質シルトで庄内式期の遺物を少量含む。層厚20cm前後。4層は



※9区断面図は割愛した

第11図 平・断面図

2.5Y7/2灰黄色砂質シルトで遺構ベース面。5層は2.5Y7/4浅黄色砂質シルトである。

SE1 3層を構築面とする近世の農耕用井戸である。西部が調査区外に至るが、検出部分で東西幅1.0m、南北幅1.4m、深さ0.4m以上を測る。埋土は10BG7/1明青灰色粘土質シルトである。

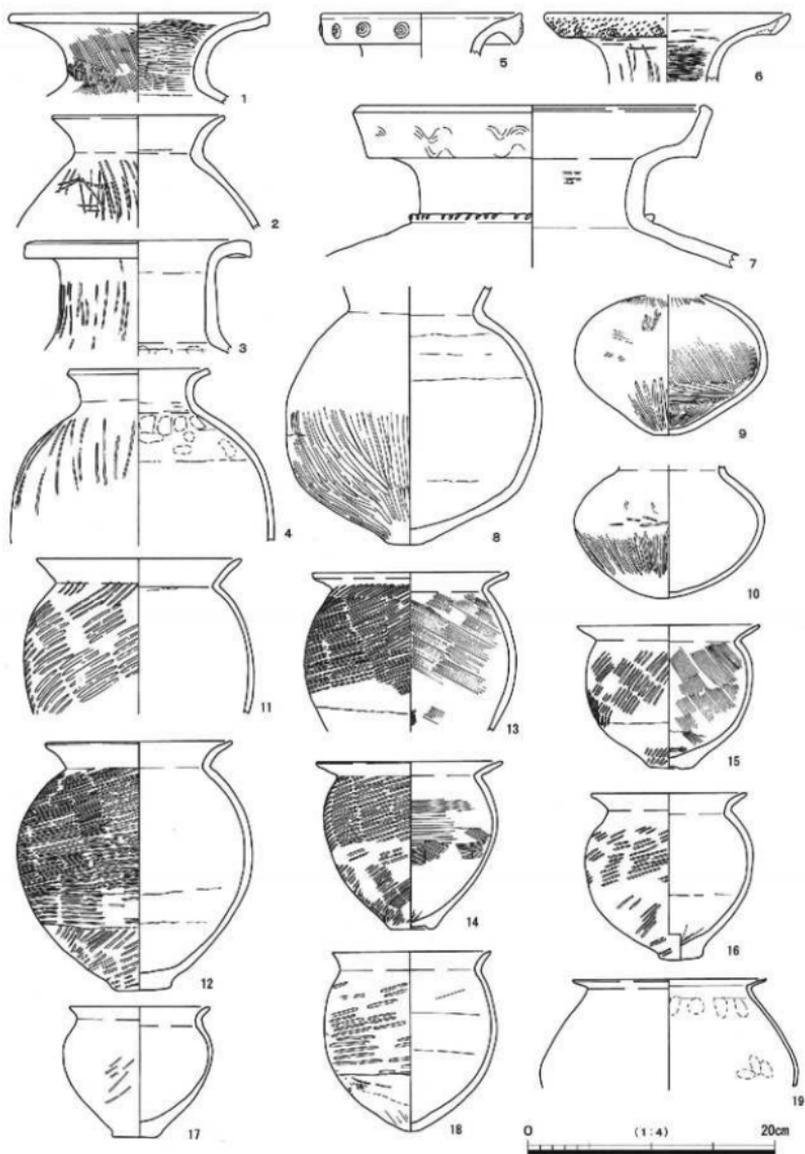
8区一現地表下約2.3mまでの調査を実施した。古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土坑1基(SK1)ならびに古墳時代初頭(庄内式期)の遺物包含層(5層)を確認した。

層位-0層は客土。層厚1.6m。1層は作土層。2層は2.5GY8/1灰白色中粒砂混砂質シルトでグライ化している。3層は5GY8/1灰白色中粒砂混砂質シルトで一部5層のブロック。4層は7.5Y8/3淡黄色極細粒-中粒砂。5層は古墳時代初頭(庄内式期)の遺物を含む10YR4/1褐灰色粘土質シルトである。6-8層はSK1埋土。9層は酸化鉄・マンガンを顕著な2.5Y7/2灰黄色砂質シルトで庄内式古相の遺構構築面である。

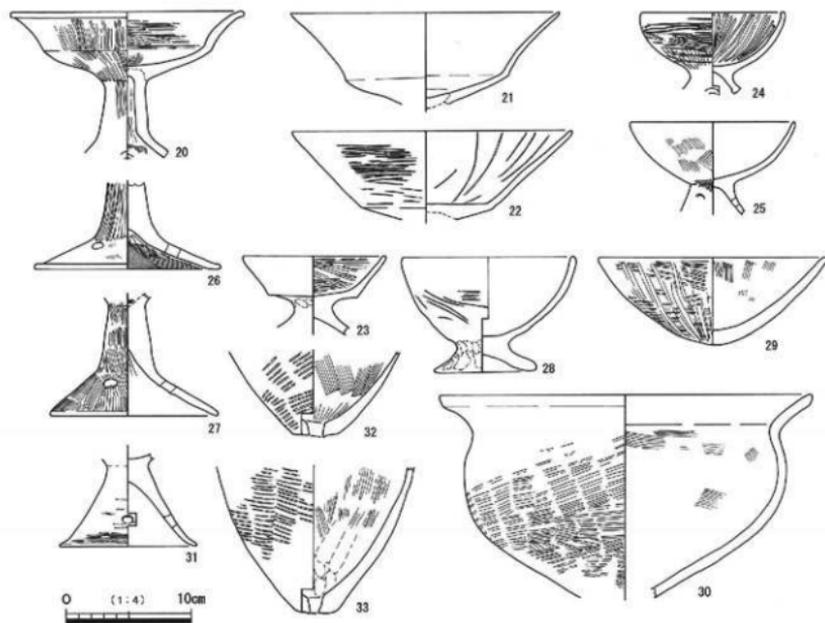
SK1 9層を構築面とする。南肩のみを検出しており、東・西・北は調査区外に至る。検出部分で、東西幅2.4m以上、南北幅2.8m以上、深さ0.25mを測る。埋土は3層(6-8層)で特に、7・8層からは弥生時代後期末-古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土師器類が大量に出土している。

9区-2層(0-2層)を確認した。1層は灰色極粗粒砂-細顆凝粘土質シルト。グライ化の顕著な水田耕作土である。2層は灰白色極粗粒砂-細顆凝粘土質シルト-シルト。水田耕作土である。

(2)出土遺物:SK1からは、弥生時代後期末-古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が密集し大量に出土した。総量はコンテナ12箱に及ぶ。出土した土器類は完形品が少なく細片化しているものが大半を占めるほか、酸性土壌の影響を受けたためか器壁面の遺存状況が不良なものが多い。31点(1-31)を掲載した。1-10は壺類である。1・2は広口壺。共に外反して開く口縁部を持つもので、1は口縁端部が上方に拡張し、垂直方向に幅広い端面を形成する。共に胎土のチャートを含む在地産である。3・4は共に頸部が垂直方向に伸びた後に強く外反する口縁部を持つ広口壺である。共に胎土に角閃石を含む生駒西麓産である。5・6は広口壺。5は垂下する口縁端面に竹管押圧円形浮文を施している。6は内傾する幅広い口縁端面全体に楔状の刺突文、端面下部に竹管押圧円形浮文と刻み目が施される。5・6は共に在地産。7は大形の二重口縁壺である。頸部と体部の境に上面に刻み目を持つ突帯が廻る。口縁端部外面に波状文が施文されているが、器面風化のため不鮮明である。在地産。8は口縁部の大半を欠くが、広口直口壺と推定される。体部は下半に明瞭な屈曲点を持つ。生駒西麓産。9は口縁部を欠くが、細頸直口壺と推定される。体部は扁球形で底部は小さな平底を呈する。在地産で、比較的精良な胎土が使用されている。10は口縁部を欠くが、丸底を呈する直口壺と推定される。在地産。壺は9点(11-19)である。11-13が口径15.3-16.5cm、器高20.4cmを測る中形品である。全容が明らかでない12は、体部が球形で三分割成形に沿って上部より右上がり、水平、右上がりのタケギ調整が行われている。口縁端部の形状では、丸味を持って終わる11・12と小さな端面を形成する13がある。3点共に在地産である。14-18は口径11.4-15.0cm、器高10.7-14.7cmを測る小形品である。体部は二分ないし三分割で、体部最大径を上位に持つ14・15・17と球形を呈する16・18がある。底部は突出し平底を呈する16・17、突出せず裏面がドーナツ底を成す14・15、尖り底の18がある。14・15・17・18が在地産、16が生駒西麓産である。19は東部四国系甕の細片である。全体に器壁が薄く風化し、器面調整は判然としない。胎土中に角閃石・黒雲母を含むもので、讃岐地方産のいわゆる「下川津B類」甕に分類される。讃岐地方からの搬入品と考えられ、中河内地域の古墳時代初頭前半(庄内式古相)土器との並行関係を知るうえで貴重な資料と言えよう。高杯類は8点(20-27)である。20-22は有稜高杯である。20が弥生系、21・22が庄内系高杯である。杯部外面のヘラミガキ調整は、20が縦方向、22が横方向で、21は器面剥離のため不明である。23は小形の有稜高杯で、庄内系高杯に分類される。24-25は碗形高杯。杯部調整は、24が外面に横位のヘラミガキ、内面に縦方向のヘラミガキ、25は外面に縦位のハケが多用されている。26・27は共に中実の有稜高杯の脚部である。裾部のスカシ孔は共に3個穿たれている。28-31は鉢。28は台付鉢では完形品である。脚部の作りが雑で、脚部末端は未成形である。29は碗形で尖り気味の底部を持つ中形の鉢である。30は大形鉢。口縁部が外反して大きく開くもので、復元口径30cmを測る。31



第12图 8区 SK1出土遗物实测图1



第13図 8区 SK 1出土遺物実測図2

は脚部。32・33は底部が尖り底の有孔鉢。共に外面調整はタタキ、内面は板ナデである。

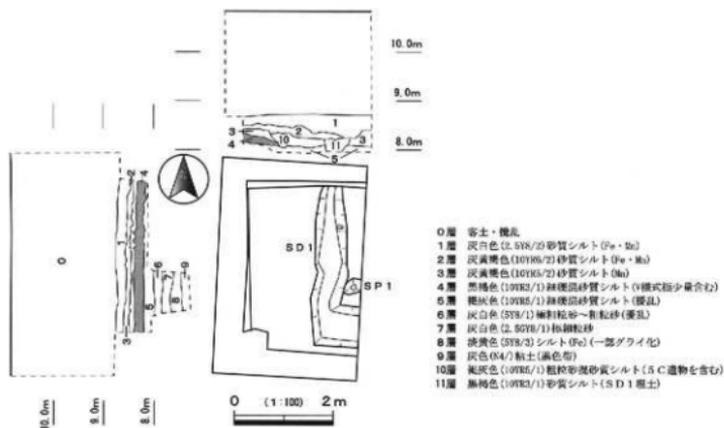
(3)まとめ：各調査区で、古墳時代初頭(庄内式期)に比定される遺物包含層の存在ならびに8区で古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土坑1基(SK 1)を検出した。これらの調査成果から、当地一帯では古墳時代初頭(庄内式期)時期を中心に集落域が展開していたことが推定される。

1-2 太田川遺跡(2005-473)の調査

(1)調査概要：店舗建設に伴う遺構確認調査。3×3m規模の調査区を設定して実施したが、古墳時代中期の遺構面および弥生時代後期の遺物包含層を確認したことから、調査規模を東西5m、南北7mに拡張した。調査で使用した標高は八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(大竹1丁目：11.6m)である。

【地層】現地表下約2.6m前後(9.2m前後)の3層上面で古墳時代中期の遺構を検出した他、弥生時代後期の遺物包含層(4層)を確認した。地層は、部分的に現地表下約3.5(標高7.25)m迄を観察した。

普遍的に存在した11層(0~10層)を基本層序とした。0層は客土および擾乱層。旧作土層は削平を受けており存在しない。層厚2.1m。1層は酸化鉄・マンガン斑が顕著な2.5Y8/2灰白色砂質シルト。2層は1層と同様、酸化鉄・マンガン斑が顕著な10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。3層は10YR5/2灰黄褐色砂質シルト。上面が古墳時代中期遺構構築面。4層は10YR3/1黒褐色細礫混砂質シルトで弥生時代後期の遺物を極少量含む。層厚0.15m前後。5層は10YR5/1褐灰色中粒砂混砂質シルトで、一部で生物擾乱が認められる。6・7層は灰白色の色調の河成堆積層である。層相は、極細粒~細粒砂。8層は一部グライ化が認められる5Y8/3淡黄色シルト。9層は黒色帯を形成するN4/0灰色粘土である。10層は



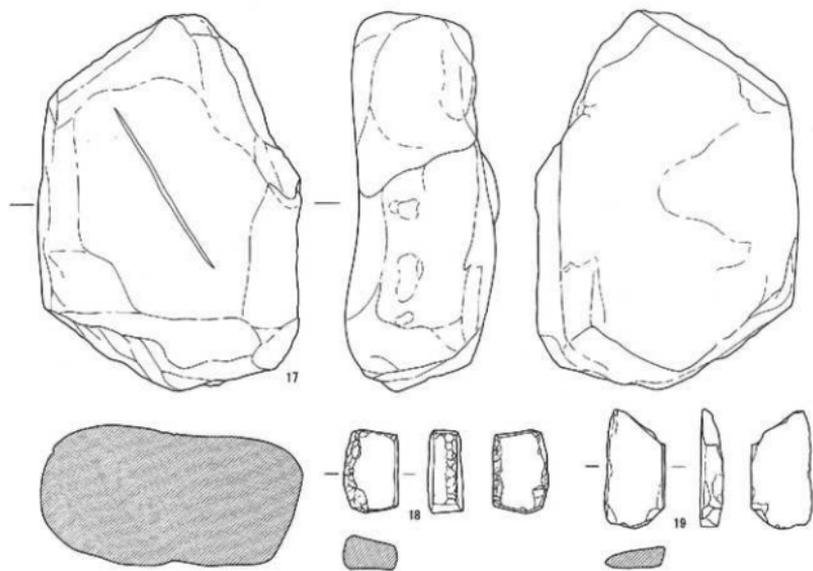
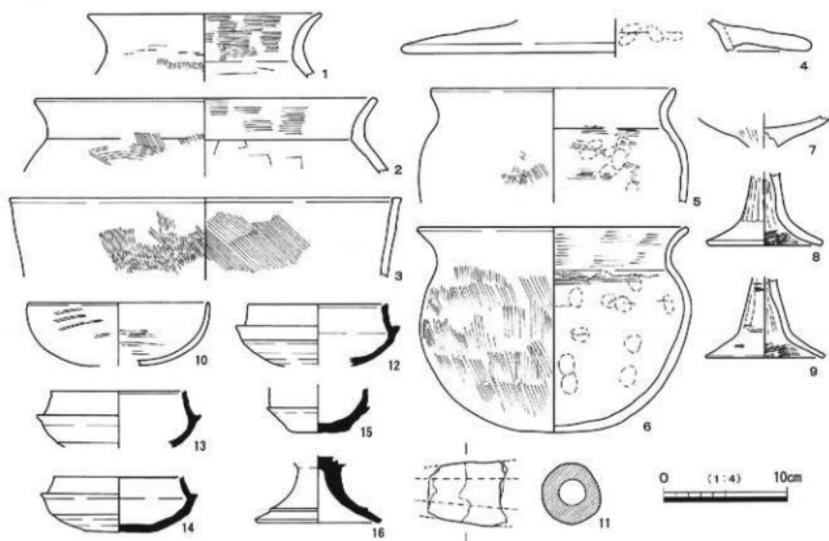
第14図 平面断面図

10YR5/1褐灰色粗粒砂混砂質シルトである。北壁のみで検出したもので3・4層切の溝埋土の可能性はある。

【検出遺構・出土遺物】古墳時代中期に比定される溝1条(SD1)、小穴1個(SP1)を検出した。SD1は調査区の東部で検出した。南北方向に伸びるが、調査区南部で「L字状」に屈曲する。検出長6.2m、幅0.8~1.2m、深さ0.25~0.45mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色砂質シルトである。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕、須恵器壺・蓋杯、磁石等がコンテナ1箱出土しているが、細片のものが大半を占める。19点(1~19)を図化した。1~10は土師器である。1・2は長胴甕の口縁部から体部の細片である。共に色調は褐灰色で、胎土中に角閃石を含む。3は甕の口縁部片である。内外面共に縦位のハケ調整である。赤褐色の色調で、胎土中に角閃石を含む。4は羽釜の鈎部分で、約1/3が残存している。鈎は、幅9cmを測る幅広のもので、貼り付け部分から先端部分に行くに従って緩やかな傾斜をもつ。色調は赤褐色で胎土中に角閃石を含む。土師器羽釜のなかでも、古い形態のものである。5・6は緩やかに外反する口縁部を有する鉢である。6がほぼ完形品で、口径21.4cm、器高16.8cm、体部最大径21.6cmを測る。7~9は高杯である。7が杯部、8・9が脚部である。10は椀である。全体に丁寧な作りで、胎土には精良な粘土を使用している。11は罐の羽口片。後端部の裾が「ハ」の字状に広がるのもので、羽口先端部分は黒色ガラス質滓が付着している。12~16は須恵器である。12~14は杯身。田辺福年のTK23型式~TK47型式(5世紀後半~末)に比定される。15は小形碗の小片である。底部から体部下半に灰かぶりが認められる。16は高杯の脚部である。裾部端面に面を持つものであるため、初期須恵器の中でも古い段階のものと推定される。17~19は石製品である。17は幅21cm、長さ31cm、重さ11.0kgを測る砂岩製の金床石と考えられる。使用面は上面と右側面の2面で、上面部分は全面に研磨を受けており、特に中央部の窪みが深い。中央部分には、斜めに走るやや深めの沈線が認められる他、中央部分を中心に火熱により褐色に変色した部分が認められる。18・19は砥石。18は5面、19は2面に使用面が認められる。石材は18が砂岩、19が粘板岩である。

SP1は調査区の東部で検出した。SD1の東肩を切っている。東西に長い楕円形を呈し、東西径0.6m、南北径0.6m、深さ0.26mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色砂質シルトである。出土遺物はなし。

(3)まとめ 調査地点の南約150m地点に位置する水越交差点の南東地点では、昭和57年に八尾市教育



第15图 出土遗物实测图

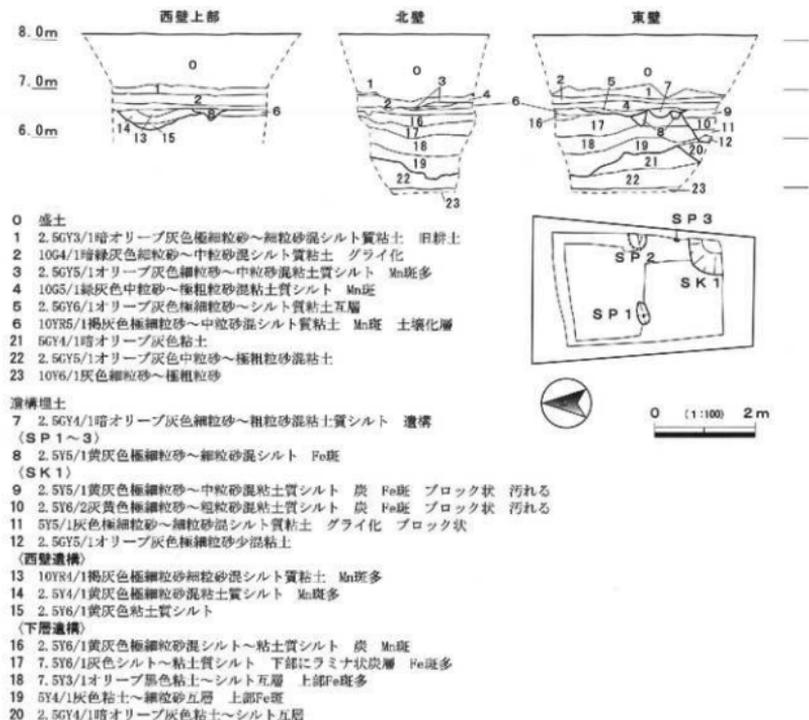
委員会により調査が行われ、標高9.6m付近で弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。今回の調査では、弥生時代後期の遺物包含層が標高8.2～8.4mで検出されていることから、北に傾斜を持つ微地形に影響された結果と理解される。古墳時代中期の遺構は、溝・小穴を検出し、遺物も豊富に出土したことから、当該期の居住域を構成していた地点であることが明らかとなった。調査地点の南約150m地点で平成5年に当調査研究会が実施した第1次調査(OTG93-1)の1区でも、当該期の遺構・遺物が検出されているため、これらを含めて広範な居住域が想定される。なお、出土遺物においては羽口、金床石、砥石等の鍛冶に関連した遺物を検出しており、集落を構成した集団の職掌の一端を示すものと考えられる。

参考文献

- ・原田昌則・成海佳子 1983「第3章太田川遺跡発掘調査概要報告」〔(財)八尾市文化財調査研究会報告3〕(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1994「Ⅱ太田川遺跡(第1次調査)」〔(財)八尾市文化財調査研究会報告42〕(財)八尾市文化財調査研究会

1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査

(1)調査概要：建設予定地内に4.2×3.0～2.2mの調査区を設定し調査を行った。総面積約11㎡、調査深度3.1m。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地南東約90mの道路上)。



第16図 平・断面図

T.P.+7.8m)を使用した。

【地層】0層は盛土、1層は旧耕土である。2～4層は攪拌の著しい層相で、中世～近世の作土層である。5層は東壁のみ見られた流水堆積層である。一時的な冠水の痕跡と捉えられる。6層は土壌化の著しい覆拵層で、古墳時代前期の土器を含んでいる。21～23層は水成層の様相である。

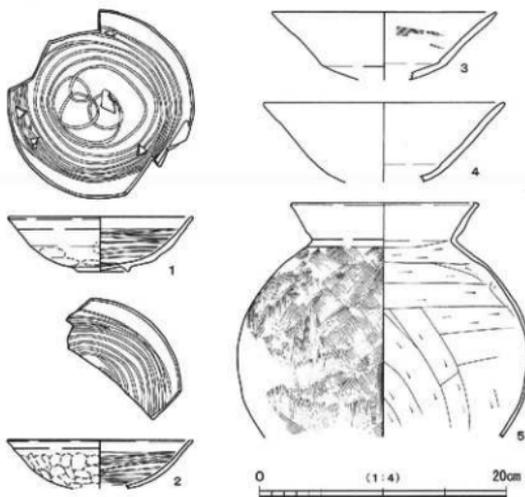
(2)検出遺構と出土遺物：現地表下約1.6mの16・17層上面(約T.P.+6.5m)で、土坑1基(SK1)・ピット3個(SP1～3)を検出した。遺構構築面としては6層上面(約T.P.+6.6m)である可能性もある。また平面的には捉えていないが、西壁南部で土坑(西壁遺構：13～15層)、東壁南部でピット(7層)を確認している。さらに遺構面を構成する16～21層については、深さ約1.3mを測る北東-南西方向の大規模な溝の埋土と考えられる。上層(16・17層)からは布留式期古相に比定される土師器壺・高杯が出土している。壺は土圧で押し潰された状況であった。

SK1 南東角で検出した土坑で、平面形は円形と考えられる。規模は直径0.7m以上・深さ約0.7mを測る。埋土はほぼ水平堆積の4層(9～12層)から成り、上部の9～11層はブロック状を呈する。13世紀中頃に比定される和泉型瓦器碗片が数個体分出土している。1・2を図化した。1は完形近くに復元され、口径15.0cm・器高4.5cm・高台径4.1cm・高台高0.5cmを測る。内面の暗文は、見込みの連結輪状～体部の渦巻き状が連続して施される。2は内面に圈線状暗文を施す。

SP1～3 埋土はいずれも8層である。SP1は長辺45cm・短辺25cmの平面楕円形を成し、底部中央やや西寄りには柱根が遺存していた。東西方向に約1.6mの間隔で並ぶSP1・2は、掘立柱建物を構成する可能性がある。

16・17層出土遺物 3・4は土師器高杯である。4は杯底部～口縁部の屈曲が緩やかで、内面に明瞭な段を成している。吉備地方からの搬入品と考えられる。5は布留式壺である。外面ハケ調整で、内面のヘラケズリは口縁屈曲部に及ぶ。布留式期古相に位置付けられる。

(3)まとめ：今回の調査では、西約100mで実施した第46次調査と同様に、古墳時代前期布留式期、及び中世の遺構・遺物が検出され、当該期の集落域が西に広がっていることが確認された。



第17図 出土遺物実測図



2. 平成18年度4～12月の調査

2. 平成18年度4～12月の調査

表2 平成18年度4～12月の調査一覧 1

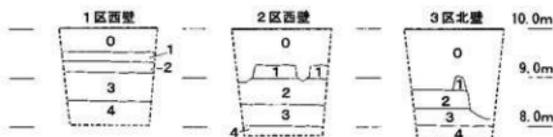
跡地名 (通称番号)	調査地	調査日	調査 目的	調査 対象	面積 (㎡)	備考	調査 担当者
跡地通達 (2006-8)	跡地本町3丁目95番1	2006/04/20	分譲住宅(遺構確認調査)	入札: 2.9m×2.0m×3f×1階(高さ2.0-2.3m)	12.00	本書に掲載	西村
跡地通達 (2006-42)	跡地南の町2丁目9-1	2006/05/15	分譲住宅(遺構確認調査)	入札: 3.0m×3.0m×4f×所・刃水溝: 4.0m×4.0m×1f階(高さ2.5-3.0m)	52.0	深溝と続く土層を確認。	坪田
跡地通達 (2006-85)	跡地南の町2丁目9-3, 19の各一部	2006/05/18・07/12	分譲住宅(遺構確認調査)	入札・管廊: 2.0m×2.0m×5f×所(高さ2.0-2.8m)	20.0	深溝と伴う地層構造を確認。	坪田
跡地通達 (2006-72)	跡地北の町2丁目13-4	2006/08/17	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 1.5m×1.5m×3f×所(高さ2.1-2.1m)	4.5	古墳時代中期以降の土層を確認。	西村
跡地通達 (2006-228)	跡地北の町2丁目12番(一)・13番(一)部	2006/10/04	共同住宅(遺構確認調査)	排水貯留槽: 2.5m×2.5m×1f×所(高さ2.3m)	6.25	深溝7.3m付近に埋め込みが確認できる(蓋性が高い)。	坪田
跡地通達 (2006-222)	太子堂丁2丁目2番	2006/12/06	分譲住宅(遺構確認調査)	入札: 5.0m×3.0m×3f×所(高さ2.1m)	47.0	遺構・遺物はなし。	西村
太田通達 (2006-160)	太子堂町1丁目184, 185, 186	2006/08/04	事務所(遺構確認調査)	貯留槽: 2.0m×2.0m×1f×所(高さ2.1m)	2.00	本書に掲載	島田
太田川通達 (2006-484)	水越1丁目9番・3番	2006/10/20	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎・浄化槽: 2.5m×2.5m×3f×所(高さ2.3-2.3m)	18.75	本書に掲載	磯口
太田川通達 (2006-330)	西宮町1丁目48番の一	2006/11/21	工場(遺構確認調査)	伊物基礎: 2.5m×4.0m×1f×所・3.0m×3.0m×1f×所(高さ2.6m)	19.0	近辺域の土層を調査。	坪田
大竹川通達 (2006-144)	大竹町E33, 34, 35	2006/07/24・25	施設増築(遺構確認調査)	伊物基礎: 2.5m×2.5m×3f×所(高さ2.5m)	18.75	近辺域の土層を調査。	島田
尾道通達 (2006-12)	尾道町2丁目91番の二, 95の一	2006/06/08	その他住宅(遺構確認調査)	浄化槽: 3.5m×3.5m×2f×所(高さ2.5m)	26.00	中～近辺の土層を確認。	坪田
尾道通達 (2006-117)	尾道町2丁目101	2006/07/03-04	個人住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 4.0m×4.0m×1f×所・1.5m×2.0m×1f×所(高さ1.7m)	19.0	前調査の結果により、調査範囲と遺構確認箇所が異なる可能性がある。	成瀬
尾道通達 (2006-148)	南尾道町2丁目107番	2006/07/27	倉庫・事務所(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×3.0m×3f×所(高さ2.0m)	27.0	深溝6.5m以下で河川堆積物を確認。	磯口
尾道通達 (2006-187)	尾道町3丁目30の一	2006/10/10	分譲住宅(遺構確認調査)	入札: 1.8m×1.8m×1f×所(高さ2.1m)	3.24	約5m不明の土層を調査。	磯口
宮道通達 (2006-495)	宮道町5丁目12	2006/05/26	分譲住宅(遺構確認調査)	入札: 1.5m×2.0m×3f×所(高さ2.0m)	9.00	非調査時代～調査時代の土層を調査。	成瀬
宮道通達 (2006-43)	宮道町1丁目141番の一	2006/06/01	個人住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.5m×2.0m×1f×所(高さ2.0m)	4.0	調査時代の土層を確認。	磯口
宮道通達 (2006-151)	七本町3丁目64-65	2006/08/19	個人住宅(遺構確認調査)	伊物基礎: 2.0m×2.0m×1f×所(高さ2.0m)	4.0	古墳時代の埋め込み地層を確認。	磯口
木の平通達 (2006-227)	木の平町4丁目42-3	2006/10/02	工場(遺構確認調査)	伊物基礎: 1.2m×2.0m×1f×所(高さ2.0m)	2.4	時期不明の土層を確認。	島田
久宝寺通達 (2006-13)	久宝寺町2丁目20番1-2	2006/04/18-19	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×5.0m×1f×所・6.4m×5.2m×1f×所・4.5m×2.7m×1f×所(高さ3.5m)	70.00	本書に掲載	坪田
久宝寺通達 (2006-56)	北尾道町2丁目205-6	2006/06/27	老人ホーム(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.5m×3.5m×3f×所(高さ3.2m)	36.75	古く～平成の遺構層を確認したほか、それ以前の土層も確認。	坪田
久宝寺通達 (2006-133)	久宝寺町14番1	2006/07/25	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×3.0m×2f×所(高さ3.0m)	18	奈良時代～平安時代中期の遺構を確認。	西村
久宝寺通達 (2006-145)	久宝寺町14番1の一	2006/08/29	個人住宅(遺構確認調査)	基礎部分: 2.0m×2.0m×1f×所(高さ2.0m)	4.0	深溝6.0～7.3mで河川堆積物を確認。	磯口
久宝寺通達 (2006-115)	北久宝寺町2丁目2	2006/09/12	個人住宅(遺構確認調査)	建物・タンク埋設部分: 3.0m×3.0m×3f×所(高さ2.2m)	27.0	河川堆積物を確認。	坪田
久宝寺通達 (2006-174)	南久宝寺町1丁目1番1-1番4	2006/10/24・25・31, 11/01	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×3.0m×6f×所(高さ3.0m)	54.00	本書に掲載	島田
久宝寺通達 (2006-295)	神武町17番	2006/11/10-11	工場(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×3.0m×8f×所(高さ3.0m)	45.0	本書に掲載	坪田
久宝寺通達 (2006-381)	北尾道町1丁目39, 40, 41番	2006/12/25	事務所(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.5m×2.5m×4f×所(高さ2.8m)	25.0	遺構・遺物はなし。	西村
久宝寺寺内町 (2006-376)	久宝寺町2丁目206番2	2006/12/20	個人住宅(遺構確認調査)	伊物基礎: 2.5m×2.5m×1f×所(高さ2.8m)	6.25	入札G(1977年)の石山倉庫に伴う土層を確認。	磯口
熊野寺通達 (2006-88)	熊野寺町2丁目24, 25の各一部	2006/10/10-13	分譲住宅(遺構確認調査)	入札・基礎部分: 2.0m×2.0m×5.5f×所(高さ2.5m)	20.00	本書に掲載	島田
藤川通達 (2006-61)	藤川町8丁目8番の二	2006/06/27	長尾住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.0m×2.0m×1f×所(高さ1.5m)	7.56	中～近辺の土層を確認。	成瀬
藤川通達 (2006-166)	藤川1丁目135番の一	2006/09/11	個人住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.5m×2.5m×1f×所(高さ2.0m)	4.00	本書に掲載	成瀬
小瀬川通達 (2006-359)	山本町南1丁目19番の一	2006/12/19	個人住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.5m×2.5m×1f×所(高さ2.0m)	6.25	鎌倉時代～非調査時代期～古墳時代の地層を確認。	西村
成茂寺通達 (2006-195)	成茂寺町1丁目20番1, 20番4	2006/09/19	分譲住宅・事務所(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.0m×2.0m×4f×所(高さ2.0-2.5m)	16.00	本書に掲載	磯口
成茂寺通達 (2006-302)	成茂寺町3丁目33番, 34番	2006/11/09	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 3.0m×3.0m×2f×所(高さ2.3m)	18.00	本書に掲載	西村
神宮寺通達 (2006-196)	神宮寺町4丁目28	2006/08/23	共同住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.5m×2.5m×2f×所(高さ2.5m)	12.50	本書に掲載	島田
太子堂通達 (2006-48)	太子堂町1丁目22 140の一	2006/07/10	分譲住宅(遺構確認調査)	建築物基礎: 2.0m×2.0m×1f×所(高さ2.0m)	4.0	調査範囲7.0m以内は土層が確認できず不明。	坪田
太子堂通達 (2006-170)	太子堂町2丁目72番1-5, 9-10, 19-21	2006/09/22	分譲住宅(遺構確認調査)	伊物基礎: 3.5m×3.5m×4f×所(高さ2.3m)	49.00	本書に掲載	島田

登録名 (大塚館番号)	調査地	調査日	調査 目的	調査 概要	面積 (㎡)	備考	調査 担当者
大正遺跡 (2005-320)	南大子堂4丁目78-2	2006/11/30	分譲住宅(遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ1.7~1.8m)	9.0	近世初期の河川、鎌倉時代以前の宅跡を調査。	西村
大正遺跡 (2005-242)	太郎3丁目16-2	2006/11/02	分譲住宅(遺構確認調査)	人孔: 1.5m×1.5m×4ヶ所(深さ2.0m)	12.0	本館に隣接。	西村
高家古墳跡 (2005-105)	島96丁目133	2006/06/19	分譲住宅(遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×3.0m×1ヶ所(深さ2.1m)	10.0	遺構・遺物はなし。	磯口
東洋遺跡 (2005-23)	本町1丁目24番	2006/05/31	東用住宅(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所・3.0m×3.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	15.25	本館に隣接。	成海
東洋遺跡 (2005-99)	元町2丁目14番	2006/06/12	上室遺跡(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	近世の鎌倉使用したほか、中世、古墳時代前期の対応層を調査。	成海
東洋遺跡 (2005-145)	元町2丁目60-68	2006/08/08	連絡路(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	5.55	本館本館行近江上車川の丸環状に位置することを確認。	坪田
中田遺跡 (2005-495)	羽根1丁目31	2006/09/13	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	中世以降の河川堆積物を確認。	樋口
中田遺跡 (2005-905)	中田1丁目71番4	2006/04/11	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.00	本館に隣接。	菊井
中田遺跡 (2005-159)	中田2丁目48番	2006/08/03	共同住宅・その他住宅(遺構確認調査)	貯留層: 3.0m×3.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	18.0	本館本館行近江上車川の丸環状に位置することを確認。	樋口
中田遺跡 (2005-189)	八尾北6丁目11番2(一帯)	2006/09/29	分譲住宅(遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	遺構と貯留層・土層を調査。	樋口
中田遺跡 (2005-279)	新町2丁目33番(一帯)	2006/10/12	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	鎌倉時代前期の遺構が少量を認め、残存、または遺失の可能性あり。	菊井
中田遺跡 (2005-285)	八尾北6丁目56番1	2006/10/24	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.5m×1ヶ所(深さ1.9m)	5.00	本館に隣接。	菊井
中田遺跡 (2005-313)	中田3丁目103	2006/11/16	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ1.6m)	4.0	遺構・遺物はなし。	菊井
中田遺跡 (2005-274)	八尾北6丁目22-1	2006/11/17	丁邊雑草(遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	9.0	古墳時代前期の土層等を確認。	樋口
中田遺跡 (2005-372)	八尾北6丁目28	2006/12/15	分譲住宅(遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×2ヶ所・2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.5)	16.5	古墳時代前期～前期の遺構を調査。	坪田
西郷遺跡 (2005-216)	小坂3丁目108-1,109-3,100-4,109-10,100-9	2006/11/10	貯留層(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.50	本館に隣接。	高田
西郷遺跡 (2005-314)	新町2丁目32, 52, 6-68, 1-69-7	2006/11/16-17	店舗(近接版)(遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×5ヶ所・2.5m×2.0m×4ヶ所(深さ3.0m)	61.00	本館に隣接。	高田
西郷遺跡 (2005-324)	春日4丁目56-3の1一帯	2006/11/22	倉庫跡(遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×1ヶ所(深さ1.4~1.4m)	9.0	近世頃の埋地建物遺構を確認。	菊井
西郷遺跡 (2005-15)	新町2丁目68-2	2006/04/20	作業貯留層・事務所(遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	8.00	本館に隣接。	菊井
西郷遺跡 (2005-51)	新町2丁目14-3	2006/05/24	店舗跡(分譲住宅)(遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ1.8m)	4.0	平安～鎌倉時代の作業を推察。	磯口
荒島山遺跡 (2005-6)	宮吉9丁目2-26, 27-28-7, 32-33, 34-35, 36-36	2006/09/24-25, 26-27-28-7, 05/01-02	個人住宅発掘調査	埋蔵品調査部分: 1.0m×14.0m×1ヶ所・2.0m×17.0m×1ヶ所・1.0m×3.0m×1ヶ所(深さ1.3~2)	61.50	本館に隣接。	磯口
東馬前遺跡 (2005-17)	東弓船3丁目78	2006/04/17	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.00	本館に隣接。	成海
東馬前遺跡 (2005-154)	八尾北3丁目68番及及び69番	2006/09/18	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.7m)	4.0	時期不明の上層を調査。	坪田
水越遺跡 (2005-81)	水越1丁目149	2006/05/30	倉庫・事務所(遺構確認調査)	建物基礎: 2.3m×4.0m×1ヶ所(深さ3.4m)	9.2	中～近世の生産施設遺構、古墳時代前期(内式式)の河川、也合層を調査。	坪田
水越遺跡 (2005-182)	大子(分譲)2番2	2006/07/28	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.7m)	4.0	中世以降の土層を確認。	島田
水越遺跡 (2005-164)	千原2丁目185	2006/07/31	個人住宅発掘調査	建物基礎: 1.5m×3.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	5.25	本館に隣接。	西村
水越遺跡 (2005-283)	新町3丁目72番の一帯	2006/11/06	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	10.0	平安時代前期の遺構が少量を認め。	坪田
水越遺跡 (2005-350)	千原1丁目87番及159番	2006/12/12	工場(遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×2ヶ所・2.0m×2.0m×4ヶ所(深さ1.0~2.7m)	34.0	遺構・遺物はなし。	磯口
美濃遺跡 (2005-503)	美濃町3丁目57-1, 58-1, 59-1, 60-1	2006/04/04	倉庫(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所・2.5m×1.7m×1ヶ所(深さ2.6m)	17.00	本館に隣接。	坪田
美濃遺跡 (2005-477)	美濃町2丁目35番(一帯)	2006/07/11	共同住宅(遺構確認調査)	貯留層: 2.5m×2.0m×2ヶ所(深さ1.3m)	8.0	埋蔵品を確認。	西村
美濃遺跡 (2005-300)	美濃町1丁目20番の一帯	2006/10/27	分譲住宅(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	中世以降の土層等を確認。	高田
八尾寺内町遺跡 (2005-71)	本町3丁目121番2の一帯, 121番7, 121番9, 121番110-一帯, 125番, 129番, 135番の一帯	2006/05/30	店舗(遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.50	本館に隣接。	樋口
八尾寺内町遺跡 (2005-360)	本町1丁目47番地	2006/12/11	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	8.0	遺構・遺物はなし。	西村
矢作遺跡 (2005-104)	沢本町3丁目59-25, 34, 35	2006/07/06	個人住宅発掘調査	建物基礎: 2.0m×4.0m×1ヶ所(深さ2.4m)	8.00	本館に隣接。	坪田
矢作遺跡 (2005-188)	安中町4丁目71番(一帯)	2006/09/21	共同住宅(遺構確認調査)	貯留層: 2.5m×2.5m×2ヶ所・建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	16.50	中世～近世の埋地建物遺構を確認。	菊井
舟形遺跡 (2005-504)	1'羽町3丁目18	2006/05/29	分譲住宅(遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	8.0	本館に隣接。	菊井

2-1 跡部遺跡(2006-8)の調査

(1) 調査概要：人孔部分に

2.0×2.0mの調査区を3ヶ所(東側を1区、中央を2区、西側を3区とする)を設定し、現地表(10.0m前後)下2.0~2.3m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地



第18図 断面図

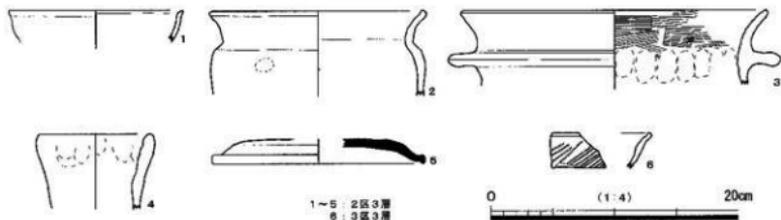
図に記載の標高値(調査地南東部に位置する道路のセンター：9.6m)を使用した。

【地層】1区：現地表(10.0m)下0.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.5m間において4層の地層を確認した。1層はN2/0黒色粗粒砂混粘土の旧耕作土である。2層は5B5/1暗青灰色細粒砂混粘土。3層は5B5/1青灰色細粒砂～粗粒砂で、中世以前の河川堆積物と思われる。4層は5B2/1青黒色粘土である。検出遺構、出土遺物はなし。

2・3区：現地表(10.0m)下0.7~0.9m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.3m前後までの1.4m間において4層の地層を確認した。1層は10B6/1青灰色細粒シルト質粘土。2層は10YR4/4褐色細粒～粗粒シルト。3層は10YR4/1褐色細粒砂混粘土で、奈良時代～平安時代頃の遺物を含む地層である。4層は7.5YR6/2灰褐色細粒シルトである。検出遺構はなし。出土遺物は3層内より、土師器および須恵器の破片が多く出土した。

(2) 出土遺物：2区の3層からは土師器・須恵器などの破片が出土した。このうち図化したものは(1~5)である。1は土師器杯である。口縁部は内湾し、端部は外側につまみ出し面をもつ。内外面ヨコナデを施す。2は土師器甕である。外反する口縁部で、端部は面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデを施す。外面全体に煤が付着している。3は土師器羽釜である。外反する口縁部で、端部は丸く終わる。鈿部はやや上向きに貼り付く。口縁部内面横方向のハケ、外面ヨコナデを施す。体部内外面ナデを施し、内面には指頭圧痕が縦方向に残る。鈿部はヨコナデを施す。体部外面には煤が付着している。4は土師器の製塩土器である。直立気味にやや外側へ伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。口縁部内外面ヨコナデを施す。体部内外面ナデを施し、指頭圧痕が残る。5は須恵器杯蓋である。平らな体部。端部は屈曲し面をもつ。口縁部および体部内外面回転ナデを施す。また、3区の3層からも土師器・須恵器などの破片が出土した。このうち図化したものは(6)である。6は土師器杯である。口縁部は内湾したのち外反する。端部は内側に肥厚し丸く終わる。口縁部内面放射状ミガキ、外面ヨコナデを施す。

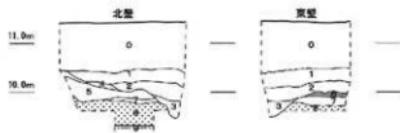
(3) まとめ：今回の調査では、中央の2区と西側の3区において奈良時代～平安時代の遺物を含む地層を確認したことから、同時期の集落が調査地の西側に広がっている可能性が高いことが判明した。また、1区の3層は河川堆積を示す砂層であり、中世以前この地に河川が存在していたと推測できる。



第19図 出土遺物実測図

2-2 太田遺跡(2006-160)の調査

(1)調査概要:平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所を、現地表(11.4m前後)下2.1m前後まで調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南部を東西に伸びる道との西交差点:11.4m)を使用した。調査地は当日も駐車場として使用されており、乗用車が駐車されていた。移動不能のため、教育委員会



第20図 断面図(S=1/100)

の指示を仰ぎ、申請者・代理人立会いの元、調査区位置を南に4m移動して調査を行った。

【地層】現地表(11.4m)下1.0m前後までは、現代の整地に伴う攪乱・盛土(0層)、直下の1層は旧耕土ではなく、盛土時に地表面が何らかの攪乱を受けているものと考えられる。以下現地表下2.1m前後までの1.1m間において9層の地層を確認した。1・2層は黄灰色〜にぶい黄色細粒砂混じり微粒砂〜シルト。微粒砂優勢でFe・Mnの沈着が顕著な耕作土である。土師器細片が含まれる。3層は灰色細粒砂混じり微粒砂。遺構埋土と考えられる。4層は灰色粗粒砂〜微粒砂。層の淘汰が悪く、部分的に6・7層起源と考えられるブロック土が含まれる。庄内壺の口縁部細片が出土した。5層は暗灰黄色中粒砂〜細粒砂混じり微粒砂〜シルト。下方ほど淘汰が悪く、部分的に6・7層起源と考えられるブロック土が含まれる。土師器細片が含まれ、炭化物を僅かに含む。6層は黒褐色細粒砂混じり微粒砂〜シルト。Fe・Mnの沈着が認められ、土師器細片を含む。土壤層もしくは攪拌層と考えられる。7層は灰色細粒砂混じり微粒砂〜シルト。層上部は6層からの溶脱によるFeの沈着がみられる。8層は灰黄色極粗粒砂〜細粒砂。水平方向のラミナが認められ、自然堆積層である。9層は灰〜灰オリブ色シルト〜粘土。平面では植物遺体が起源と考えられる炭化物がマール状に確認できる。自然堆積層である。

【検出遺構】0層下面・7層下面の2面で遺構検出を行った。7層下面において調査区北東隅に落ち込み状の下がりを確認した(断面図3層)。調査区東側は建物が近いため拡張は行っており、規模は不明である。3層からは、精良な胎土と、その焼成加減から平安時代以降の可能性が高い土師器片が1点出土した。遺構層から8層と見られる砂の流入が認められることと土師の摩滅の少なさから考えて、3層は調査区外に連続する攪拌層ではなく、遺構埋土の可能性が高いものとする。

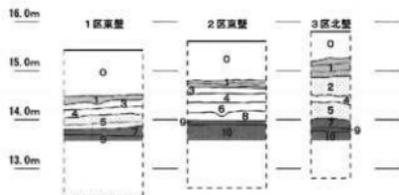
(2)まとめ:今回の調査では、細片ながらも時期が推定できる遺物と、遺構の可能性のある落ち込みを検出した。3層を鍵にして考えると1・2層は平安時代以降の耕作土と捉えられる、西側に高くなる段差が認められるが、上位層が確認できないため詳細は不明である。4・5層は共に淘汰の悪い層であり、整地土や大きな遺構の埋土の可能性も否定できない。古墳時代初頭の遺物が出土しているが、層中に下層のブロック土が認められることから巻き上げられた可能性もあり、時期決定には至らない。6層は安定した土壤層で下位の7層と一連で捉えられる。調査地の約150m西で調査された太田2005-366では、9.5mで古墳時代初頭前半の遺物を大量に包含する遺構が検出されており、遺構構築層(9層)と本調査7層との対応が想定される。今回の調査では未検出であるが、広範囲で考えた場合6層下面において遺構面が存在する可能性がある。

2-3 太田川遺跡(2005-484)の調査

(1)調査概要:平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡3ヶ所(1~3区と呼称)について、現地表(15.4~15.8m前後)下3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北を東西に伸びる市道中央:14.4m)を使用した。

【地層】現地表(15.4~15.8m)下0.6~0.9m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下3.0m前後までの2.1~2.4m間において10層の地層を確認した。1層はオリブ灰色〜青灰色粗粒砂〜極粗粒砂混粘土質シルト〜シルト。グライ化の顕著な水田耕作土である。3区では旧耕作土を確認した。2層は、3区で確認した青灰色粘土質シルト〜細粒砂。河川堆積物と推測される。3・4層は、

褐色～灰黄褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。攪拌層の可能性が高い。5層は、1・3区で確認した灰色～にぶい黄褐色シルト～中粒砂。河川堆積物である。6層は褐色～灰黄褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。雲状に酸化マンガンが沈着が認められる。7層は灰色～茶褐色粘土質シルト～シルト。弥生時代後期～古墳時代初頭の土壌化層と推測される。8層は褐色～灰黄褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。雲状に酸化マンガンが沈着が顕著である。攪拌層か。9・10層は黒褐色～暗灰色細礫混粘土質シルト。弥生時代後期～古墳時代初頭の土壌化層と推測される。



第21図 断面模式図(S=1/100)

【検出遺構・出土遺物】なし。

(2)まとめ：注目すべき成果として、標高14.0m付近において確認した弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される土壌化層の存在が挙げられる。この土壌化層は複数に細分される(7・9・10層)ほか、層厚も0.4m以上を測ることから、当該期にはかなり安定した地形環境を形成していた可能性が高い。当土壌化層上面を広く平面精査した場合、遺構が検出される可能性は極めて高いと思われる。

2-4 久宝寺遺跡(2006-13)の調査

(1)調査概要：建設予定地内に3箇所の調査区(1区：5.0×5.0m、2区：6.4×5.2m、3区：4.5×2.7m)を設定し調査を行った。西から1～3区。総面積約70㎡、調査深度3.5～2.3m。調査で使用した標高値は、第49次調査時設置の3級基準点(W.1：T.P.+8.904m)である。

【1区】

〈概要〉0層は既設建物のコンクリート敷、及び盛土。1層は旧耕土、2層もグライ化した近世の耕作土である。3～5層は高畑盛土・作土である。6層も攪拌が著しく、高畑構築以前の作土と考えられる。7層はMn斑を多量に含む土壌化の著しい層相で、上面で土坑1基(SK1)、溝1条(SD1)を検出した。8～10層の粘土層はFe・Mnを多く含む土壌化していると思われる。また10層には細かい炭粒が含まれ、やや攪拌状況が見られたことから、8～10層は作土の可能性が高い。11層以下は河川堆積層である。

〈検出遺構と出土遺物〉

SK1-直径2m程度の不整形円形を呈すると思われる。断面逆台形を成し、深さ約0.9mを測る。埋土は4層から成り、下部は粘土～極細粒砂の互層状、上部はブロック状の堆積である。底は湧水層に達し、井戸の可能性が高い。土師器・瓦器片が出土しており、時期は中世に比定される。

SD1-南北方向に直線的に伸び、幅約40cm・深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土のブロック状である。耕作溝と考えられる。時期不明の土師器・須恵器が少量出土した。

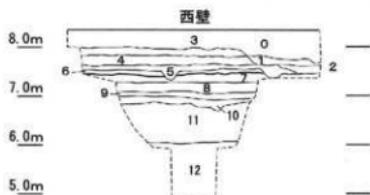
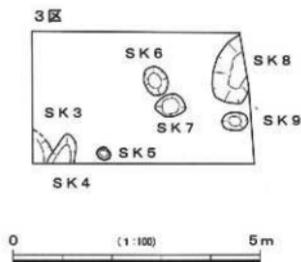
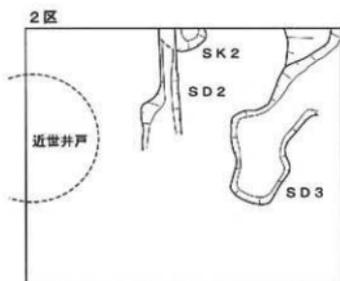
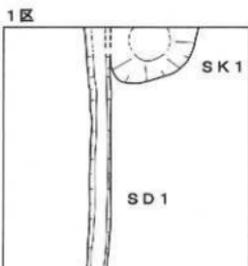
【2区】

〈概要〉0～2層は1区と同様。3層はややブロック状を呈し、作土と考えられる。4・5層はMnを多く含む土壌化層で作土と考えられる。中世頃までの土器片を含む。6層以下は水成層である。6層はMnを多量に含む土壌化が著しい層相で、5世紀代に比定される土師器が出土した。この上面で土坑1基(SK2)、溝2条(SD2・3)を検出した。調査は実施していないが、調査区西部で近世井戸を確認した。

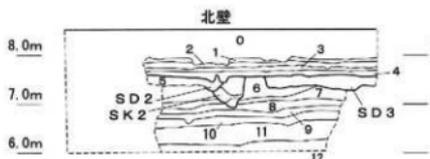
〈検出遺構と出土遺物〉

SK2-直径0.9m程度の不整形円形を呈すると思われる。断面逆台形を成し、深さ約65cmを測る。埋土は3層から成り、上から10YR6/1褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、10YR5/1褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土、5G4/1暗緑灰色粘土で、下層には炭を含む。遺物は出土していない。

SD2-南北方向に伸び、幅30～80cm・深さ10～20cmを測る。5層により埋まっている。遺物は出土していない。耕作溝と考えられる。



- 0 盛土
 1 10GY3/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土：旧耕土
 2 5G4/1暗緑灰色極細粒砂混粘土
 3 10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂少混シルト質粘土
 4 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
 5 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土
 6 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土
 7 10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土
 8 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂少混粘土
 9 10YR5/1褐灰色細粒砂少混粘土
 10 2.5Y4/1黄灰色粘土
 11 7.5Y5/1灰色粗粒砂～シルトの互層
 12 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト 植物遺体



- 0 盛土
 1 10GY3/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土：旧耕土
 2 5G4/1暗緑灰色極細粒砂混シルト質粘土
 3 2.5Y6/2灰黄色細粒砂少混粘土
 4 10YR6/1褐灰色粘土質シルト
 5 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土
 6 10YR5/1褐灰色シルト～極細粒砂
 7 10YR6/1褐灰色シルト
 8 10YR6/3にぶい黄褐色粘土～シルト
 9 7.5Y5/1灰色粘土
 10 7.5GY6/1緑灰色シルト～粘土の互層
 11 5GY6/1オリーブ灰色粘土の互層
 12 2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂～細粒砂互層



- 0 盛土
 1 10GY3/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土：旧耕土
 2 5G4/1暗緑灰色極細粒砂混シルト質粘土
 3 10YR6/1褐灰色粘土質シルト
 4 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土質シルト
 5 2.5Y6/2灰黄色粘土
 6 2.5Y6/1黄灰色粘土
 7 N5/0灰色粘土
 8 N6/0灰色極細粒砂～細粒砂

第22図 平・断面図

SD3-北東-南西方向の溝。底部付近のみの検出で全容は不明。落ち込み状の遺構の可能性がある。北壁では幅2.2m以上を測る。埋土は上層が10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂混粘土、下層が10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土(Mn斑・炭を多く含む)。6世紀代の土師器・須恵器が出土した。

近世井戸-桶杵を備えた井戸で、掘方直径は2.5m程度である。調査中に完全に崩壊した。

【3区】

〈概要〉0～2層は2区と同層。3・4層はMn・Feを多く含み、やや攪拌の見られる土壌化層である。4層上面で、3・4層を構築面とする土坑7基(SK3～9)を検出した。5層以下は水成層である。

〈検出遺構と出土遺物〉

SK3-断面逆台形を成し、深さ約30cmを測る。埋土は上・下層から成り、下層は10YR6/1褐灰色中粒砂混粘土質シルトのブロック状、上層は3層により埋まっている。

SK7-直径47×62cmの楕円形を呈し、断面逆台形を成し、深さ約32cmを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土のブロック状で、細かい土器片を多く含む。時期不明の土師器・須恵器が出土した。

SK8-検出部分で幅0.8m・長さ1.6mを測る。断面逆台形を呈し、深さ約30cmを測る。埋土はMn斑を多く含む10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土である。5～6世紀の土師器・須恵器が出土している。

SK4～6・9-SK8と同様の埋土で、深さ10cm程度の浅い土坑である。SK4から薄手丸底式製塩土器と思われる土師器片、SK6からは6世紀代の須恵器片が出土している。また北壁内でも同様の埋土の土坑状の遺構が確認できた。

(2)出土遺物:

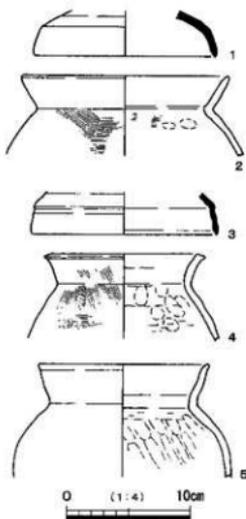
2区SD3-1は須恵器杯蓋で、口径14.8cmを測る。時期は6世紀後半に比定される。

2区6層-2は土師器甕で、口径17.0cmを測る。調整はハケが認められる。時期は5～6世紀代。

3区SK6-3は須恵器杯蓋で、口径15.2cmを測る。時期は6世紀中頃に比定される。

3区SK8-4・5は土師器甕で、口径は13.0・13.8cmを測る。外面調整は4がハケ、5がナデである。

(3)まとめ:今回の調査では、標高7.4～7.6mにおいて、南側で確認されている古墳時代中期～中世の集落域の広がりを確認した。



第23図 出土遺物実測図

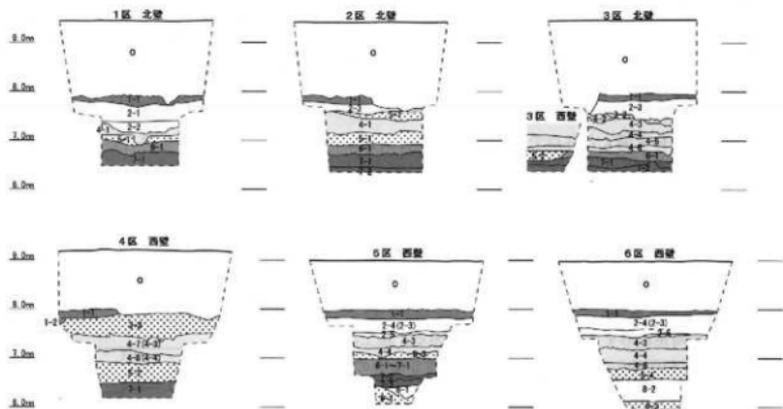
参考文献

- ・藤井淳弘 1998.3「久宝寺遺跡(97-186)の調査-南久宝寺地区埋蔵文化財調査概要報告-」[八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告39 平成9年度公共事業]八尾市教育委員会

2-5 久宝寺遺跡(2006-174)の調査

(1)調査概要:平面規模約3.0×3.0m 6ヶ所、総面積約54㎡について、現地表(9.0～9.5m前後)下、3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東の交差点中央:9.0m)を使用した。

【地層】現地表下1.0～1.5mまでは現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下、現地表下3.0m前後までに確認された31種の地層をその特徴から大きく9層に分類し、調査区間における対応関係の構築に努めた。1層はオリープ黒色砂混じり土。全調査区を通して8.0m前後で確認された旧耕地であり、上面は旧耕作面を示す。2層は緑灰色～オリープ灰色砂混じり土。耕作土である。砂の含有量の多い淘汰不

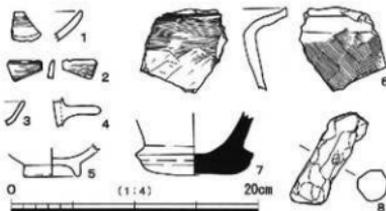


第24図 断面図(S=1/100)

良の層相は下位の砂(3層)を攪拌したためと考えられる。6区2-4層から陶器碗(5)が出土したことから、層の形成時期は近世以降である。3層は灰色～黄灰色砂。自然堆積層である。全体的に層の残存状況が悪いが、4区だけは異なった状況が認められる。約50cm堆積している3-3層は湧水の激しさから溝などの遺構埋土の可能性が考えられる。3-3層は縄属時期にも不明点があり、4区には2層が存在しないため厳密に3層対応とは断定できず、その層位は2層以上となる可能性がある。4層は緑灰色～黄灰色砂混じり土。全体的に砂の含有は少なくシルト優勢の耕作土である。また、調査区によってはグライ化による変色が認められる。5層はにぶい黄色～灰白色砂。概ね自然堆積層である。5-1・5-4層は層下部にみられるシルトの堆積から洪水起源の堆積層と推定される。より低い位置で検出された5-2層はラミナが顕著で、植物遺体を含むことから溝などの埋土の可能性が高い。6～7層は灰色砂混じり砂。シルトが優勢で粘性が強く、均質な砂の分布状況から耕作土と考えられる。調査地東側の5区では、さらに粘性が強くなり6・7層の分層は不可能であった。層からの出土遺物は本調査中で最も多く、奈良～平安時代のものが中心であった。また、出土位置が明確でなく混入遺物の可能性があるが、瓦質土器とみられる破片が1点存在する。8層は灰色～黄灰色砂混じり土。シルト優勢で粘性が強く、細かな植物遺体を含む。耕作土の可能性もあるが、植物遺体の状況から湿地性堆積の可能性が高い。9層はオリブ灰色砂。5・6区でのみ確認された自然堆積層。微粒砂主体の9-1層は自然堆積起源の砂が弱く土壌化したものと捉えられる。植物遺体を多く含む湧水が極めて激しい9-2層は、純粋な自然堆積層で、埋没流路と推測される。

【検出遺構】断面において遺構と思いき落ち込みを確認した。3区西壁では5-2層の落ち込みが認められ、その状況は東壁においても同様であったことから東西方向の溝と解釈される。5区西壁でも性格は不明ながら8-1層の落ち込みが確認され、土師器が出土した。

(2)出土遺物：8点を図化した。6の土師器甕は破片ながら本調査においては残りの良い遺物である。7は須恵器すり鉢の底部。焼成は悪く胎土にも砂粒が多く含まれる。出土層位は共に5区6-1



第25図 出土遺物実測図

～8-1層。8は不明土製品、土馬の右後足と思われる。認められる調整は指頭痕のみ。

(3)まとめ：今回の調査では遺構は確認できなかったものの、6層の上面において砂に覆われた水田面が残存する可能性があることが示された。5-2層の存在から水田に伴う水路が検出されることも考えられる。ただし、調査地東側の5区6～7層は、粘性が強く植物遺体が含まれることから単純に耕作土とは断定できず、部分的に湿地状態であった可能性もある。この場合は6区の8-2層は6～7層対応となる。

時期に関しては、奈良～平安時代の遺物が圧倒的に多いことから古代以降の水田であることは間違いない。しかし、5層からは遺物が出土していないため水田の廃絶時期は不明である。集落廃絶後に耕作が行われたと仮定すれば、7層下面に削られ残した遺構面が残存する可能性が考えられるが、7層以下を確認できた5・6区では明確な遺構は確認できなかった。

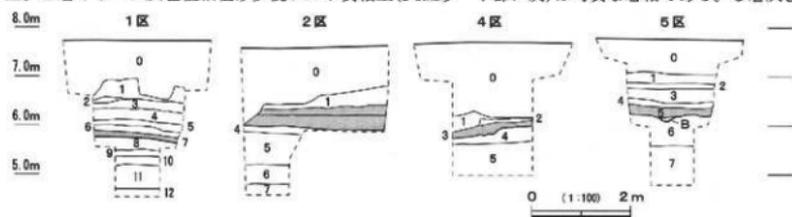
2-6 久宝寺遺跡(2006-298)の調査

(1)調査概要：平面規模3.0×3.0m-5箇所(北から1～5区)、面積45m²について、現地表(7.6～7.8m)下3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、大阪府水道部工事図面記載の標高値(調査地北西府道交差点：7.513m)を使用した。

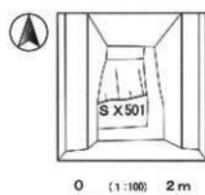
【層序】

(1区)0層は盛土。1層暗オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土(Fe斑少)は作土で、2～3層に分層が可能である。2層灰色細粒砂混シルト質粘土(Fe斑)も作土か、あるいは1層に伴う耕作関連遺構であろう。3層オリーブ灰色粘土～極細粒砂互層(Fe斑 水平ラミナ)、4層灰色粘土～粘土質シルト互層(Fe斑多 炭化植物ラミナ)、5層灰オリーブ色極細粒砂～シルト質粘土互層(Fe斑多 水平ラミナ)、6層灰色粘土～シルト互層は、一連の水成層である。7層オリーブ黒色シルト混粘土(炭化植物含む)は水成層と思われるが、やや攪拌が認められる。古墳時代初頭(庄内式期)の土器を多く含んでいる。8層暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土はブロック状で攪拌が著しい。7・8層は作土の可能性もある。9層オリーブ灰色粘土～粘土質シルト互層、10層オリーブ灰色極細粒砂～シルト互層、11層黒色粘土(細かい植物遺体 炭酸鉄)、12層緑灰色シルトは水成層である。

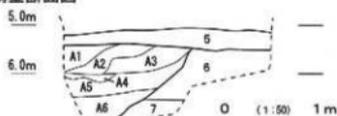
(2区)0層は盛土。1層暗オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土は、1区1層に対応する作土。2層オリーブ灰色極細粒砂少混シルト質粘土(Fe斑多 下部に炭)は均質な層相である。3層灰色



第26 南壁断面図



第27図 5区平面図・S X 501東壁断面図



- A1 5Y4/1灰色極細粒砂～中粒砂多混シルト
- A2 5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト
- A3 2.5Y6/2灰黄色シルト混細粒砂～極粗粒砂
- A4 2.5Y5/3黄褐色細粒砂～極粗粒砂
- A5 2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土
- A6 5Y5/1灰色粘土～粗粒砂互層

シルト～シルト質粘土(ブロック状)、4層暗オリーブ灰色シルト～粘土は攪拌され作土と思われる。2・3層は古墳時代初頭(庄内式期)の土器を含む。5層灰色極細粒砂～シルト質粘土互層、6層黒色粘土(細かい植物遺体・炭酸鉄)、7層灰色粘土質シルトは1区9層以下に対応する水成層。

〈3区〉地表下1.8mまで攪乱されており、以下は4区5層に対応する灰色細砂～粗砂を確認。

〈4区〉0層は盛土。1層灰色中粒砂～シルト互層(ラミナ)、2層黄灰色細粒砂ブロック混粘土は一連の水成層。3層暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土は、4層をブロック状に含む土壌化層で、古墳時代初頭(庄内式期)の土器を多く含んでいる。4層オリーブ灰色シルト～極細粒砂、5層灰白色細粒砂～極粗粒砂は水成層。

〈5区〉0層は盛土。1層灰色極細粒砂～細粒砂は流水層と思われる。2層暗オリーブ灰色シルト質粘土は旧耕土であろう。3層暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土、4層オリーブ灰色極細粒砂混粘土は攪拌された作土である。5層暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルトも攪拌された土壌化層で、弥生時代後期の包含層である。6層黄灰色極細粒砂混シルト(Fe斑多)、7層5/1オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂互層は水成層で、6層上部は攪拌され土壌化する。

【検出遺構】

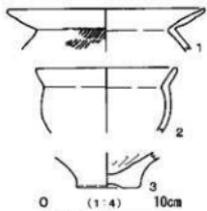
5区の6層上面でS X501を、また南壁でもビット1個(B:灰色極細粒砂混シルト Fe斑 ブロック状)を検出した。S X501は東西方向の層から北に落ち込み、深さ約80cmを測る。埋土はA1～A6の6層から成り、A1～A5層はブロック状、A6は自然堆積である。A1～A5層から弥生時代後期末に比定される土器が出土しており、特にA5層中からは完形の壺・甕等が多く出土している。溝が大規模な非戸であろう。

(2) 出土遺物:

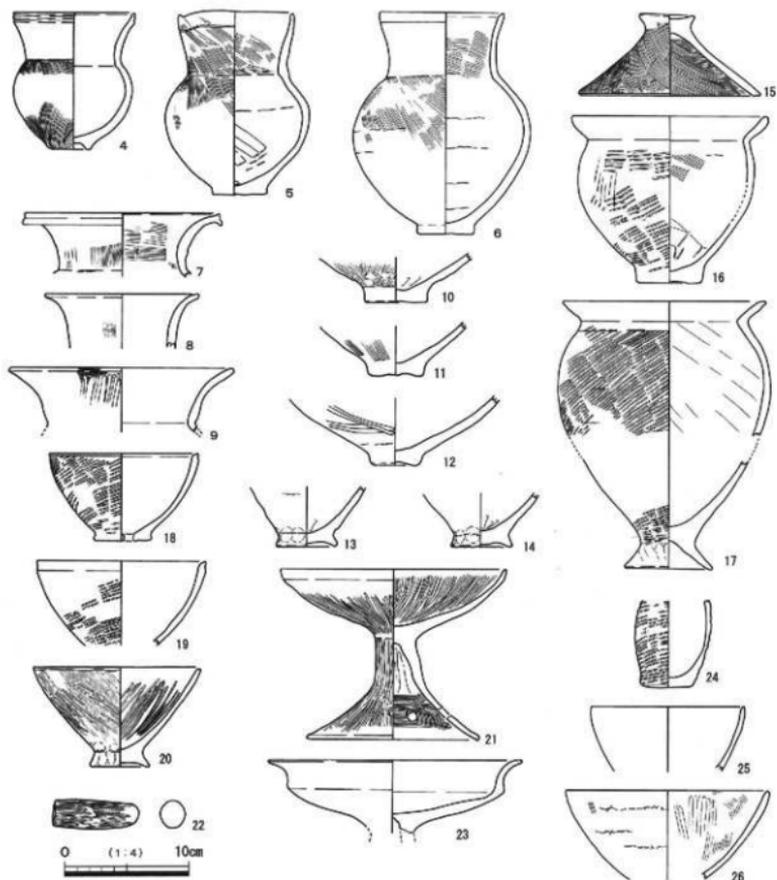
2区2・3層-1は庄内式甕で、口縁端部は方形に近く取める。庄内式新相に位置付けられる。

4区3層-2は小形丸底甕で、調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデ。3は甕底部で、調整は外面ナデ、内面ハケで、放射状に工具痕が明瞭に残る。

5区S X501-弥生時代後期末に比定される土器が多く出土しており、4～22を同化した。4～6は長頸甕で、いずれも完形品である。4はやや広口状の口頸部で、底部は中央が明瞭な凹状を成す。口縁端部外面に2条の線彩を巡らせる。調整は口頸部ヨコナデ、底底部外面ハケである。内底面に黒斑を有する。5・6はハケを基調とする調整で、共に体部外面に黒斑を有する。5は口縁端部やや下位に1条の沈線を施し、底面に粘土塊が付着している。4～6は胎土が同じと考えられる他、5・6は器高が異なるものの口頸部の法量がほぼ等しい。7～9は広口甕である。7は口縁端部が上下に肥厚し、外端面は外傾する凹面を成す。調整はハケ。8・9は外面にヘラミガキを施す。10～12は甕底部で、外面調整はヘラミガキである。12は生駒西葺の胎土で、外面に黒斑を有する。13・14は鉢、あるいは甕と思われる底部の破片で、底部縁道を積み出す形態や淡灰黄色の胎土といった特徴が類似する。13は内面、14は外面に黒斑を有する。15は甕で完形品である。口縁端部に1条の沈線を施す。調整は全面ナデで、つまみ部分はナデ。口縁部の数箇所が煤けている。16・17は甕で、共に図上で完形に復元したものである。16は外面タタキ、内面上位ハケ、下位板ナデで、外面の一部にハケが見られる。外面全体が煤ける。17は脚台付き甕で、調整は外面タタキ、内面ナデである。外面は底部が火を受け、口縁部～体部上半が煤ける。東海地方からの影響が考えられる。18～20は鉢である。18は有孔鉢で、口縁端部は上外方に小さく積み出す。調整は外面タタキを施す。19も同様の特徴を備えている。20は内外面にやや粗なヘラミガキを施す。口縁部に黒斑を有する。21は椀形高杯で、杯部は浅く皿状を成す。調整はヘラミガキを多用し、脚部内面下半はハケである。脚部に四方孔を有する。22は棒状を成す器種不明品で、一端は丸く収める。表面はヘラミガキを施す。機能としては把手が考えられる。



第28図 出土遺物実測図



第29図 出土遺物実測図

5区5層-23は高杯で、口縁部は大きく外湾する。明褐色を呈し、搬入品と考えられる。24は平底のコップ形を成し、調整は外面タタキ、内面ナデである。歪みがあり大きく傾いている。類例を見ない器種である。25・26は鉢で、27は内面にヘラミガキを加える。

(3)まとめ:南東部の5区において、周辺では未確認の弥生時代後期の遺構面(6.2~6.3m)を確認した。一方、西部・北部では古墳時代前期初頭の包含層が認められたが、その標高には5.6~6.4mとかなり差があり、特に1区が低くなっている。1・2区では作土の様相を呈しており、当該期の水田である可能性がある。土器の磨耗は少なく、短期間の水田域と思われる。すぐ西の2区では6.4mと高く、時期の下る水田であろうが判然としない。3・4区の下層では6.0m以下に大規模な河川堆積を示す湧水の著しい砂層が認められた。

2-7 教興寺跡(2006-98)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡5ヶ所について、現地表(24.0~24.4m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東約50mに位置する交差点中央：26.0m)を使用した。

【地層】今回の調査地は畑地になる前は池であった。現況でも、調査地縁辺部には堤の痕跡を示す僅かな高まりが確認できる。地層は、池の埋め立て土と堤に関係する盛土が大半を占める。1層は灰色の攪拌土、現代耕土。2層は現代廃棄物を多く含む埋め立て土である。3層は池の堆積層である。3-3層は植物遺体を多く含むラミナが確認できる。4層は池の石垣及び裏込めの土である。石垣には径0.5m程度までの石を使用している。5層は締まりの良い灰黄色土。堤の盛土と考えられ、部分的にブロック土が確認できる。遺物は瓦質土器・須恵器・土師器細片が出土した。6・7層は灰黄色中粒砂混じり細粒砂～微粒砂。層のしまりは悪く、均質な層相から攪拌土とも考えられる。遺物は比較的多く、須恵器・土師器・瓦破片が出土した。8層は砂優勢の自然堆積層という点から共通の層序としたが、遺物は確認できずその対応については確証的ではない。8-1層は径3cmまでの礫を含む砂礫層。8-2層は均質な細砂層。8-3層は径20cmまでの礫を多く含む砂礫層である。

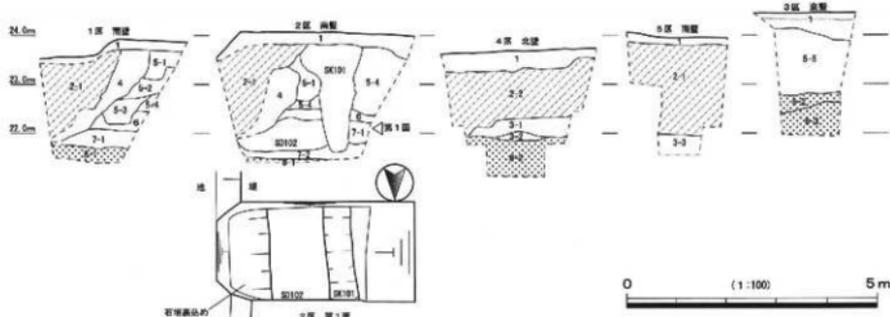
【検出遺構】2区の22.1m付近で遺構を検出した。SK101は1層下面に帰属する溝状の土坑。規模は幅1.2m・深さ2.2mで、埋土は5層に類似する。堤に平行して検出されており、これに関係する土坑の可能性が高い。遺物は5層と同じく須恵器・土師器細片が僅かに含まれる程度である。SD102は断面上で両側への上がり方が確認でき、7層上面に帰属する溝と考えられる。規模は幅1.8m以上・深さ0.6mである。埋土は自然堆積とみられる砂層で、層下部ほど粗粒化し礫が多く含まれる。遺物の出土はなし。

遺物は、2区6・7層から教興寺関連の遺物と考えられる布目痕のある玉縁丸瓦が出土した

(2)まとめ：今回の調査地はその全域が池の埋め立て地である。昭和23年撮影の空中写真では池は存在しており、現代の廃絶であることは間違いない。各調査区と池の位置関係は、3区が堤部、1・2区が池岸、4・5区は池内にあたる。池の初現は判明しなかったが、堤の構成土と考えられる5層からは瓦質土器までしか出土しないことから、近世までと推定できる。堤上からは性格不明な遺構、SK101が検出された。5層以下の6・7層は耕作土層とも考えられ、堤の下には古い地層が残っている状況が確認できた。出土遺物から時期は中世までと推測される。礫が多く含まれる自然堆積層である8層からは流水状態が想起され、8-3層などは土石流による堆積層とも考えられる。調査地の東側にも多くの溜池が存在したことを考えると、一帯は古くは東から西にかけての谷筋であった可能性が高いといえる。

参考文献

・坪田真一 2002『教興寺跡(第1次調査・第2次調査) 八尾市文化財調査研究会報告72』(財)八尾市文化財調査研究会



第30図 平・断面図

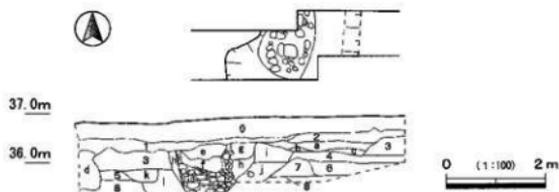
2-8 郡川遺跡(2006-166)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所について、現地表(36.8m前後)下1.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高俣(調査地北西のT字路中央：36.4m)を使用した。なお、調査地到着時には、トレンチが掘削されており、重機は引き上げられていたため、平面調査を諦め、断面調査のみを行った。後日、八尾市教育委員により立会調査が行われた。

【地層】現地表(36.8m)下0.3m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下1.5m前後までの1.2m間において4層の地層を確認した。1層は黒褐色シルト混粗～極粗粒砂。1～4cm大の礫も混じる。近現代の建物が建つ前の地表面である。2層は、灰色シルト混粗粒砂。0.5～2cm大の礫も混じる。上層からのFe斑が顕著に見られる。3層は、黒褐色シルト混粗～極粗粒砂。0.5～1cm大の礫も混じる。4層は、暗オリーブ褐色極細粒砂質シルト混じり粗～極粗粒砂。2～4層内で遺物は発見できなかったが、重機掘削により出た排土内から、古墳時代後期(TK43前後)の須恵器杯、土師器高杯・飯・鐙付き甕などの破片が多量にはないが、一定量出土しており、何れかの層がこの時期に対応する包含層になる可能性がある。

【検出遺構・遺物】調査区北壁から西壁かけての断面に土坑1基(SK1)、北壁断面に土坑1基、溝1条、東壁断面に井戸1基(SE1)が掛かっていたが、重機が撤収済みで、排土の搬出も難しく、壁面崩落の危険性もあったため、どの遺構も平面的には調査できなかった。SE1は、自然石を用いた乱石積の井戸である。井戸口径は0.9m、深さ1.0m以上。掘方は径1.4m、掘方内北側いっぱい井筒が積まれているので、作業スペースとして両側に空間を設けていたと考える。井戸内には、廃絶後自然に溜まった土(埋土b)とその上層に人的に埋めたと考えられる土(埋土a)が観察できた。埋土aから深鉢状になる瓦質火鉢片が出ており、裏込めや積石の間から、瓦片が出土している。これらの遺物から当遺構の詳細な時期の特定は

困難であるが、中世後半頃の井戸であろう。SK1は径約3.0m、深さ約0.75mを測る。1層の下面から切り込んでおり、SE1と同時期の遺構と考えられる。SK2は径0.75m、深さ0.25mを測る。断面しか確認できなかったため、溝になる可能性もある。SD1はSK2によって切られている為、本来の切り込み面は不明であるが、3層上層から切り込んでおり、東壁断面でも同じ砂を確認できたので、やや西に振った南北方向の溝と考える。溝内には灰オリーブ色の粗粒砂～中礫(2cm大)が堆積し、ラミナも



- 0：現代の整地に伴う客土・盛土
 1：黒褐色シルト混粗～極粗粒砂 1～4cm大の礫も混じる
 2：茶灰色 礫混砂質土
 3：灰色シルト混粗粒砂 0.5～2cm大の礫も混じる
 4：淡灰黄～淡灰色 微砂質シルト
 5：黒褐色シルト混粗～極粗粒砂 0.5～1cm大の礫も混じる
 6：黄灰色シルトブロック混微砂質土
 7：暗黄灰～黄灰色 礫混微砂質土
 8：暗オリーブ褐色 極細粒砂質シルト混粗～極粗粒砂
 a：米褐色 礫混砂質土
 b：茶褐色 微砂質土
 c：暗茶灰 粗礫混砂砂
 d：灰色 3層と3～15cm大の礫が混じる
 e：灰色 中粒砂混シルトと7がブロック状に混じる
 f：黒色 粘質シルト～極粗粒砂質シルト 暗青灰色 細～極粗粒砂(ラミナあり)
 g：淡茶褐色シルト微砂質土
 h：暗緑灰色 中～粗粒砂混シルトと灰オリーブ色 粗～極粗粒砂がブロック状に混じる
 i：暗緑灰色 礫混微砂質土
 j：黄灰色シルトブロック混微砂質土
 k：暗灰黄シルト混粗粒砂 0.5～2cm大の礫少量混じる
 l：灰オリーブ粗粒砂～2cm大の礫(ラミナあり)

第31図 平・断面図

観察できた。

(2)立会調査の概要：深基礎(GL-1.5m)となる部分の掘削の際に立会調査を行った。試掘調査において、東壁で中世期の井戸があったため、その確認を行う予定であったが、試掘箇所よりも実際の位置が北西にずれていたため、今回の掘削範囲では、試掘で確認した井戸の南側の一部しか確認できなかった。

【検出遺構・遺物】今回の試掘箇所では、3層上面から切り込む溝状遺構を確認した。15~30cm大の礫が多く埋まっており、その間には、須恵器、土師器、瓦質土器、瓦等の破片が見られる。遺物から15世紀頃の遺構と考えられる。

(3)まとめ：今回の試掘調査区・立会調査区では中世後期の井戸や土坑、溝状遺構を高い密度で確認できたことから、中世後半の集落が広がっていたと考えられる。また、排土中や上層の遺構などから古墳時代後期の土器が出土していたことから、平面的な調査を行えば、当該期の遺構も検出されるであろう。

参考文献

- ・吉田野乃 1999.3「6-1.郡川遺跡(97-696)の調査」【八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告書40 平成10年度国庫補助事業「八尾市教育委員会」
- ・吉田野乃 1999.3「6-3.郡川遺跡(98-400)の調査」【八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告書40 平成10年度国庫補助事業「八尾市教育委員会」

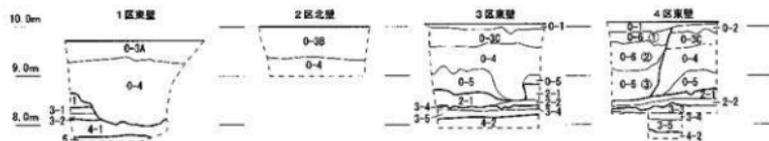
2-9 成法寺遺跡(2006-195)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡2ヶ所(北西から南東に向かって1~4区)について、現地表(9.7~10.1m前後(1区：9.72m 2区：9.96m 3区：10.0m 4区：10.1m))下1.0~2.5m前後(1区：2.1m 2区：1.0m 3区：2.0m 4区：2.5m)までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北部を東西に伸びる市道中央：9.7m)を使用した。

【層序】現地表(9.7~10.1m)下1.0~1.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。概ね6層(0-1~0-6層)に細分できた。以下現地表下2.0~2.5m前後までの1.0~1.5m間において5層の地層を確認した。1層は、1区でのみ確認できた灰褐色粘土質シルト~細粒砂(雲状酸化Mnを多く含む)である。水田耕作土の可能性が考えられる。2層は、3・4区に見られるオリブ灰色~褐灰色中粒砂~極粗粒砂。河川堆積物である。本層はさらに2層(2-1・2層)に細分できた。3層は黄灰色~褐灰色粘土質シルト。攪拌の著しい水田耕作土で、調査地全域に広がる可能性が高い。本層はさらに5層(3-1~5層)に細分できた。この内3-3層には瓦器細片が混在していた。4層は灰黄褐色~オリブ灰色シルト~極細粒砂。ラミナ構造が発達した河川堆積物である。4-1・2層に細分できた。5層は暗オリブ灰色シルト質粘土~粘土質シルト。グライ化の顕著な湿地性の堆積物である。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(2)まとめ：今回の調査における最大の成果は、3層攪拌層を確認したことである。本層内には瓦器細片が混在しており、したがって地層の形成時期を中世頃と考えてよい。本層は1・3・4区で認められることから、当該期の当地周辺が広く生産域として利用されていた可能性が高くなった。



第32図 断面図(S=1/100)

2-10 成法寺遺跡(2006-302)の調査

(1)調査概要:平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡2ヶ所について、現地表(8.5m前後)下2.3m前後までを調査した。現地表下3.0m前後までを調査する予定であったが、湧水と壁面の崩落が激しく調査を断念した。調査で使用了標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地東を北西-南東に伸びる市道中央:9.3m)を使用した。

【地層】1区では、現地表(8.5m)下0.45m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.3m前後までの間において5層の

地層を確認した。1層は、オリブ黒色極細粒砂(旧耕土)。中礫少量混じる。2層は、暗灰黄色細～中礫混粗粒砂。3層は、黄灰色～暗灰黄色極細粒砂混粗粒砂。細～中礫が少量混じる。5層のブロックも混じる。4層は、黄灰色粗粒砂混シルト。細～中礫が少量混じる。5層のブロックも混じる。5層は、淡黄色～にぶい黄色粗粒砂～中礫。黄灰色のシルト～極細粒砂層を挟む。層厚1.4m以上を測る河川堆積物である。

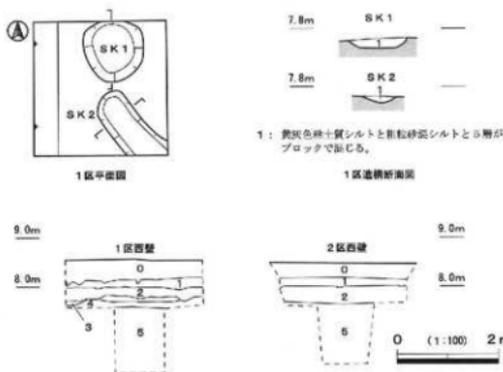
【検出遺構】土坑を2基検出した。SK1は円形で、径約1.2m、深さ0.2mを測る。SK2は、細長い楕円形を呈し、幅0.7mで、長さは、1.5m以上で、調査区外へと伸びる。深さは、0.15mを測る。両遺構とも埋土には、黄灰色粘土質シルト、粗粒砂混シルト、5層のブロック土が入る。

(2)出土遺物:細片で図化できなかったが、SK2から古代瓦片が1片出土している。

(3)まとめ:今回の調査では、土坑を2基確認したが、土坑内やその上層の耕作土から出土した遺物は少なく、検出した高さも7.6m前後で、東方約300m付近で見つかっている中世後半の集落が立地する地点の標高(8.9m)と比べて1.3m低い。今回の調査区は、東方約300m付近で見つかっている中世後半の集落が営まれていた頃より以降、水田もしくは畑などの生産域であったことがわかった。

参考文献

・原山昌則 1991「第6章 第6次調査(SH90-6)発掘調査報告」【成法寺遺跡 <第1次～第4次・第6次調査報告>(財)八尾市文化財調査研究会報告33】(財)八尾市文化財調査研究会



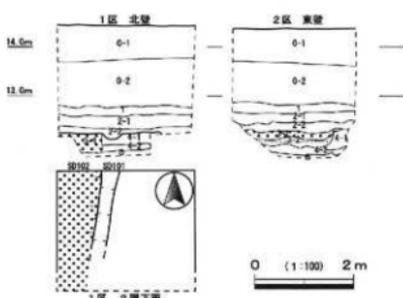
第33図 平・断面図

2-11 神宮寺遺跡(2006-196)の調査

(1)調査概要:平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(14.4m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用了標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査東部を南北に伸びる旧大阪外環状線中央:16.2m)を使用した。

【地層】1・2区とも同様の堆積状況が認められた。現地表(14.4m)下1.5～1.6mまでの現代の整地に伴う客土・盛土において2つの単位が認められた。0-1層は黄色の真砂土、均質な砂質土である。0-2層はブロック土で構成される粘質土で、コンクリート片や礫が多く含まれる。1層はオリブ黒色粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～微粒砂、旧耕土である。2層はオリブ灰色極粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～

微粒砂。粗粒砂が優勢で層下部にかけて淘汰が悪くなる攪拌層で、染付・土師器片をわずかに含む。2-1・2-2の2枚に分層されるが一連の耕作土と考えられる。本調査では2層以下では遺物は出土しなかった。3層は自然堆積層である。均質な灰白色砂(3-1層)とラミナが認められるオリブ灰色シルト(3-2層)に分かれる。4層は灰色粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～微粒砂。粗粒砂が優勢で淘汰の悪い攪拌層である。2枚に分層されるが一連の耕作土と考えられる。5層は植物遺体を含む灰オリブ色粘質土で自然堆積層と思われる。6層は灰色粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～微粒砂、攪拌層と考えられる。層中に炭酸鉄が認められる。5層は1区、6層は2区のみが存在し、互いの新旧関係は不明である。



第34図 平・断面図

第34図 平・断面図

【検出遺構】1区2層下面において遺構検出を行った。SD101は2-2層が埋土となる南北方向の溝である。耕作溝と考えられる。SD102は3-1層が埋土となる南北方向の溝状の落ち込みで、4-1層上面帰属遺構の可能性が高い。垂直に近い壁の立ち上がりから人為的な形状であると考えられる。西側の調査区外に続いており、規模・形状は不明である。両遺構とも湧水によって間もなく冠水してしまったため未掘削である。確認しうる限りでは遺物は認められなかった。2区も同様に遺構検出を試みたが、湧水のため平面上では遺構の有無は確認できなかった。断面上では第3層が落ち込み状に認められた。SD102と同様の落ち込みや第4-1層上面畦畔である可能性が考えられる。

(2)まとめ：今回の調査では2層下面で近世以降の耕作関連とみられる溝と落ち込みを確認した。下位の4層上面では自然堆積層の3層に覆われて耕作面が残存する可能性がある。6層の存在からさらに下層にも耕作土が続いていると考えられる。2層以下からは遺物は出土しなかったため時期は判断できないが、粗粒砂が多く含まれる淘汰の悪い攪拌土から比較的新しい時期の堆積・耕作と推測される。

周辺では、従来から旧外環状線(東高野街道)を挟んで東西で様相が異なることが確認されており、東側では遺構・遺物が比較的多い傾向にある。現状で道路の西は現耕作面まで1.5m程の段差となっており、古くから西側にかけて大きく下がる地形であったと理解されている。旧外環状線を基準として考えると、約60m東で行われた神宮寺1次調査(ZG93-1)では、15.5m付近で弥生時代中期～古墳時代の遺構面が検出されており、すぐ西側の大阪府教育委員会の調査では、概ね12.4mを境として、以上で古代以降、以下で弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土している。西に80mの地点にあたる本調査地において、弥生～古墳時代対応層は11.7mまでに確認できなかったが、さらなる下層部に存在する可能性が高い。

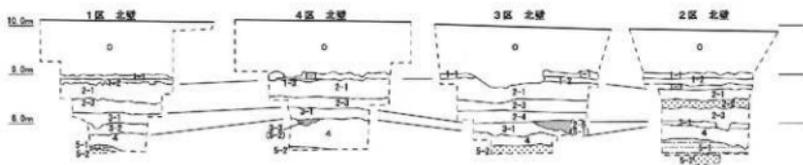
参考文献

- ・山上 弘 1994 「神宮寺遺跡発掘調査概要－八尾市神宮寺四丁目所在－」大阪府教育委員会
- ・岡田清一 1997 「神宮寺遺跡(第1次調査)」財団法人八尾市文化財調査会報告57(財)八尾市文化財調査研究会

2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.5×3.5m、面積約12.25㎡4ヶ所について、現地表(10.1m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北部を東西に伸びる道路中央：9.7m)を使用した。

【地層】現地表(10.1m)下1.0m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.5m前後までの1.5m間において5層の地層を確認した。各層は層相によって最大5層に細分される。1層は灰色中粒砂～細粒砂混じり微粒砂。耕作土である。1層の上面は周辺における現代耕作面の高さとは

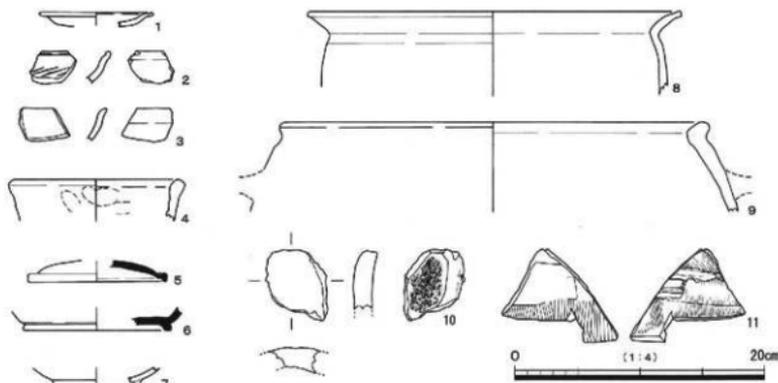


第35図 断面図(S=1/100)

は一致する。また、1-3層には2層起源のブロック土が認められる。2層にはぶい貫～灰黄色細粒砂混じり微粒砂～シルトである。細分される単位で若干の差異が認められるが、Fe・Mnの沈着がみられる均質な攪拌層である。瓦器・土師器細片が出土していることから、中世以降の耕作土と捉えられる。2区でのみ確認された2-2層は緑灰色の細粒砂である。層最下部にラミナが部分的に認められることから自然堆積層と考えられる。3層は暗灰黄色細粒砂混じり微粒砂～シルトである。層相は2層と類似しており攪拌層の可能性が高い。層中には巻き上げられたと考えられる奈良～平安時代の須恵器・土師器が多く含まれる。1区の3-2層は他の調査区では確認されず、大きな遺構の埋土である可能性がある。4層は灰色細粒砂～シルトである。全体的に弱く土壌化し、層上部には3層からの溶脱と考えられるFe・Mnが認められる。層中には土師器の細片が僅かに含まれる。5層は自然堆積層で粘土質の5-1層と砂質の5-2層に細分される。2区の5-2層からは古墳時代の須恵器杯蓋の細片が出土した。

【検出遺構】調査区断面以上に遺構と思しき落ち込みを確認した。S-1は2-4層下面帰属の落ち込みである。調査区外に伸び形状は不明である。土師器細片が出土した。S-2は3-1層下面に帰属する落ち込みである。埋土は僅かにブロック状の単位が確認できる。奈良時代の須恵器杯蓋をはじめとして遺物が多く含まれる。その他にも2-3層と3-1層の落ち込みを確認した。これらは耕作済の可能性が高い。また3区では、調査区北端を除く全域において旧耕土直下から掘り込まれる現代井戸がかかっていた。層は垂直に切り立っており、2.5mの掘削では底は出なかった。

(2)出土遺物：11点を図化した。出土層位は、4・5は遺構とみられる4区3-3層から、それ以外は1～4層である。また、遺物は全体的に器表の摩滅が進んでいる。4は製塩土器の口縁部である。5は平安時代の所産とみられる須恵器杯蓋である。11は移動式竈と思われる。内外とも目の粗いタテハケを施し、外面には横位の貼り付け突帯を施す。内面には使用痕とみられる煤が付着している。



第36図 出土遺物実測図

(3)まとめ：今回の調査では耕作土の下面において、遺構・遺物を確認した。出土遺物は細片が大半を占めるものの、その量は比較的多い。耕作土と考えられる2・3層では時期差が認められ、出土遺物から判断して2層は中世以降、3層は平安時代に比定される。特に3層からは奈良～平安時代の遺物が多く出土しており、その量は4区>1区>3区>2区と、調査地の南西にかけて次第に濃密になる傾向が認められる。4区では3層下面で奈良時代の遺構と考えられる落ち込みを確認、かつて4層を基盤層として奈良～平安時代にかけて集落が存在していたと想定される。4層以下は一転して遺物が希薄になるため様相は不明である。唯一出土した須恵器細片から、5-2層の堆積時期が古墳時代後期と推定される。

2-13 大正橋遺跡(2006-242)の調査

(1)調査概要：平面規模約1.5×1.5m、面積約2.25㎡
4ヶ所について、現地表(13.4～13.6m前後)下1.5～2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北を東西に伸びる市道中央:12.9m)を使用した。

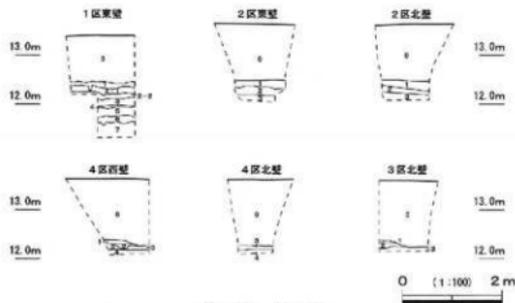
【地層】1区では、現地表(13.4m)下1.0m前後までは、現代の整地に伴う客土・

盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの間において7層の地層を確認した。1層は、オリブ黒色粗粒砂・細砂混シルト～極細粒砂。2層は、さらに2層に分けることができ、2-1層が暗緑灰色細～中粒砂混粘土質シルト。細～中礫少量混じる。2-2層は、オリブ灰色細～中粒砂混シルト。細～中礫少量混じる。上層からのFe斑が顕著に見られる。3層は、灰色極細粒砂混中～粗粒砂。細礫が少量混じる。4層は、灰オリブ・暗オリブ色細粒砂。ラミナ・上層からのFe斑が顕著に見られる。5層は、オリブ灰色シルト。上層からのFe斑が顕著に見られる。6層は、暗オリブ灰色極細～細粒砂。7層は、暗オリブ灰色粘土質シルト。植物遺体層の薄層を挟み、止水堆積である。

2～4区では、現地表(13.6m)下1.2～1.3m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下1.5m前後までの間において4層の地層を確認した。1層は、暗オリブ灰色中～粗粒砂混シルト～極細粒砂。細礫少量混じる。2層は、暗緑灰色極粗粒砂～細砂混シルト～細粒砂。3層は、緑灰色極細～細粒砂。4層は、オリブ灰色極細～中粒砂。

(2)まとめ：1層は、旧耕土である。2・3層からは、遺物が出土しなかったが、近世耕作土と考える。4層以下は人為的な影響は受けておらず、自然堆積層である。粒径の違いなどから推し量ると、4区から西側に流線を持ち、南東から北西方向に流れる中世～近世期の河川が想定できる。

調査地北東部で地割などから復元、想定されている前方後円墳に関わるような遺物を含め、その他の遺物も一切出土しなかった。



第37図 断面図

参考文献

- ・米田敏幸 1988.3「4.大正橋遺跡(86-516)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告17 昭和62年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

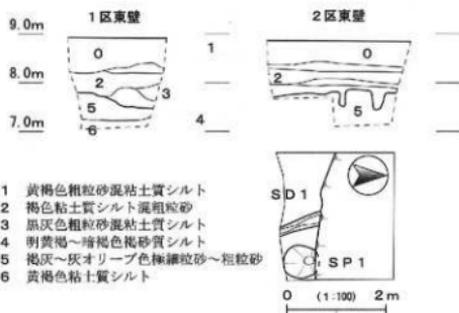
2-14 東郷遺跡(2006-23)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m(1区-南)、3.0×3.0m(2区-北)面積約15.25㎡の2ヶ所について、現地表(8.9m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、北側道路のマンホールの高さ：8.6m)を使用した。

【地層】現地表(8.9m)下0.5~0.8m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.2~1.5m間において6層の地層を確認した。1層は黄褐色粗粒砂混粘土質シルト。2層は褐色粗粒砂に黒灰色粘土質シルトのブロックを含む層で、中~近世の遺物および炭を含む。3層は黒灰色粗粒砂混粘土質シルトで、おもに鎌倉時代の遺物を含む。2区ではここから比較的多量の土師器皿・瓦器碗のほか、黒色土器(B類)も出土した(3~24)。4層は明黄褐色~暗褐色砂質シルトで5層の土壌化部分に相当する。5層は褐灰色~灰オリーブ色の極粗粒砂~粗粒砂で植物遺体の薄層を含む。河川堆積層と推測される。6層黄褐色粘土質シルトである。

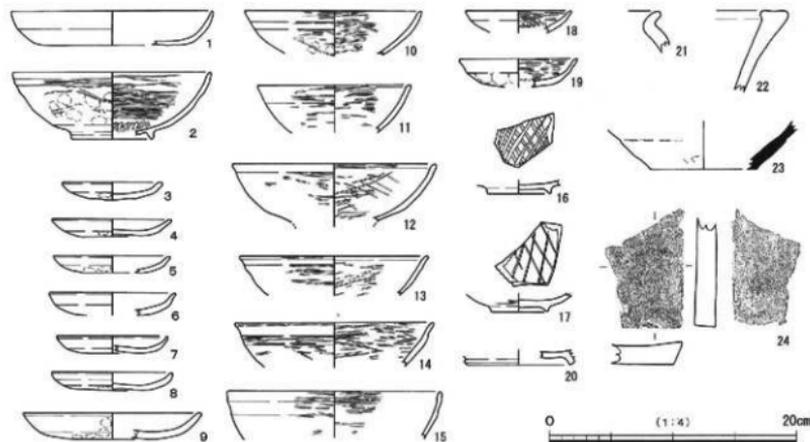
【検出遺構】2区では5層上面で、柱穴(SP1)・溝(SD1)を検出した。SP1は調査区南東隅で検出した。長径7.5m・短径6.5m深さ0.3mの規模を持つ。内部から瓦器椀片が出土している。SD1はSP1の西側で検出した。南北からやや西にふって伸びる。幅0.2~0.25m・深さ0.1m・検出長0.9mを測る。内部から土師器皿(1)、瓦器碗(2)が出土している。

(2)出土遺物：土師器皿1は平坦な底部から丸みを持って立ち上がり、端部は丸く終る。口縁部は2段



- 1 黄褐色粗粒砂混粘土質シルト
- 2 褐色粘土質シルト混粗粒砂
- 3 黒灰色粗粒砂混粘土質シルト
- 4 明黄褐色~暗褐色砂質シルト
- 5 褐灰~灰オリーブ色極粗粒砂~粗粒砂
- 6 黄褐色粘土質シルト

第38図 平・断面図



第39図 出土遺物実測図

のヨコナデで仕上げられる。灰褐色で、硬く焼き締まっている。口径16.2cm・器高2.9cm。瓦器柄2は半球形の体部に断面三角形の高台が垂直に付く。ヘラミガキは横方向で、外面口縁部に数条、内面体部には密に施される。見込みのヘラミガキはU字形に折り返される。黒色で中核は白灰色、口径15.8cm・器高5.5cm・高台径6.5cm・高台高0.6cm。ともに12世紀中頃(平安時代末期)のものであろう。

3層から出土した土器類(3-24)は、溝SD1出土のものより新しく、13世紀代(鎌倉時代)のものが多いが、黒色土器柄20や土師器羽釜21は、11世紀代におさまるようである。

(3)まとめ: 今回の調査では、2区の標高7.7~7.8m付近の5層上面で12世紀中頃(平安時代末期)の遺構を確認した。また上層からは鎌倉時代以降の遺物が比較的多量に出土している。近隣の調査地でもこの時期の遺構・遺物を検出していることから、当地周辺には平安時代末期以降の居住域が広がっていたことが推測される。一方、極少量ではあるが黒色土器なども出土していることから、この居住域の初現は平安時代に遡り得る可能性も示唆している。

2-15 中田遺跡(2005-506)の調査

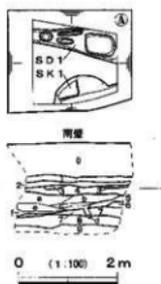
(1)調査概要: 個人住宅建設に伴う遺構確認調査 規模約2.0×2.0m 面積約4.0㎡1ヶ所について、現地表(9.4~9.5m)下2.0m前後までを調査した。なお、調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北部に位置する東西に伸びる市道のセンター: 9.2m)を使用した。

【地層】現地表(9.4~9.5m)下0.7m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.3m間において9層を確認した。1層は7.5GY2/1緑黒極粗砂~中礫混細砂(旧耕土)。2層は10GY4/1暗緑灰小~中礫混極細砂。3層は10GY5/1緑灰小~中礫混極細砂(上層からFe斑が見られる)。4層は10Y5/1灰中砂~小礫混シルト(やや粘性あり)。5層は5Y5/1灰粗砂~中礫混粘土質シルト。6層は7.5Y5/1灰細~中砂混シルト(上層からのFe斑が顕著に見られる)。7層は7.5Y4/1灰粗砂~小礫混粘土質シルト~極細砂(東にいくほど粗粒になる)。8層は5Y4/1灰細砂混粘土質シルト(水田作土層か?)。9層は5Y5/1灰極細砂混じり粘土質シルト(炭粒が少量混じる)。

【検出遺構】5層を切り込むSK1とSD1を検出した。両遺構とも調査区外へと続くので、全様は不明である。SK1は径2.0m、深さ0.4m以上を測り、南東方向へ深くなる。SD1は幅1.0m以上、深さ0.3mを測り、底面の形状が凹凸で、東へいくほど幅広く深くなる。調査区東部で分岐する。

(2)出土遺物: SK1とSD1からは、平安時代の須恵器、土師器、瓦の破片が出土した。9層中より古式土師器の細片が1片出土した。

(3)まとめ: 本調査では、平安期の遺構2基と少量ながら平安時代の平瓦片が出土した。遺構の全容はつかめなかったが、瓦片の出土は、当該期に寺院の存在した可能性を示すものと言える。



第40図 平・断面図

参考文献

- ・西村公助 1997「23中田遺跡第33次調査(NT96-33)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1997「25中田遺跡第35次調査(NT96-35)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

2-16 中田遺跡(2006-285)の調査

(1)調査概要: 平面規模約2.0×2.5m、面積約5㎡1ヶ所、現地表(10.2~10.3m前後)下1.9m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地南を東西に伸びる市道中央: 10.3m)を使用した。

【地層】現地表(10.2~10.3m)下1.1m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表

下1.9m前後までの0.8m間において4層の地層を確認した。旧耕土は現代の擾乱によって遺存していなかった。1層は灰オリブ色細粒砂混粘土質シルト。遺物は出土しなかったが、中世の耕作土と考える。2層は、黄灰色極粗粒砂～細礫混粘土質シルト。2層上面(第1面)で東西方向に伸びる溝(SD1)を1条確認した。3層は、黄灰色シルト混粗粒砂。第3層上面(第2面)で南北方向に伸びる溝(SD2)1条と土坑(SK1)1基を確認した。4層は灰オリブ色中～粗粒砂(河川堆積)。

【検出遺構・出土遺物】SD1は、幅約1.0m、深さ0.2mを測る。東側の底高が西側と比べて約10cm程低くなっている。埋土は、灰色粗～極粗粒砂混粘土質シルトで細礫も少量混じる。流水していた様子は見られない。溝内から弥生時代後期～古墳時代後期までの遺物が少量と12世紀頃の土師器小皿(1)が1点出土している。細片であり、時期は決めがたいが、12世紀以降の溝であろう。

SD2は、西屑のみの検出で、東屑は調査区外になる。幅0.5m以上、深さ0.4mを測る。全形が不明なので、大きな土坑になる可能性もある。埋土は2層に分けられ、上層は黒褐色粗～極粗粒砂混粘土質シルト。下層は褐色灰色中粒砂混粘土質シルトに4層がブロック状に混じった土である。上層から古墳時代後期の甑や銅付長胴甕(5)の破片が出土している。

SK1は、半径0.4m程の土坑を1/4程検出した。残りは調査区外へと伸びる。埋土は2層に分けられ、上層は黄灰色極粗粒砂～細礫混極細粒砂、下層は灰色中粒砂混極細粒砂である。本遺構内からはMT15型式の須恵器杯蓋片(2)、土師器鉢(3)が出土し、本遺構の時期は、古墳時代後期に位置付けられる。4は、廃土からではあるが、同型式の杯身が出土している。

(2)まとめ：今回の調査では、古墳時代後期の溝や土坑を検出した。遺構内からは少量の土師器や須恵器が出土し、これらの遺物は、この辺りが当該期に集落の一端で合ったことを示す。また、各遺構内や包含層から弥生時代後期の甕や高杯の破片が出土していたことから、近くに弥生時代後期の遺構が存在し、そのベース層である4層が弥生時代後期以前に堆積したことを確認した。

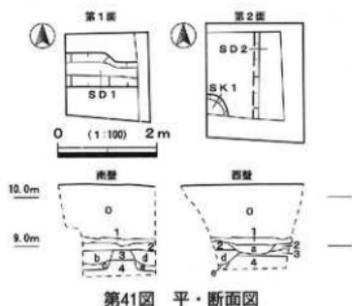
参考文献

- ・岡田清一 1997「Ⅱ中田遺跡(第14・25次調査)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告56] (財)八尾市文化財調査研究会
- ・清 斎 1995「4.中田遺跡(94-312)の調査」[八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業] 八尾市教育委員会

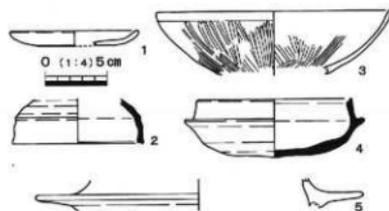
2-17 西郡廃寺(2006-216)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所について、現地表(5.6m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南部を東西に伸びる道路中央：5.2m)を使用した。

【地層】現地表(5.6m)下0.8～1.1m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0



第41図 平・断面図



第42図 出土遺物実測図

m前後までの1.2~0.9m間において5層の地層を確認した。各層は層相によって最大3単位に細分される。1層は盛土以前の現代の形成層。1-1層がブロック土、1-2層は止水性堆積層で共にグライ化が著しい。現代の金属製品が出土した。1-3層は土器細片・枝瓦が含まれる均質な盛土である。2層は暗色の強い砂混じり土。土師器・瓦器を中心とした土器片を多く含む。3層は暗灰黄色のブロック土、SD103埋土である。4層はやや暗色を帯びた土壤層である。4-2層からは弥生土器?片が少量出土した。5層は浅黄色の砂~微粒砂層。均質な堆積層だが構造は認められない。弱く土壌化した自然堆積層と思われる。

【検出遺構】1区の第1面(4.5m)と第2面(4.2m)で遺構を確認した。SX101・102は切り合い関係を持つ性格不明の落ち込みである。新しい遺構であるSX101は2層から掘り込まれている。瓦・土師器が出土した。古い遺構であるSX102の埋土は2層と同一である。遺構からは12世紀末~13世紀初頭の瓦器碗が出土した(2)。SX104・105は深さが4cm程度しかない落ち込みで、周囲との土質の違いも明確でないことから遺構とは断定できない。SD103は南北方向の溝状遺構である。埋土は単層でブロック土が認められる。出土遺物の中で時期を確定できるのは6世紀中頃の須恵器杯身1点のみである(3)。尚、各遺構の本来の帰属層位はSX101が1層除去面、SX102が2層下面、SD103が2層除去面である。

2区は粘土主体の堆積層から判断して池であった可能性が高い。1-2層中から金属製品などが出土しておりその年代は現代である。調査深度までに古い地層は確認されず、下層の様相は不明である。

(2)出土遺物：5点を図化した。4・5は凹面に布目痕が残る平瓦の細片である。

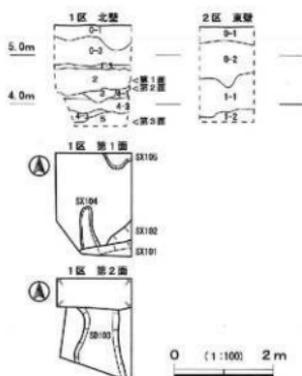
(3)まとめ：今回の調査では明確な遺構と遺構面を確認することができた。第1・2面に分けて検出された遺構面は、層的には共に2層除去面に帰属する同一面である。時期は古墳時代後期以降と中世の2時期が想定できる。また、SX101から考えて、その上位にあたる1層除去面においても中世以降の遺構面が存在する可能性がある。

今回の調査地の約50m南で行われた葦振A遺跡第1次調査では、~13世紀末(4.65m)、古墳時代中期~鎌倉時代前期(4.40m)、弥生時代後期(4.00m)の3面の遺構面が確認されている。遺物を多く包含するⅢ層には本調査の2層が、弥生時代後期面には4-2層下面がそれぞれ対応するものと考えられる。

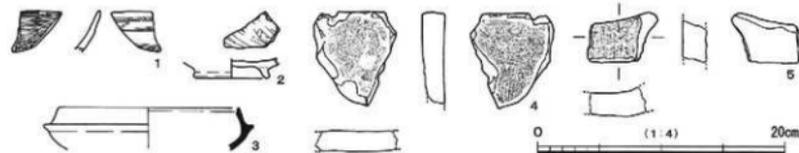
寺院に関する成果は希薄で布目瓦の破片が3点出土したのみであった。

参考文献

・原田昌則 1987「葦振A遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財発掘調査概要 昭和61年度 八尾市文化財調査研究会報告13』(財)八尾市文化財調査研究会



第43図 平・断面図



第44図 出土遺物実測図

2-18 西郡麿寺(2006-314)の調査

(1)調査概要:平面規模約3.0×3.0m5箇所、2.0×2.0m4箇所、総面積約61.0m²について、現地表(5.2m前後)下3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地東部を南北に伸びる道路中央:4.9m)を使用した。

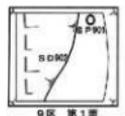
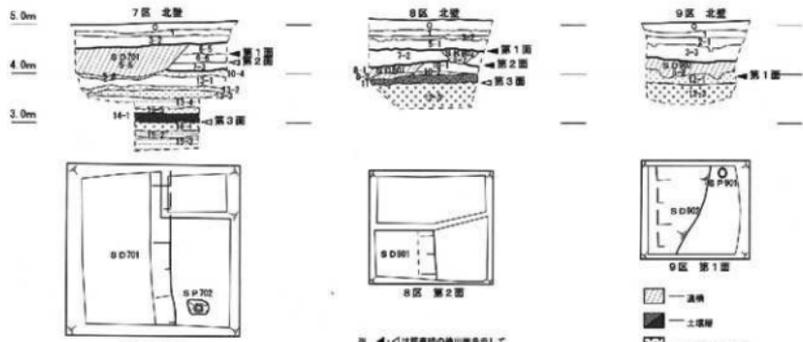
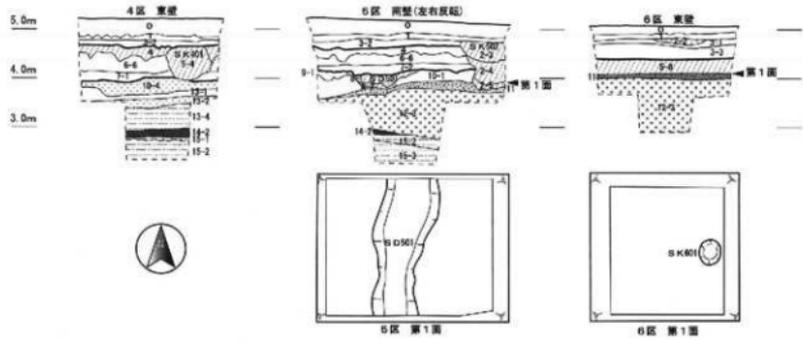
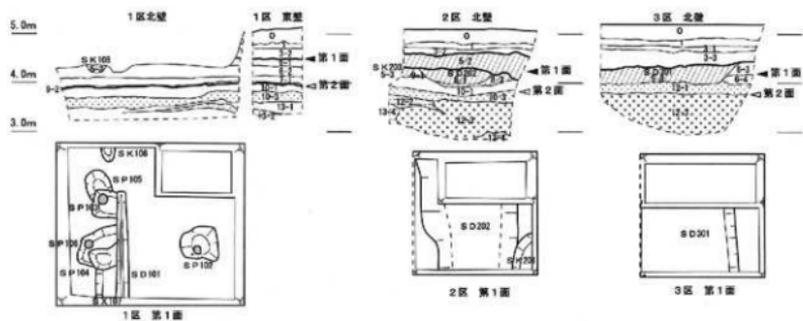
【地層】現地表(州地5.2m)下0.15~0.3m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下3.0m前後までの2.7~2.85m間において15層の地層を確認した。各層は層相によって最大5単位に細分される。1層は旧耕作土である。2・3層は灰色~灰黄色砂混じり土、瓦器片を包含し中世以降の耕作土と考えられる。布目瓦(20)が出土した。4・5層は黒褐色~黄灰色の砂混じり土である。土器片を多く含む。全調査区に亘る安定した堆積が認められないことから遺構埋土の可能性が高い。6・7層は灰黄色~暗灰黄色土、土器片を少量包含するが層の性格は不明。8層は黄灰色砂混じり土、遺構埋土である。9層は10層最上部が暗色化した土壌層である。10層は黄灰色~灰白色土、自然堆積層で上部は弱く土壌化する。須恵器杯身(17)が出土した。11層は12層最上部が暗色化した砂質優勢な土壌層である。12層は粗粒砂主体の自然堆積層である。調査地中央~東部で確認され、小形丸底壺(11)など古墳時代前期の遺物が僅かながら出土した。13層は灰黄色細粒砂~シルト、層下方はグライ化のため青灰色となる。部分的にラミナが認められ自然堆積層と捉えることができる。14層は強い暗色帯である。下位の15層の土壌化部分と考えられる。土師器もしくは弥生土器と見られる土器片が1点出土した。7区において部分的に下面検出を行ったが遺構は検出できなかった。15層は灰色極粗粒砂~粘土、自然堆積層である。

【検出遺構】全調査区で遺構を確認した。遺構面は上位面(3層除去面)と下位面(7層除去面)に大別されるが、調査時は任意のレベルで遺構検出を行っているため、遺構面と検出面は一致しない。検出遺構はピット・土坑・溝である。SD301・701・902は大きな落ち込みである。遺構の両肩がそろって検出されないため規模・形状は断定できないが、幅2m以上となる南北方向の大溝である可能性が高い。遺物は奈良~平安時代の須恵器・土師器が多数を占め、SD701からは残存率の高い内黒黒色土器碗(7)と土師器碗(2)がまとまった状態で出土した。しかし、瓦器碗細片も3点出土しており、混入遺物でなければ遺構の時期は中世となる。ピットは、柱痕が確認できるSP102・103・106・702から建物の存在が想定され、SP105・104の切り合いから同一面ながら時期差があることがわかる。遺物は奈良~平安時代の埴輪と思われる須恵器・土師器細片が普遍的に出土している。また、SK108・201、SK107や調査区断面上で検出したSK401・802もこれらのピット群と同種の埋土を持つ遺構である。SK601、SP901は平面上で円形に捉えたが、深さは3cm程度であり遺構とは断定できない。SD202・501・801は下位面附属の南北方向の溝である。南北方向の同軸上に設定された2・5・8区で検出されたことや検出標高・埋土から考えて同一の遺構である可能性が高い。埋土は上下2層に分けることができ、10層のブロック土を多く含む下層埋土が加工時形成層と捉えられることから、人為的な溝と考えられる。須恵器・土師器細片が出土したが遺構時期を与えうる個体はなく、古墳時代中期以降の埴輪としかいえない。

(2)出土遺物:22点図化した。2は土師器碗である。口縁部を強いヨコナデによって整形する以外は雑なナデ程度の調整しか行わず、接合痕が顕著に残る。6は黒色土器皿である。器面摩滅のため調整は不明である。3区SD301から出土した。7は内面に密なミガキを施す内黒の黒色土師器碗である。

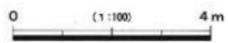
11は土師器小形丸底壺である。残存率が高く、1/2程度の破片である。12は土師器鉢である。外面は胴部下半を横位のケズリ、上半から口縁部にかけての調整はナデ・ヨコナデ。内面はナデにより器面を平滑にした後、放射状暗紋を2段に施す。2区5-2層出土。14は須恵器壺蓋と思われる。7区出土、層位は特定できない。19は玉縁丸瓦の肩部、20~22は平瓦である。余て凹面に布目痕が認められる。3-3層出土である。22は上位層の混入遺物の可能性があり出土層は特定できない。

(3)まとめ:今回の調査では古墳時代~中世の遺構面と遺構を確認することができた。遺構面は上・下2面存在する。この内上位面(4.4~4.6m付近)は遺物の多さと柱穴の検出から、奈良~平安時代の集落を中心とする遺構面である可能性が高い。遺構密度は調査地西側ほど高く、面検出を行っていない4区においても断面上で明確な遺構が確認されており、1区同様の遺構面が存在することは間違いない。下

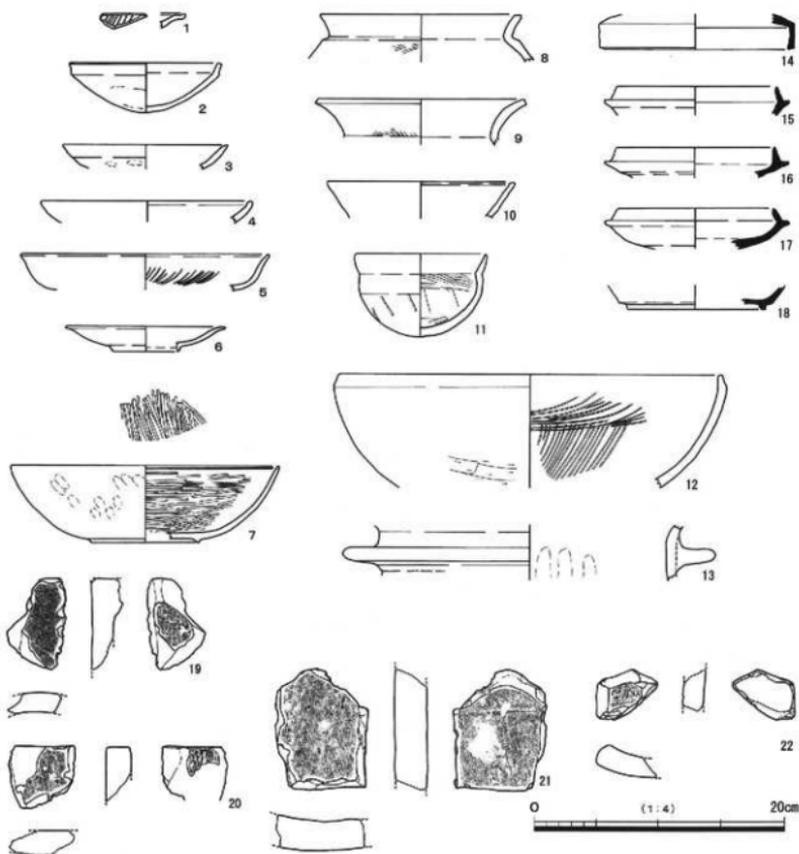


※ ◀・◁は既設物の構造線を示してあり、実線が本設計の構造線を示す。各層は断面図と一致し、土層が構造された場合は◀で表した。

- コンクリート
- 土
- 自然土 砂質
- 自然土 粘質



第45図 平・断面図



第46図 出土遺物実測図

位面(4.2~4.3m付近)では、検出遺構は溝のみでその性格は不明。溝は南北方向に30m以上の規模をもつと予測される。付近には別の遺構が存在する可能性も高い。

一方、寺院に関する直接的な成果は3層中より出土した布目瓦が数点に留まる。西郡廃寺は、寺域が未確定であるが、少なくとも鎌倉時代までは存続したと考えられており、今回の調査地は寺域の推定範囲に西接する。今回検出された古代の遺構群は西郡廃寺と何らかの関係を持つことも十分に考えられる。

参考文献

・1988『八尾市史(前近代)本文編』八尾市史編集委員会

2-19 西郡廃寺遺跡(2006-15)の調査

(1)調査概要：作業場付事務所に伴う遺構確認調査 規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡2ヶ所について、現地表(4.7~5.0m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北東部に位置する南北に伸びる市道のセンター：4.9m)を使用した。

【地層】1区は、東側半分が攪乱を受けていた。西側半分においても、現地表(4.7m)下0.4~0.7m前後の現代の整地に伴う客土・盛土(0層)を除去した段階で、SE1を検出したため、基本層序は確認できなかった。現地表(4.7m)下1.0m前後で灰白~灰色(N7/~4)細粒砂~中礫(3層)を確認した。河川堆積物である。湧水が激しい。

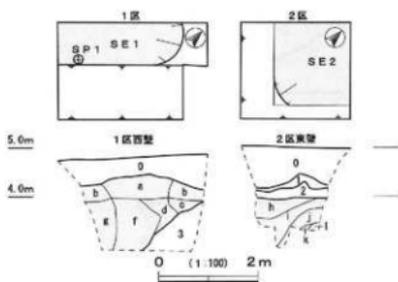
【検出遺構】SE1は径2.0m以上、深さ1.5m以上を測る素掘り井戸である。遺構範囲が調査区外へと続くため、全形は不明である。埋土上部で、くらわんか茶碗片が出土したので、近世後半には埋め戻されていたことがわかる。このほか、埋土からは須恵器、土師器片が少量出土した。

SP1は径18cm、深さ10cmを測る。SE1の最上層の埋土と同じであったことから、SE1が埋められた後、掘削されたピットであると考えられる。出土遺物はない。

【地層】2区は、現地表(5.0m)下0.5~0.8m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.2~1.5m間において2層とその下層で井戸2裡土を確認した。1層は灰色(5GY4/1)極粗粒砂混細粒砂。旧耕作土である。2層は灰色(5Y4/1)極粗粒砂~細礫混極細粒砂。

【検出遺構】SE2は径1.3m以上、深さ1.0m以上を測る素掘り井戸である。遺構範囲が調査区外へと続くため、全形は不明である。埋土からは、瓦質土器片、土師器片が少量出土した。埋土の状況から考えて、近世井戸と考えられる。

(2)まとめ：本調査区では、近接した位置で近世の素掘り井戸2基を確認した。当調査区が坪境に位置することから、坪境付近に群をなして掘削された野井戸であると考えられる。今後、周辺からも同じような井戸が多数検出される可能性がある。また西郡廃寺に関連する遺物の出土はなかった。



第47図 平・断面図

参考文献

- ・西村公助 2004.3 [30.西郡廃寺遺跡(2003-89)の調査]「八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書 八尾市文化財報告49 平成15年度国庫補助事業」八尾市教育委員会
- ・西村公助 2004.3 [31.西郡廃寺遺跡(2002-367)の調査]「八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書 八尾市文化財報告49 平成15年度国庫補助事業」八尾市教育委員会

2-20 花岡山遺跡(2006-6)の調査

(1)調査概要：個人住宅建設に伴う遺構確認調査 調査区は3ヶ所。各調査区の規模は、1区：1×14mを基準に東西に拡張、2区：2×17m、3区：1×3m、総面積は約61.5㎡である。各調査区ともに、現地表(40.4~40.5m前後)下1.3m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北西部に位置する東西に伸びる市道のセンター：36.6m)を使用した。

【地層】1層は黒褐色粗粒砂~極粗粒砂混粘土質シルト。現代の畑耕作により形成された攪拌層である。2層はふい黄褐色~灰黄褐色粗粒砂~5cm大礫混粘土質シルト。概ね北から南へと傾斜する落ち込み状の窪地を埋めて、整地するための客土・盛土層に相当する。本層はさらに数層に細分可能である。本



第49図 SD1 平・断面図

層内には土師器碎片のほか、瓦器碎片が混在していることから、中世以降に形成された地層である。3層にはぶい黄褐色極粗粒砂～2cm大礫混粘土質シルト。下層に続く地山層の土壌化部分に相当する。植物擾乱などにより若干締まりが悪い。4層は明黄褐色5～10cm大礫混シルト～極細粒砂。非常に硬くしまった地山層である。

【検出遺構】1区において南西に若干張り出すような緩やかな弧を描く溝(SD1)を1条検出した。SD1は、1・2層下面検出遺構であることから、本来の遺構構築面や基盤層などは不明。検出規模は、長さ：9.0m以上幅：1.1～2.5mである。深さは南東部では10cm程度と浅いが、北西部に移行するに従い深さを増し、最深部は約80cmを測る。断面形状は、円弧の内側に相当する方の肩の傾斜が急を呈し、不整形な輪形を成す。埋土はブロック土の5層(上から①～⑤層)である。この内、本遺構の廃絶段階に形成された①層内からは、土師器や須恵器が、拳大～一抱え大の大礫をはじめ、釘などの鉄製品と共に多量に出土した。遺物群は、出土状況判断すると、円弧の内側方面から投棄されたような様相が読み取れる。遺物は、土師器、須恵器、金属製品などが多量に出土した。概ね6世紀後半～7世紀初頭に帰属する遺物群と推測されるが、6世紀初頭や8世紀初頭の個体も若干混在している。

(2) 出土遺物：

【須恵器】

蓋：1～3は、天井部中央に扁平で中央がやや窪んだつまみの付く蓋である。口縁部は八字上に開き、端部は丸い。口縁部と天井部の境界にはぶい沈線が1条巡り、結果、断面形状が低い三角形を呈した稜を形成する。調整は回転ナデを主体とするが、天井部の上半は回転ヘラケズリを行う。天井部中位付近にはぶい沈線が1条巡る。この沈線と稜に区画された部分には左斜位の斜行櫛指点文を施す。その他、3者ともに口径：10.5～11.0cm、器高：3.8～4.1cmに納まるほか、焼成も良好で、堅緻な仕上がりがりであり、色調も灰色～暗灰色を呈するなど類似点が多い。58(子持ち器台高杯)の蓋の可能性が高い。

4～6は有蓋高杯の蓋と推測される。4・5は口縁部と天井部の境界が不明瞭な個体である。やや丸みを持つ天井部の中央にはつまみを貼り付ける。5のつまみは、扁平な算盤玉形を呈し、中央が若干窪む。中位には稜が走る。調整は天井部上1/2が回転ヘラケズリ以外は回転ナデを行う。6は口縁部と天井部の変化点にぶい稜を形成する個体である。天井部中央には扁平なボタン状のつまみを貼り付ける。調整は回転ナデ。天井部外面にはヘラ記号が見える。概ね中村編年のⅡ型式4段階(TK43)に属する。

7～18は杯蓋である。この内7～17は口縁部と天井部の境界が不明瞭で、天井部がなだらかな丸みを形成する個体である。口縁端部も丸く仕上げている。調整は天井部上半～全域に回転ヘラケズリを行うほかは回転ナデを施す。最終的に天井部内面最上位に指ナデを加える個体も見える。天井部外面にヘラ記号を施した個体(15・16)も確認できた。口径は11.8～15.0cm、器高は3.5～4.1cmと若干ばらつきがある。中村編年のⅡ型式4段階(TK43)に比定される。18は、形態的には前出の杯蓋と大差はない。調整は天井部外面が回転ヘラ切り未調整で仕上げられており、雑な作りである。口径は11.9cm、器高は3.7cmを測る。中村編年のⅡ型式5～6段階(TK209～TK217)を想定したい。

19～25は口縁端部内面付近にかえりを有する個体である。かえりは、口縁端部より下方に伸びる個体がほとんどで、僅かに23のみ、ほぼ同じ高さである。概ね天井部外面中央には、扁平な錠室珠様のつまみを貼り付けたと推測される。調整は天井部外面上1/3～上半を回転ヘラケズリする以外は回転ナデ。最終的に天井部内面最上位に指ナデを加える個体も見える。口径を見ると、9.6～10.9cm(19～22)と12.7～15.0cm(23～25)の二極化が認められる。中村編年のⅢ型式2段階(TK217～TK46)に比定される。

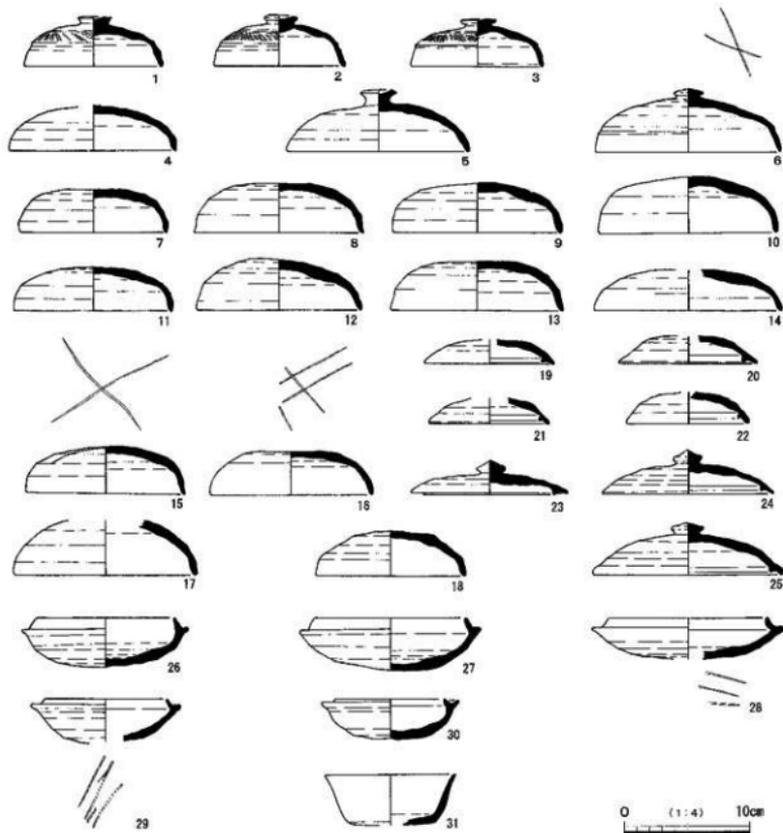
杯：26～31は杯。26・27は口縁部が内傾し短く立ち上がる個体で、端部は丸い。受け部は上外方へ短く開く。調整は杯部下2/3を回転ヘラケズリする以外は回転ナデ。Ⅱ型式4段階(TK43)項を想定したい。28は口縁部が短く外反し、丸い端部を有する個体。受け部は水平に短く伸びる。杯部は26・27に比して浅い。調整は体部下1/2を回転ヘラケズリする以外は回転ナデ。杯部外面にはヘラ記号あり。Ⅱ型式5段階(TK209)に比定される。

29・30は杯Hである。口縁部は短く内傾し、端部は丸い。受け部は上外方に短く伸びる。29では口縁

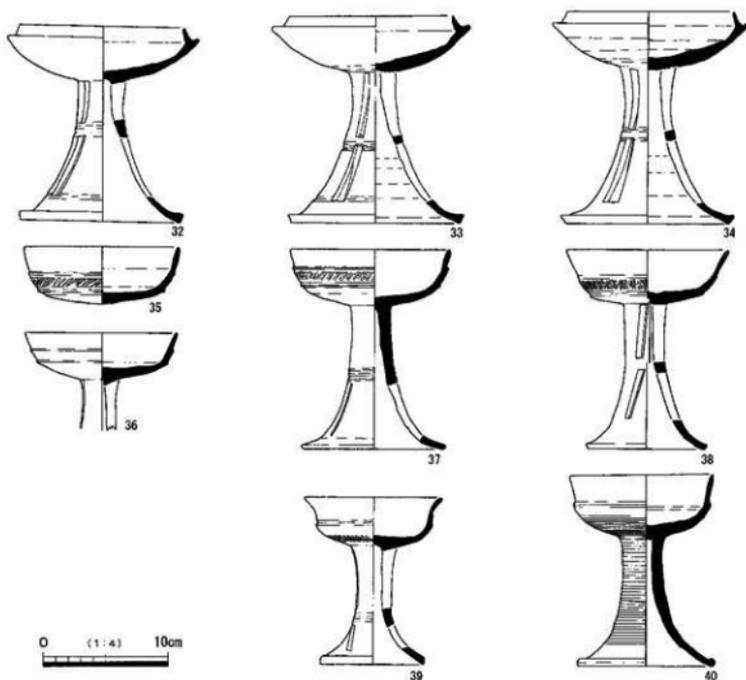
端部高が受け部端部高より高い位置に認められるが、30ではそれらがほぼ等高になり、やや時期的に後出を感じる。杯部はやや深めで、半球状を呈する。調整は、杯部下位を回転ヘラ切り未調整後、回転ヘラケズリを施し、回転ナデで仕上げる。29の杯部外面にはヘラ記号が見える。両者ともに概ねⅡ型式6段階(飛鳥Ⅰ)を想定したい。

31は口縁部が直線的に上外方に伸びた後、端部付近で小さく外反する個体で、端部は丸く、底面は平底を成す。調整は回転ナデ。底部外面にはナデ調整が見える。Ⅲ型式Ⅰ～Ⅲ段階に属する可能性が高い。

高杯：32～34は長脚の有蓋高杯である。口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部は丸い。受け部はほぼ水平～若干上外方に伸び、丸く終わる。杯部は浅い。脚部は緩やかに外反し、端部には内傾の平坦面を形成する。調整は、杯部下位外面に回転ヘラケズリが見える以外は、回転ナデである。脚部中位には2条1単位の沈線を施す。32・33については脚部下位にも1条の沈線が巡る。また、脚部には上下2段の長方形透孔(3方向・刺付均等)が穿たれる。その他、3者ともに口径：13.1～13.3cm、器高：15.9～



第50図 SD1出土遺物実測図1



第51図 SD1出土遺物実測図2

17.3cmと近似値を示すほか、焼成も良好で、色調も類似するなど共通点が多い。

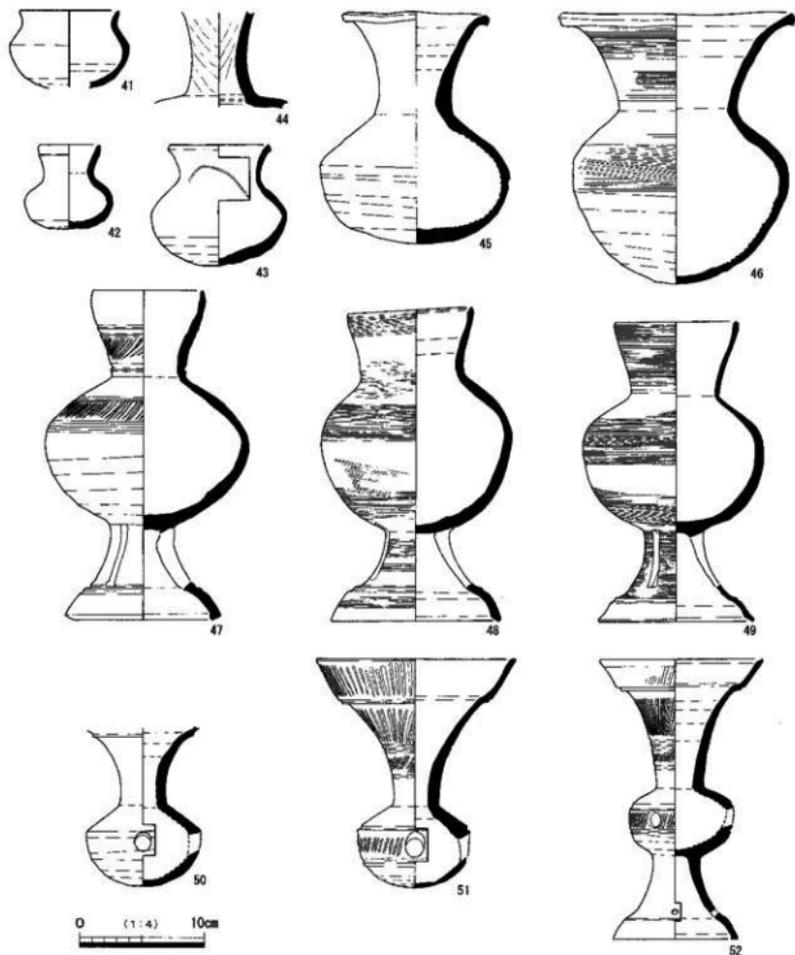
35～40は長脚の無蓋高杯である。この内、35～38は口縁部が直線的に上下方に開き、端部が丸く終わる個体である。脚部は概ね緩やかに外反し、端部を丸く終息させる個体(37)や、内傾のにぶい平坦面が見える個体(38)も存在する。調整は、杯底部外面に回転ヘラケズリが残る以外は回転ナデ。口縁部中位と口縁部と杯部の変化点付近には、それぞれ断面三角形を呈する小さな稜を1条形成する個体(35～37)と、にぶい沈線を巡らす個体(38)が存在する。これらの稜や沈線に区画された部分には、右斜位の斜行直線文を施す個体(35)や、斜行櫛揃烈点文を加える個体(37・38)も認められる。脚部中位には2条1単位の沈線を巡らす個体(37)も見える。最終的には、脚部において上下2段の透孔を2方向(36・割付均等)、および3方向(35・37・割付均等 38・割付不均等)穿つ可能性が高い。この内37の透孔は、刃物のような鋭利な道具による切り込みを透孔としている点が特徴的である。39・40は口縁部が外反し端部が丸く終息する個体で、口縁部と杯部の境界には1条のにぶい沈線が巡る。脚部は緩やかに外反し、端部は若干肥厚させ、小さな段を形成、にぶい平坦面を成す個体(39)と、丸く終わる個体(40)がある。調整は回転ナデ。39の杯底部外面には左斜位の斜行櫛揃烈点文が施されるほか、脚部中位やや下には2条1単位の沈線が巡る。この沈線の上下には長方形透孔(2方向・割付不均等)を穿つ。40は回転ナデ後カキ目調整を施すが、加飾は行われぬ。

壺：6個体(41～49)出土した。41～43は小型の壺である。いずれも体部最大径が中位に位置する半球形を成す。口縁部～口頭部形態は様々な様相を呈する。41は上外方に短く開く口縁部を有する個体で、

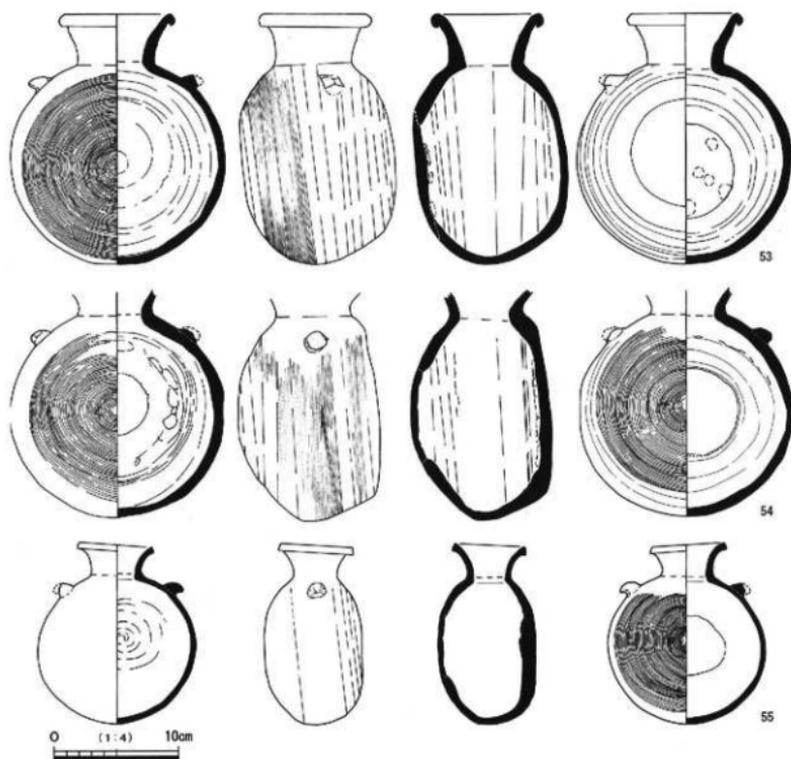
端部は丸く終わる。調整は、いずれも体部下位に回転ヘラケズリを加える以外は回転ナデである。42はほぼ直線的に上外方に開く口頸部と、そこから角度を若干急に転じる短い口縁部から成る。この変化点には非常に小さな稜が確認できた。端部は丸い。43は口縁部～口頸部は順次外反し、外傾の端面を形成する。42の口頸部外面にはヘラ記号文が見える。

44は長頸壺の口頸部～頸部碎片である。外反しながら上方に伸びる口頸部と大きく開く肩部を確認した。調整は回転ナデで、口頸部外・内面にはしほり痕が見える。

45・46は広口壺である。外反しながら大きく開く口縁部を形成する個体で、端部には平坦面が2面認め



第52図 SD 1 出土遺物実測図 3



第53図 SD1出土遺物実測図4

められる。体部は、やや扁平の個体(45)と球形に近い個体(46)に分類される。調整は、体部中位以下に回転ヘラケズリが施される以外は回転ナデを施す。その後46の口縁部～体部中位のみ、カキ目調整を加える。両者ともに焼成は良好である。

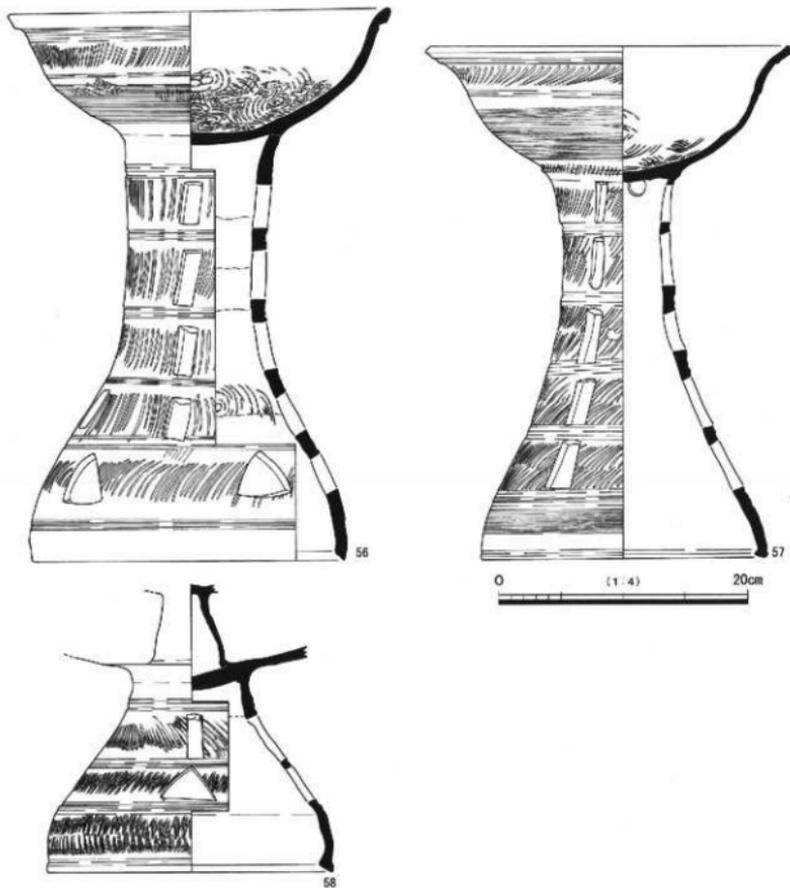
47～49は脚付壺である。いずれもほぼ完形品である。概ね、口頸部は外反気味に上上方に開いた後、やや角度を転じて内湾気味に直立する口縁部が続く。端部は丸く終息する個体(47・49)と内傾のにおい平坦面を形成する個体(48)に分かれる。体部は、中位付近に最大径を有する扁球形の個体(47)と、肩部付近が若干張るほぼ円球形を成す個体(48・49)が認められる。脚部は、外反した後、下位においてやや角度を内側に転じ、短く内湾して脚端部へと至る。脚端部には内傾の平坦面を有する個体(47)と外傾の平坦面を成す個体(48・49)がある。調整は、体部下半が回転ヘラケズリを施す以外は、概ね回転ナデである。その後、48・49では外面をカキ目調整で仕上げる。一方47を見ると、口頸部中位、頸部直上、体部上位、中位、脚部下位において、それぞれ2条1単位の沈線を施した後、口頸部と体部上位において、右斜位の斜行直線文で加飾を行う。3個体ともに、脚部には長方形透孔(3方向・割付均等)を穿つ。

はそう：50・51ははそうである。この内、51はほぼ完形品である。両者ともに、上上方に外反する口頸部と、そこから僅かに屈曲してほぼ直線的に上上方に向かう口縁部を形成する個体で、51の端部には

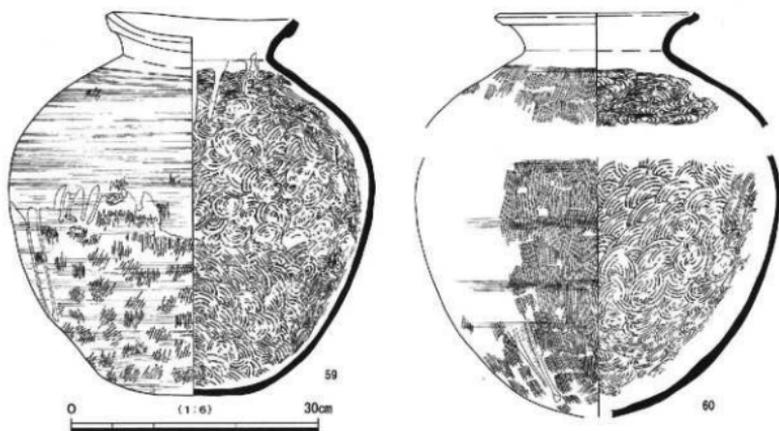
水平なふい平坦面も見える。体部は若干肩の張った半球形を成す。調整は、体部下1/3が回転ヘラケズリ以外は回転ナデである。その後、51では、口縁部と口頸部の変化点、口頸部中位と下位、体部上位と下位には、それぞれにふい沈線が施され、口縁部と口頸部上位には斜行直線文が、口頸部下位と体部中位には右斜位の斜行櫛描烈点文が加えられる。両者ともに、体部中位には円孔が1個穿たれる。

52は脚付はぞうのほは完形品である。口縁端部～体部までの形態や調整、裝飾などは11とほは同じである。脚部は外反気味に開いた後、下位において、やや角度を内側に転じ、短く内湾して水平な平坦面を有する脚端部へと至る。この小さな変化点にはふい沈線が1条巡る。沈線の直情には円形の透孔(4方向・割付不均等)が穿たれる。

提瓶：3個体(53～55)出土した。いずれも口縁部は外反する。端部を見ると、53では下外方に垂下させ、外傾のふい端面を形成するが、55では若干外傾の平坦面を作る。体部はいずれも正面円形を成し、



第54図 SD1出土遺物実測図5

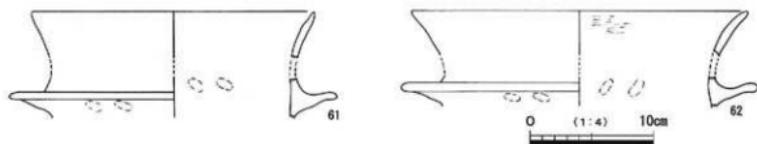


第55図 SD1出土遺物実測図6

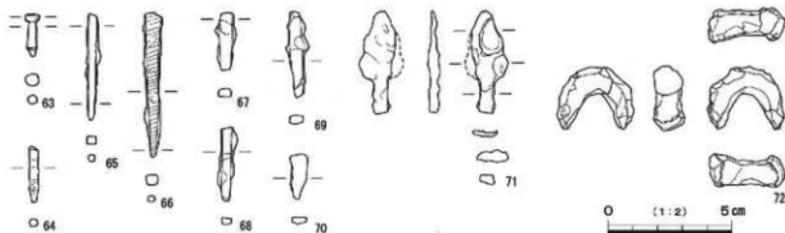
前面、背面ともに丸みを持つ個体(53)と、前面は丸く膨らみ、背面は平坦面を形成する個体(54・55)に分かれる。肩部で、口縁部中心軸上～若干背面に近い位置には、退化の顕著な鈎状(下向き)の把手が付く。調整は回転ナデ後体部前面を中心にカキ目が施される。体部前面には最後に蓋をした際の粘土接合痕が顕著である。器高は53・54が20cm前後に対し、55は15cm弱と小さい。

器台：56・57は高杯形器台である。兩個体ともにはほぼ完形品である。いずれも、杯部は内湾しながら上外方に開いた後、端部付近で反転しており、端部には平坦面(56：内傾 57：外傾)を形成する。脚部は、筒状の柱状部を経て後、内湾気味に開き、端部において外傾の平坦面を成す。頸部が若干細い分、56に比して57はスマートである。調整は、概ね平行タタキ後、カキ目調整である。内面には平行タタキに運動する同心円当具痕が僅かに残る。56の脚部内面には粘土接合痕が確認できた。調整後、杯部外面には、口縁端部直下と中位において、にぶい沈線が施され、これらに区画された部分に右斜位の斜行直線文が加えられる。脚部では、2条を1単位とするにぶい沈線が6帯廻り、それぞれの沈線帯に区画された部分(計5区画・上から1～5ブロック)には、右斜位の斜行直線文が施される。斜行直線文は、右上から左下に抜けるように施されるが、56の5ブロックと、57の4・5ブロックのものは、その逆の動きで刻まれている。また、56の斜行直線文が1帯につき1段に対し、57の方は概ね2段である点が特筆される。これらの装飾が行われた後、透孔を穿つ。56では、1～3ブロックにおいて長方形透孔(各1段・3方向・割付均等)が穿たれる。一方、以下のブロックについては、4ブロックでは長方形透孔が4方向(割付不均等)から穿たれるほか、5ブロックでは三角形4個と長方形2個の計6個の透孔(三角形・三角形・長方形・以下同じ 割付不均等)が施され、複雑な配置を呈する。57では、各ブロックに長方形の透孔(各1段・計5段・3方向・割付均等)を穿つほか、頸部直下のみ円形透孔(1段・3方向・割付均等)が、前者の長方形透孔と互い違いになりように穿たれており、56に比して単調な規格性を見出すことが可能である。

58は子持ち器台。脚部は内湾気味に開き、端部には外傾の平坦面を形成する個体で、杯部内面中央には高杯と推測される脚部を貼り付けている。調整は回転ナデを主体とし、その後外面には2条1単位(上3帯)と1条1単位(下1帯)の沈線を計4帯加え、それにより区画された部分(計3区画・上から1～3ブロック)には、それぞれ波状文による装飾を行う。波状文は1・2ブロックが1段、3ブロックが2段である。最後に、1ブロックに長方形、2ブロックに三角形の透孔(各1段・3方向・割付均等)を穿つ。



第56図 SD 1 出土遺物実測図7



第57図 SD 1 出土遺物実測図8

甕：大型の甕が2個体(59・60)出土した。この内、59はほぼ完形品である。共に外反する短い口縁部を有し、端部は外方に若干肥厚させ、平坦面を形成している。体部は最大径が中位付近に位置し、底部は丸底を成す。調整は、口縁部が回転ナデ、以下は外面を縦位～やや右斜位の平行タキ後カキ目調整を行い、内面には平行タキに連動する同心円当具痕が見える。59の肩部外面には自然釉が観察される。

【土師器】 61・62は羽釜の口縁端部～鈿部碎片である。口縁部は外反しながら上外方に伸び、丸く終息する。鈿部は水平～若干上外方に伸び、丸く仕上げる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、指ナデやハケナデが行われた可能性が高い。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。胎土には角閃石を含む。

【金属製品】 鉄釘(63～70)、鉄鏃(71)、用途不明鉄製品(72)がある。鉄釘は、頭部が折損した個体がほとんどを占める。この内63は、扁球を呈する頭部が遺存していた。身部断面形状は、円形(63・64)、正方形(65)、長方形(66～70)に区分できる。いずれの個体も、先端部に向かって細く鋭利になり、それに従い、断面形状も円形に近い形状を示すようになる。断面法量などから推測すると、概ね大型品(66～70)と小型品(63～65)に分類できる。外面に木質が付着した個体(64・66・69)も確認した。木質は、釘に対して横方向の個体のみである。鉄鏃(71)は、有茎で鏃身外形が長三角形を呈する個体である。鏃身関節部は角間か斜間と推測され、逆刺は認められない。鏃身断面は扁平で、平造りに分類される可能性が高い。茎部は折損のため、詳細は不明。断面形状は長方形である。用途不明鉄製品(72)は、平面U次形の個体で、断面形状は円形を呈する。先端に向かうほど、細く終息する。

(3)まとめ：今回の調査における第1の成果は、SD 1の検出である。SD 1は、平面形状から判断すると、調査地北東付近に中心点をもつ円弧を描く溝であった可能性が高い。また、廃絶段階に投棄されたことが予測される遺物群は、後期古墳に副葬される遺物と類似する器種構成を有し、さらに木棺などに打ちつけられた可能性の高い釘が出土したことが特筆される。以上のことからSD 1は、主体部をはじめとする墳丘のほとんどが削平を受けた円墳の周濠の一部であると判断し、SD 1より出土した遺物群は、本来周濠の内側に存在したであろう横穴式石室内に副葬されていた遺物群であった可能性を指摘しておきたい。この場合、古墳の帰属時期は、出土遺物から判断すると、6世紀後半に築造され、6世紀末～7世紀初頭に造葬が行われたことが考えられる。

本調査区の東約20m地点に造営された6世紀後半の大石古墳は、墳丘主体部の遺存状態も良好であったことから、SD1内出土遺物が大石古墳に副葬されていた遺物の可能性は低い。したがって、大石古墳とは異なる別の古墳が今回の調査地付近に存在した可能性が高くなった。

最後に、今回検出したSD1より構成された円墳は、八尾市教育委員会により楽音寺8号墳と命名されたことを付加しておく。

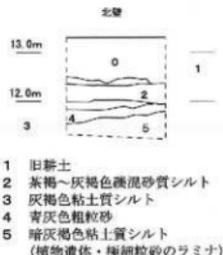
参考文献

- ・杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏡について」『橿原考古学研究所論集 第8号』
- ・坪田真一 1995「高安古墳群 大石古墳(財)八尾市文化財調査研究会報告44」(財)八尾市文化財調査研究会

2-21 東弓削遺跡(2006-17)の調査

(1)調査概要：当地は、市教委調査地(98-572)の北西に隣接する。敷地中央部に2m四方のトレンチを設定した。市教委調査地の成果を参考に、現地表から約2mの深さまで機械・人力を併用して調査を実施した。盛土は1.0m程度あり、以下に1層旧耕土が0.1mの厚さで堆積する。4層青灰色粗粒砂は包水層で、瓦・瓦器等の極小破片が数点含まれていた。最下で確認した5層暗灰褐色粘土質シルトもまた包水層で、植物遺体と極細粒砂のラミナが認められる。

(2)まとめ：これらのうち、4層が市教委調査地で検出した落ち込み(=⑦層)に対応するものと考えられる。この調査では、多量の瓦が出土したが、当地では明確な下がりりは検出できず、遺物も極少量出土したのみである。



第58図 断面図

参考文献

- ・酒 齋 2000「9. 東弓削遺跡(98-572)の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告42平成11年度国庫補助事業

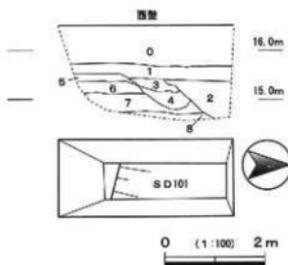
2-22 水越遺跡(2006-164)の調査

(1)調査概要：平面規模約1.5×3.5m、面積約5.25㎡の調査区を建物基礎部分に設定し、現地表(16.5m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北東部の道路交差点内：17.7m)を使用した。

【地層】0層は盛土。1層は10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で、弥生時代中期の遺物を含む層である。2層はN2/0黒色細粒砂混粘土、3層は7.5YR4/6褐色粗粒砂～細礫、4層は5B4/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂で、2～4層は溝(SD101)の埋土である。5層は7.5YR4/6褐色細粒砂混粘土で、上面は土壌化しており、遺構を検出した。6層は5B4/1暗青灰色細粒砂混粘土。7層はN2/0黒色粘土。8層は5B5/1青灰色細粒砂～粗粒砂である。

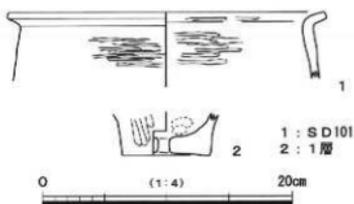
【検出遺構】5層上面で溝1条(SD101)を検出した。SD101は遺構の北側に調査区外にあるため、規模等の詳細は不明である。検出した平面形状は南東～北西方向に直線に伸びる。この溝は南東～北西へ流れると推測される。

(2)出土遺物：SD101内から弥生土器(中期 II 様式頃：1)、1層内から弥生土器(中期 II 様式～IV



第59図 平・断面図

様式頃：2)の破片が出土した。1は斐。「く」の字に屈曲する口縁部で、端部は面を持つ。口縁部内面横方向のミガキ後ヨコナデ、外面ヨコナデ。体部内外面横方向のミガキを施す。色調は7.5YR4/6褐色で、粘土中には角閃石が多く含まれている。2は底部有孔土器。突出する平底では中央に孔が開いている。底部内面ナデ、外面縦方向のミガキを施す。色調は5YR4/8赤褐色で、角閃石を多く含む。



第60図 出土遺物実測図

(3)まとめ：今回の調査地の北側約70m地点の調査(水越遺跡第2次調査)では、弥生時代中期の遺構を多数検出しており、居住域の存在が明らかになっている。今回の調査では、弥生時代中期の遺物を含む遺構および地層を確認したことから、同時期の集落が南側に広がっていることが判明した。

参考文献

・西村公助 1997「V 水越遺跡第2次調査(MK89-2)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告57]財団法人八尾市文化財調査研究会

2-23 美園遺跡(2005-503)の調査

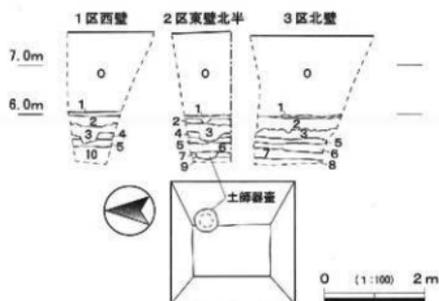
(1)調査概要：建設予定地内に3箇所(1・2区-2.5×2.5m、3区-2.5m×1.7m)の調査区を設定し調査を行った。総面積約17㎡、調査深度2.6m。調査で使用した標高値は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地南側約20mの敷地内：8.1m)を使用した。

【地層】0層は近年の盛土、1層は旧耕土である。2・3層は攪拌の著しいグライ化した層相で、1区では2層下面に起伏が見られ、2・3区では3層下面に溝状の落ち込みが見られる。作土と考えられ、時期は中世～近世であろう。4・5層も攪拌された層相で、Mn斑・Fe斑を多く含む土壌化層である。6層は1・2区で見られた古墳時代の遺物包含層である。2区ではこの下位の7層上面(T.P.+5.25m)で、

大形の土師器壺底体部

(1)を検出した。掘方は検出されなかったが、出土状況からみて土器棺の可能性もある。7・8層は1・2区で見られ、Fe斑を多く含む汚れた土壌化層である。2区9層はシルト～極細粒砂から成る水成層である。3区10層のシルト質粘土も水成層と考えられるが、ややブロック状を呈しており、作土の可能性もある。

(2)出土遺物：1は球形の体部を成し、体部最大径40.8cm・底径5.5cm・頸部径15.2cmを測



- 0：盛土
 1：N3/0暗灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト(旧耕土)
 2：5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト 下部に砂粒多
 3：7.5GY5/1緑灰色細粒砂～極細粒砂多混粘土質シルト Fe斑多
 4：5Y6/1灰色粘土質シルト Fe斑多
 5：2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混粘土質シルト Mn斑多 Fe斑多
 6：10YR5/1桶灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土 Fe斑多
 7：5Y6/1灰色粘土質シルト～シルト Fe斑多 汚れる
 8：2.5Y6/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト Fe斑
 9：7.5Y6/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂 Fe斑 水成層
 10：5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土 上部Fe斑多

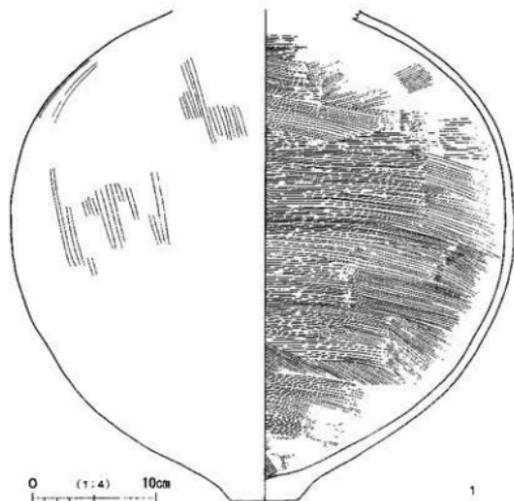
第61図 2区平面図・1～3区断面図

る。調整は磨耗のため不明瞭であるが、内面は全面ヨコハケ、外面は上半部に縦位ヘラミガキが一部で確認できる。生駒西麓産の胎土である。

(3)まとめ：1・2区で古墳時代の遺物包含層が確認され、2区では土器棺の可能性のある土師器壺を検出した。北西約100mには古墳時代前期の美園古墳が位置しており、有機的な関連も考えられる。

参考文献

・波辺昌宏他 1985『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター



第62図 出土遺物実測図

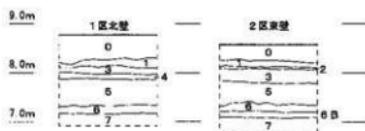
2-24 八尾寺内町遺跡(2006-71)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(西から1・2区)について、現地表(8.7m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南部を東西に伸びる市道中央：9.1m)を使用した。

【地層】現地表(8.7m)下0.4m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.6m間において7層の地層を確認した。1層は灰色(5Y5/1)粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト。水田耕作土である。2層は、水平ラミナの発達した灰白色(10Y7/1)シルトである。本調査地の東方に存在したであろう河川から供給された溢流堆積物と推測される。3層は灰色(5Y4/1)粘土質シルト。水田耕作土である。4層は黒褐色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト。1区でのみ確認した汚れの著しい地層である。5層はオリブ灰色(2.5GY6/1)シルト～細粒砂。河川堆積物である。6層は灰色(10Y4/1)シルト質粘土～粘土質シルト。黒色土器などの碎片が極少量混在する攪拌層である。水田耕作土の可能性が高い。7層はオリブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土。粘性に富んだ湿地性の堆積物である。下方ほど粗粒化し、ラミナ構造も顕著になる。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(3)まとめ：今回の調査では、1606年以降に形成された八尾寺内町に関する遺構、遺物の検出が予測された。結果は上記の通り、断面観察において水田耕作土の可能性が高い攪拌層を確認した。当該期における本調査地周辺は、『河内国若江郡八尾郷絵図(京都大学文学部地理学教室蔵)』から推測すると、八尾寺内町の北東付近に位置する。ここは、前出の絵図によると、『此処不残西郷領之内金地院永小作也』と



第63図 断面図(S=1/100)

墨書された箇所に対応することから、生産域であった可能性が高い。これは、今回の調査成果と符号しており、本調査地一帯が、八尾寺内町の内における生産域であったことが判明した。

参考文献

・櫻井敏雄・大草一憲 1988『寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内と八尾寺内を中心として—』八尾市教育委員会

2-25 矢作遺跡(2006-104)の調査

(1)調査概要:平面規模約2.0×4.0m、面積約8.0㎡について、現地表(10.4m前後)下2.4m前後までを調査した。調査で使用した標高は、西側市道の北約200m地点に位置する下水道工事の際設置の仮BM(9.237m)を使用した。

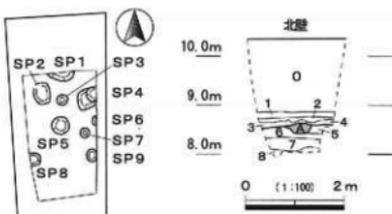
【地層】現地表(10.4m)下1.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.4m前後までの0.9m間において8層の地層を確認した。1層は黒色極細粒砂混粘土質シルトで、グライ化の著しい旧耕作土である。2層は緑灰色

極細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルトで1層の床土に当たる。3層黄灰色極細粒砂～極粗粒砂少混シルト質粘土(Fe斑・Mn斑)、4層灰色極細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土はブロック状を呈する土壌化層である。5層はにぶい黄色細粒砂～極粗粒砂少混粘土である。均質な層相で整地層の可能性ある。6層にぶい黄褐色細粒砂～細礫混シルト質粘土、7層灰黄褐色細粒砂～粗粒砂多混シルトは、Mn斑を多く含む土壌化層である。古墳時代中期～後期頃の土師器・須恵器・埴輪片を含む。8層は極細粒砂混シルト質粘土で水成層と思われる。上部には鉄分の沈着が著しい。

【検出遺構】5・6層上面でピット9個(SP1～9)を検出した。平面径はほぼ円形を呈し、直径約20cmと約35cmがある。埋土はSP1・4・5・7・8がA-褐灰色粗粒砂～細礫少混シルト質粘土(ブロック状・Mn斑・炭)、SP2・3・6・9がB-黄灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土(ブロック状・Fe斑)で、深さは前者が約25cm、後者が約10cmを測る。遺物はSP3・4・5・7・8から土師器・黒色土器・瓦器の小片が出土している。出土遺物からこれらのピットの時期は平安時代後期に比定される。

(2)出土遺物:SP8-1は黒色土器碗で、口径15.2cmを測る。調整は内外面に横位ヘラミガキを密に施す。7層-2は円筒埴輪片。磨耗のため調整は不明であるが、扁平な凸帯からみてV期に比定される。

(3)まとめ:今回の調査では、平安時代後期頃の居住域を確認した。西側に隣接する昭和61年度調査地では、中世の生産域が確認されており関連が窺える。また同調査では古墳時代後期の掘立柱建物が検出されているが、当調査では当該期の遺物包含層を確認したものの、遺構は検出されなかった。なお包含層中より埴輪片が検出されており注目される。



第64図 平・断面図



第65図 出土遺物実測図

参考文献

・米田敏幸 1987『矢作遺跡発掘調査概要』〔八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告15〕八尾市教育委員会

2-26 弓削遺跡(2005-504)の調査

(1)調査概要：規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡
2ヶ所(東から1・2区)について、現地表(12.8m前後)下2.0m前後までを調査した。なお、調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図に記載の標高値(調査地北東部に位置する弓削公園の南西角：12.3m)を使用した。

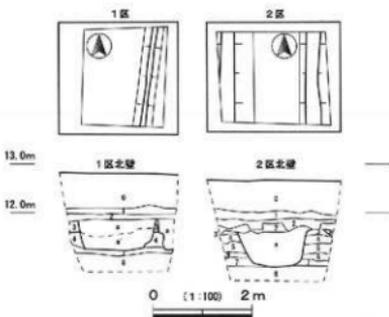
【地層】現地表(12.8m)下0.6~0.7m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2m前後までの1.3~1.4m間において8層の地層を確認した。1層はオリブ黒色細礫~中礫混極細~細粒砂。旧耕土である。2層は暗緑灰色極粗粒砂~細礫混細粒砂。2区では、細~中粒砂の混ざり具合で、さらに2層に細分できる。3層は暗緑灰色細粒砂のラミナ。4層はオリブ黒色細粒砂~細礫混シルト。灰色細~中粒砂ブロック混じる。5層はオリブ黒色細粒砂~細礫混シルト。中粒砂多く、細礫少量混じる。6層は暗緑灰色シルト混極細~細粒砂。7層は暗緑灰色細~中粒砂混粘土質シルト。8層はオリブ黒色粘質シルト。1区では土器片が混じり、2区では細粒砂が混じる。

【検出遺構】4層から切り込む土坑を1区で2基、2区で2基確認。これらの土坑は、幅1.4~1.6m、深さ0.6~0.7m、調査区外へと続くため、全長は不明であるが、南北方向に長軸をもつと考えられる。また、平行して並ぶように掘削されており、調査地一帯に同じような土坑が掘削されていると思われる。埋土(a層)は、灰色中粒砂~細礫でラミナは見られず、人的に充填されている。また、埋土中層で、酸化鉄の沈着が見られた土坑もあった。洪水砂層(4層)の上面から掘削され、その掘削は埋没した水田作土層まで達している。また掘削後、土坑内に人為的に洪水砂が充填されている点から、これらの土坑が池島・福万寺遺跡や船橋遺跡で確認されている近世の災害復旧坑(水田土壌復旧型)であると考えられる。

(2)出土遺物：第67図に挙げた高杯は、2区の6層から出土した。図化できた遺物は、これ1点のみである。本例は、口縁端部が水平で、屈曲する杯部をもち、退化した凹線を辛うじて確認できるので、IV様式木からV様式初めに比定される。灰白色をした非生駒西麓産胎土をもつ。7・8層からも弥生土器片が極少量出土しているが、細片であり、各層は、縄属時代の決め手に欠く。

(3)まとめ：今回の調査では、出土遺物が小片であり、各層の明確な時期は決めかねるが、旧耕土を除く6層の耕作土層と災害復旧坑を確認できたことは、本地域での水害からの復旧作業をどのようにして行われてきたかを知る手がかりとなる。弥生時代中期末~後期初頭の高杯細片が出土したが、約80m北に位置する弓削遺跡(97-444)調査区でも、同時期の土器が出土しており、付近一帯の標高11.0m前後に弥生時代中期末~後期初頭にかけての遺構が広がっている可能性が高い。

参考文獻
・清 斎 1999.3「弓削遺跡(97-444)の調査」【八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告41 平成10年度公共事業】八尾市教育委員会
・清 斎 2001.3「15弓削遺跡(99-524)の調査」【八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告44 平成12年度国庫補助事業】八尾市教育委員会



第66図 平・断面図



第67図 出土遺物実測図

図 版

(平成17年度1～3月の調査：図版1～4)



1-1 太田遺跡(2005-366)の調査(土器出土状況：東から)



1-1 太田遺跡(2005-366)の調査(調査状況：東から)



1-2 太田川遺跡(2005-473)の調査(全景：北から)



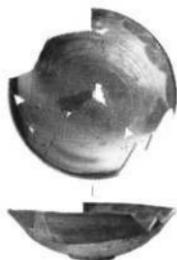
1-2 太田川遺跡(2005-473)の調査(西壁：東から)



1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査(全景：西から)



1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査(北壁：南から)



1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査出土遺物

1



1-3 東郷遺跡(2005-364)の調査出土遺物

5



1



2



3



4



5



6



8



9



10



12



14



16



17



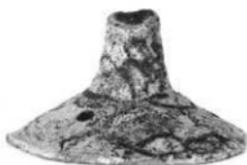
18



23



24



26



27



28



31



32



33



6



11



8



9



13



14



16



17



18



19

1-3 太田川遺跡(2005-473)の調査出土遺物

図 版

(平成18年度 4～12月の調査：図版5～22)



2-1 跡部遺跡(2006-8)の調査(周辺状況:東から)



2-1 跡部遺跡(2006-8)の調査(1区西壁:東から)



2-2 太田遺跡(2006-160)の調査(7層下面:南から)



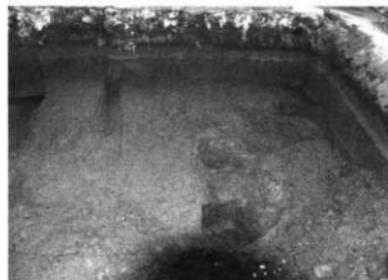
2-2 太田遺跡(2006-160)の調査(北壁:南から)



2-3 太田川遺跡(2005-484)の調査(周辺状況:北東から)



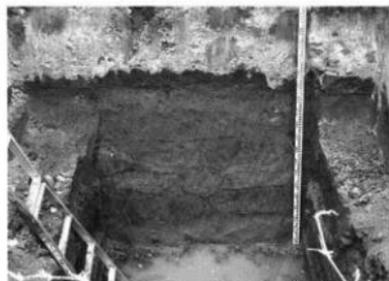
2-3 太田川遺跡(2005-484)の調査(1区東壁:西から)



2-4 久宝寺遺跡(2006-13)の調査(2区全景:南から)



2-4 久宝寺遺跡(2006-13)の調査(3区全景:北から)



2-5 久宝寺遺跡(2006-174)の調査(1区北壁：南から)



2-5 久宝寺遺跡(2006-174)の調査(6区西壁：東から)



2-6 久宝寺遺跡(2006-298)の調査(6x501出土遺物：東から)



2-6 久宝寺遺跡(2006-298)の調査(5区全景：西から)



2-7 教興寺跡(2006-98)の調査(2区第1面：北から)



2-7 教興寺跡(2006-98)の調査(3区東壁：西から)



2-8 郡川遺跡(2006-166)の調査(周辺状況：北西から)



2-8 郡川遺跡(2006-166)の調査(北壁・東壁：南西から)



2-9 成法寺遺跡(2006-195)の調査(周辺状況：南西から)



2-9 成法寺遺跡(2006-195)の調査(1区東壁：西から)



2-10 成法寺遺跡(2006-302)の調査(1区全景：北東から)



2-10 成法寺遺跡(2006-302)の調査(1区西壁：東から)



2-11 神宮寺遺跡(2006-196)の調査(1区北壁：南から)



2-11 神宮寺遺跡(2006-196)の調査(2区東壁：西から)



2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査(2区北壁：南から)



2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査(4区北壁：南から)



2-13 大正橋遺跡(2006-242)の調査(周辺状況：北西から)



2-13 大正橋遺跡(2006-242)の調査(1区東壁：西から)



2-14 東郷遺跡(2006-23)の調査(1区東壁：西から)



2-14 東郷遺跡(2006-23)の調査(2区第1面：西から)



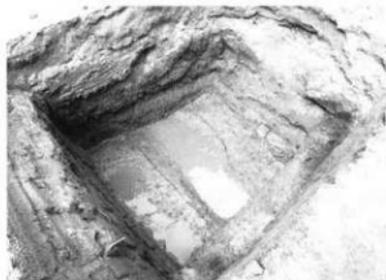
2-15 中田遺跡(2006-506)の調査(周辺状況：東から)



2-15 中田遺跡(2006-506)の調査(西壁と全景：東から)



2-16 中田遺跡(2006-285)の調査(周辺状況：南から)



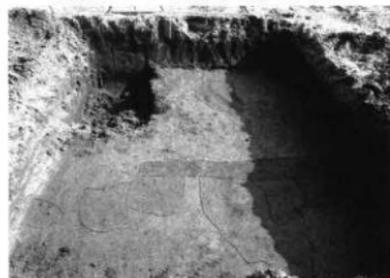
2-16 中田遺跡(2006-285)の調査(全景：南東から)



2-17 西郡鹿寺(2006-216)の調査(1区第1面:東から)



2-17 西郡鹿寺(2006-216)の調査(1区第2面:南から)



2-18 西郡鹿寺(2006-314)の調査(1区第1面検出状況:西から)



2-18 西郡鹿寺(2006-314)の調査(1区第1面掘削状況:西から)



2-18 西郡鹿寺(2006-314)の調査(SD101断面:南から)



2-18 西郡鹿寺(2006-314)の調査(5区第1面:西から)



2-19 西郡鹿寺遺跡(2006-15)の調査(2区東壁:西から)



2-21 東弓削遺跡(2006-17)の調査(北壁:南から)



2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1全景：南東から)



2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1全景：北東から)



2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1西壁：東から)

2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1出土遺物：北から)



2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1出土遺物：北東から)



2-20 花岡山遺跡(2006-6)
の調査(SD1完壁：南東から)

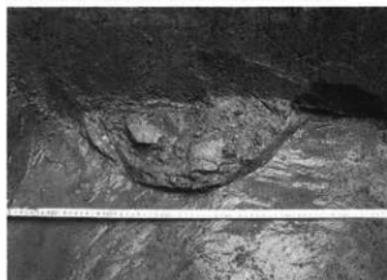




2-22 水越遺跡(2006-164)の調査(周辺状況：北から)



2-22 水越遺跡(2006-164)の調査(西壁：東から)



2-23 美園遺跡(2005-503)の調査(2区遺物出土状況：西から)



2-23 美園遺跡(2005-503)の調査(2区全景：南から)



2-24 八尾寺内町遺跡(2006-71)の調査(2区東壁：西から)



2-26 弓削遺跡(2005-504)の調査(1区全景：南西から)



2-25 矢作遺跡(2006-104)の調査(全景：南から)



2-25 矢作遺跡(2006-104)の調査(北壁：南から)



4



5



6



15



19



26



16



17



18



21



22



20



12



13



23



24

2-6 久宝寺遺跡(2006-298)の調査出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



11



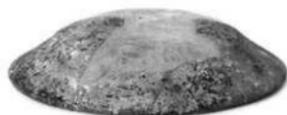
12



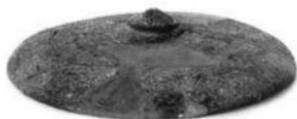
16



18



20



23



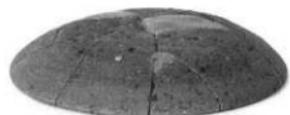
24



26



15



19



21



25



27



28



29



30



31



32



33



34



37



38



39



40



42



43



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



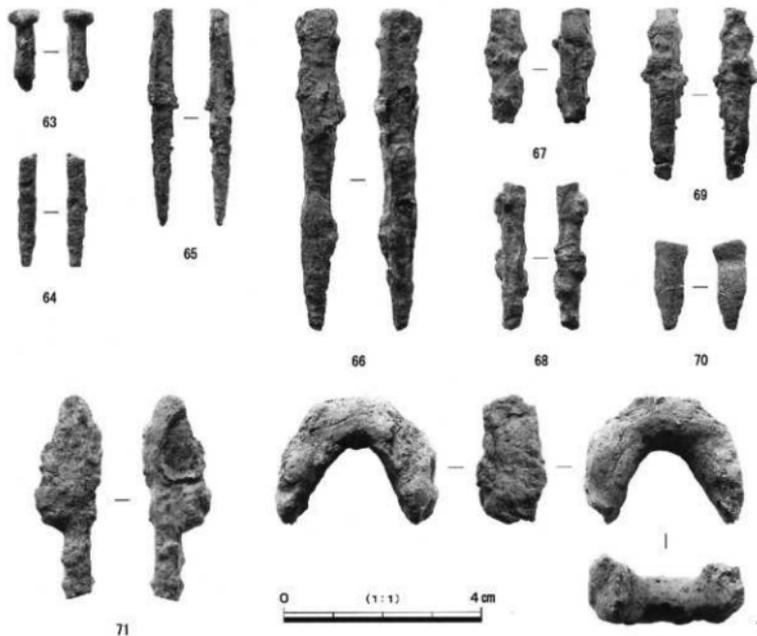
57



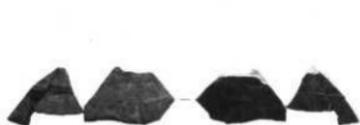
58



59



2-20 花岡山遺跡(2006-6)の調査出土遺物区



2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査出土遺物

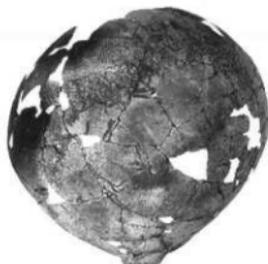


2-25 矢作遺跡(2006-104)の調査出土遺物



2-12 太子堂遺跡(2006-170)の調査出土遺物

11



2-23 美園遺跡(2005-503)の調査出土遺物

2

1

報告書抄録	
ふりがな	やおしないいせきへいせい18ねんどはくつちょうさほうこくしょ
書名	八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書
副書名	平成18年度国庫補助事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	55
編著者名	原田昌則 坪田真一 成海佳子 西村公助 蛸口 薫 島田裕弘 菊井佳弥
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 TEL072-924-8555
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
1-1 太田遺跡 (2003-366)	八尾市太田新町1	27212	68	34 35 31	135 35 19	2006/02/02-07-08	56.25	分譲住宅 (遺構確認調査)
1-2 太田川遺跡 (2005-473)	八尾市大竹1	27212	55	34 37 59	135 38 21	2006/03/23-24	35	コンビニエンスストア (遺構確認調査)
1-3 東部遺跡 (2005-364)	八尾市東本町3	27212	37	34 37 33	135 36 22	2006/3/29	11	共同住宅 (遺構確認調査)
2-1 跡部遺跡 (2006-8)	八尾市跡部本町3	27212	64	34 36 46	135 35 06	2006/4/20	12	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-2 太田遺跡 (2006-160)	八尾市太田新町1	27212	68	34 35 30	135 35 26	2006/8/4	4	事務所 (遺構確認調査)
2-3 太田川遺跡 (2005-484)	八尾市水越1	27212	55	34 37 59	135 38 21	2006/6/20	18.75	共同住宅 (遺構確認調査)
2-4 久宝寺遺跡 (2006-13)	八尾市南久宝寺3	27212	23	34 37 11	135 35 19	2006/04/18-19	70	共同住宅 (遺構確認調査)
2-5 久宝寺遺跡 (2006-174)	八尾市南久宝寺1	27212	23	34 37 18	135 35 38	2006/10/24-25-31 11/01	54	共同住宅 (遺構確認調査)
2-6 久宝寺遺跡 (2006-238)	八尾市神武町	27212	23	34 37 21	135 35 08	2006/11/13-14	45	工場 (遺構確認調査)
2-7 教興寺跡 (2006-98)	八尾市教興寺6	27212	19	34 36 51	135 38 18	2006/10/10-12	20	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-8 郡川遺跡 (2006-166)	八尾市郡川4	27212	60	34 37 07	135 38 32	2006/9/11	4	個人住宅発掘調査
2-9 成法寺遺跡 (2006-195)	八尾市跡部光園1	27212	73	34 37 04	135 36 09	2006/9/19	16	分譲住宅・長屋住宅 (遺構確認調査)
2-10 成法寺遺跡 (2006-302)	八尾市南本町3	27212	73	34 37 09	135 36 26	2006/11/9	18	共同住宅 (遺構確認調査)
2-11 神宮寺遺跡 (2006-196)	八尾市神宮寺4	27212	49	34 35 54	135 38 01	2006/8/23	12.5	共同住宅 (遺構確認調査)
2-12 太子堂遺跡 (2006-170)	八尾市南太子堂3	27212	62	34 36 26	135 35 28	2006/9/22	49	分譲住宅 (遺構確認調査)

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
2-13 大正 八尾市太田8 遺跡	大正 八尾市太田8	27212	27	34 35 01	135 36 02	2006/11/2	9	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-14 東郷 八尾市本町1 遺跡	東郷 八尾市本町1	27212	37	34 37 32	135 36 12	2006/5/31	15.25	兼用住宅 (遺構確認調査)
2-15 中田 八尾市中田1 遺跡	中田 八尾市中田1	27212	28	34 36 57	135 37 03	2006/4/14	4	個人住宅発掘調査
2-16 中田 八尾市東町8 木北6 遺跡	中田 八尾市東町8 木北6	27212	28	34 36 44	135 37 18	2006/10/24	5	個人住宅発掘調査
2-17 西郷 八尾市幸町3 原寺 遺跡	西郷 八尾市幸町3 原寺	27212	46	34 38 41	135 36 31	2006/11/10	12.5	診療所 (遺構確認調査)
2-18 西郷 八尾市東町2 原寺 遺跡	西郷 八尾市東町2 原寺	27212	46	34 38 42	135 36 25	2006/11/15 ~17	61	片隣(遊技場) (遺構確認調査)
2-19 西郷 八尾市東町2 原寺遺跡	西郷 八尾市東町2 原寺遺跡	27212	46	34 38 39	135 36 24	2006/4/20	8	作業用事務所 (遺構確認調査)
2-20 花岡 八尾市東町6 山遺跡	花岡 八尾市東町6 山	27212	77	34 38 20	135 38 47	2006/04/24・ 25・26・27・28 ~05/01・02	61.5	個人住宅発掘調査
2-21 東町 八尾市東町3 削3 遺跡	東町 八尾市東町3 削3	27212	31	34 35 58	135 37 14	2006/4/17	4	個人住宅発掘調査
2-22 水越 八尾市千塚2 遺跡	水越 八尾市千塚2	27212	42	34 37 43	135 38 23	2006/7/31	5.25	個人住宅発掘調査
2-23 美園 八尾市美園町3 遺跡	美園 八尾市美園町3	27212	34	34 38 06	135 35 48	2006/4/4	17	倉庫 (遺構確認調査)
2-24 八尾 八尾市本町5 寺内町遺跡	八尾 八尾市本町5 寺内町	27212	880	34 37 32	135 36 04	2006/5/30	12.5	共同住宅 (遺構確認調査)
2-25 矢作 八尾市高美町3 遺跡	矢作 八尾市高美町3	27212	74	34 36 60	135 36 40	2006/7/6	8	個人住宅発掘調査
2-26 弓削 八尾市弓削町3 遺跡	弓削 八尾市弓削町3	27212	71	34 35 35	135 37 01	2006/5/29	8	分譲住宅 (遺構確認調査)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
1-1 太田遺跡 (2005-366)	集落	古墳時代初期	土坑	古式土師器	
1-2 太田川遺跡 (2005-473)	集落	弥生時代後期~古墳時代中期	溝・小穴	弥生土器・土師器・須恵器 石製品	
1-3 東郷遺跡 (2005-364)	集落	古墳時代前期~中世	土坑・小穴	古式土師器・瓦器	
2-1 跡部遺跡 (2006-8)	集落	奈良~平安時代	遺物包含層・河川	土師器・須恵器	
2-2 太田遺跡 (2006-160)	集落	中世	落込み	土師器	
2-3 太田川遺跡 (2005-484)	集落	弥生時代後期~古墳時代初期			
2-4 久宝寺遺跡 (2006-13)	集落	古墳時代後期~中世	土坑・溝・井戸	土師器・須恵器・瓦器	
2-5 久宝寺遺跡 (2006-174)	集落	奈良~平安時代	落込み	土師器・須恵器・土製品	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
2-6 久宝寺遺跡 (2006-298)	集落	弥生時代後期～古墳時代初頭	小穴・落込み	弥生土器・古式土師器	
2-7 教興寺跡 (2006-98)	集落	中世～近世	土坑・溝	土師器・須恵器・瓦器	
2-8 郡川遺跡 (2006-166)	集落	古墳時代後期～中世	土坑・溝・井戸	土師器・須恵器・瓦質土器・瓦	
2-9 成法寺遺跡 (2006-195)	集落	中世		瓦器	
2-10 成法寺遺跡 (2006-302)	集落	中世後半	土坑	瓦	
2-11 神宮寺遺跡 (2006-196)	集落	弥生時代後期～古墳時代	溝・落込み・畦畔		
2-12 太子堂遺跡 (2006-170)	集落	古墳時代後期～平安時代	落込み	土師器・須恵器・製塩土器	
2-13 大正橋遺跡 (2006-242)	集落	中世～近世			
2-14 東郷遺跡 (2006-23)	集落	平安時代～中世	柱穴・溝	土師器・黒色土器・瓦器・瓦	
2-15 中田遺跡 (2005-506)	集落	平安時代	土坑・溝	土師器・須恵器・瓦	
2-16 中田遺跡 (2006-285)	集落	弥生時代後期～古墳時代後期	土坑・溝	弥生土器・土師器・須恵器	
2-17 西郡廃寺 (2006-216)	集落	古墳時代後期～中世	溝・落込み	土師器・須恵器・瓦器・瓦	
2-18 西郡廃寺 (2006-314)	集落	古墳時代～中世	土坑・小穴・溝	土師器・須恵器・黒色土器・瓦	
2-19 西郡廃寺遺跡 (2006-15)	集落	古墳時代～中世	小穴・井戸	土師器・瓦質土器	
2-20 花岡山遺跡 (2006-6)	古墳	古墳時代後期	周濠	土師器・須恵器・金属製品	楽音寺8号墳
2-21 東弓削遺跡 (2006-17)	集落	中世	落込み	瓦器・瓦	
2-22 水越遺跡 (2006-164)	集落	弥生時代中期	溝	弥生土器	
2-23 美岡遺跡 (2005-503)	集落	古墳時代前期～中世		土師器	
2-24 八尾寺内町遺跡 (2006-71)	集落	近世			
2-25 矢作遺跡 (2006-104)	集落	古墳時代中期～平安時代後期	小穴	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器 埴輪	
2-26 弓削遺跡 (2005-504)	集落	弥生時代中期～後期初頭	土坑	弥生土器	

八尾市文化財調査報告55
平成18年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書

発行日 2007年3月31日

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町1-1-1

TEL(072)924-8555 (直通)

印刷 (株)近畿印刷センター

<八尾市刊行物番号 H18-107>

